大学教育と女性

2002年関西大学学生の意識調査

関西大学人権問題研究室女性問題研究班

もくじ

１．はじめに …… 41
２．調査の概要 …… 42
　２－１　調査の目的 …… 42
　２－２　調査項目と分析・執筆担当 …… 43
　２－３　調査方法・回収状況 …… 44
　２－４　調査対象の属性 …… 45
３．調査結果の概要 …… 50
４．調査結果の分析 …… 53
　４－１　大学生活のなかで …… 53
　　４－１－１　入学前の期待と入学後の実感
　　４－１－２　性別役割意識・行動の変化
　　４－１－３　相談相手
　　４－１－４　生活技能の性差
　　４－１－５　「生まれ変わり」願望
　　４－１－６　「女性が職業を持ち続ける」への支持と生育歴
　　４－１－７　まとめ
　４－２　大学が女性の人生にもたらすもの
　　―― 将来の職業や人生設計 ―― …… 72
　　４－２－１　職業準備のために
　　４－２－２　職業観
　　４－２－３　就職に際して重視する条件
　　４－２－４　女性の人権が尊重されていないと感じること
　　４－２－５　まとめ
　４－３　女性観・男性観・結婚観 …… 93
　　４－３－１　家庭でのメッセージ
　　４－３－２　「女性らしさ」「男性らしさ」の抑圧

４－３－３　性的関係（セクシュアリティ）
４－３－４　恋愛観、結婚観
４－３－５　まとめ
４－４　大学教育の実態
――教育の目的と手段――……127
４－４－１　関西大学で学びたいテーマ
４－４－２　男女関係や性差別問題に関する学習機会
４－４－３　男女の望ましい関係をもてる社会のために
４－４－４　高校時代の教育と今後の課題
４－４－５　まとめ
４－５　大学教育の今後
――記述式回答の分析――……139
４－５－１　はじめに
４－５－２　授業への要望
４－５－３　大学への要望
４－５－４　教員への要望
４－５－５　要望なし
４－５－６　まとめ
５．調査の総括と関西大学の課題……153
●調査票
●集計表

1．はじめに

人権問題研究室女性問題研究班では，これまで２年ごとに女性問題に関するさまざまなテーマを掲げ，研究活動を行ってきたが，それとは別に，本研究班は一貫して「高等教育と女性」を共同研究テーマとしてきた。その一貫として，2002年９月に「大学教育と女性 —— 関西大学学生の意識調査」を実施した。この報告は，今回の調査の結果をまとめたものである。

本研究班は，1987年と1993年にも関西大学の学生を対象とした意識調査を行い，その結果をこの紀要の16号と29号でそれぞれ報告している（本文中，「87年調査」「93年調査」と述べられているのは，これらの調査を指す)。今回の調査は，学生のジェンダー意識[1]や進路意識などを把握するとともに，これまでの調査との比較を通して，学生の意識の変化を明らかにすることに重点を置きながら，今後の大学における教育改革の取り組みのための基礎資料を得ようとしたものである。

前回の93年調査以降，日本における女性を取り巻く状況は大きく変化した。「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（DV 防止法)，「男女共同参画社会基本法」の制定や，改正「男女雇用機会均等法」の施行など，法整備が進んだ一方で，長期不況のもと，女性の雇用状況は一段と深刻さを増し，女性学生の就職については，「超氷河期」と呼ばれる状態が続いている。教育の場でも，ジェンダーフリー教育の実践が緒についたといえるが，その取り組みを批判し，男らしさ，女らしさを積極的に肯定しようとする主張も，一部の勢力からではあるが，日増しに強くなってきている。こうした混沌とした状況のなか，学生の意識はどのよう

---

[1] ジェンダー（gender）ということばは，生殖器の違いにもとづく生物学的な性差を示すセックス（sex）という概念に対して，社会的・文化的に形成された性役割や行動様式などの性差（「女らしさ」「男らしさ」）を意味する概念として用いられている。

であるのか，本報告では興味深いデータが示されているといえる。

女性問題研究班では，これまでの調査を通して明らかになった課題に応えるべく，研究活動に取り組んでいきたい。調査に協力してくれた学生のみなさんに感謝するとともに，今後の議論を呼びかけたい。

２．調査の概要

２－１　調査の目的

「女らしさ，男らしさ」というジェンダーの枠組みで個人の生き方を評価し，批判する傾向は，現代社会においても未だ根強い。「そんなことは女には相応しくない」「男ならこれができて当たり前だ」などと，個人の行動，思考に過剰に干渉するという事象は，わたしたちの日常生活の至る所に溢れている。それは大学という教育の場でも同様である。

しかし，「教育の場は男女平等である」「大学までは女性差別はないが，社会に出ると女性差別に出会うことになる」といった見方は，学生のなかに少なくない（現に，今回の調査票の自由記述式回答にも，こうした記述がいくつかみられた)。差別という現象は，誰の目にも明らかなかたちで初めから存在するのではなく，それを自覚する人たちが多数となって，社会的にその存在が認知されるのである。そのことは，近代社会において人権概念が次第に広がり，深化してきたことをみても明らかである。それゆえ，「当たり前」「普通」とみなしてきた現象が，実は他者にとって，あるいは自分にとって不当であり，人権侵害であることが少なくないという事実に気づくことの意味は大きい。日常生活のなかで，他者の言動に何かしら不快な気持ちを抱いたという漠然とした経験が，この気づきによって明確に言語化され，不当な権利侵害であると認識されるのである。また，他者に対する何気ない，ごく普通の言動が，この気づきによって，その相手を抑圧し，傷つけていたことを認識するのである。

「女らしさ，男らしさ」という生き方の枠組みについても，それが当たり前で，普通だと考えている限り，その抑圧を感じることはない。しかし，それが「自分らしく生きる」という生き方にとって大きな障害となっている現実に気づくと，「女らしさ，男らしさ」という生き方の押しつけがもつ抑圧を強く感じるようになる。そして，こうした気づきは，自分自身の生き方を考えると同時に，他者の生き方を理解し，尊重することにつながっていく。

学生にこうした気づきの機会を提供するとともに，学生が自分自身と他者との関係に考えをめぐらせることができる授業をどのようにつくっていくのかという課題のもと，本調査では学生の意識の客観的把握と，これまで２回の調査との比較による学生の意識の変化を明らかにすることに努めた。

２－２　調査項目と分析・執筆担当

２－２－１　調査項目

(1) フェイスシート部分（問１，２，３，４）

(2) 大学生活の実態（問５，６，７，８，９）

(3) 将来の職業や人生設計（問10，11，12，13，14，15）

(4) 女性観・男性観・結婚観（問16，17，18）

(5) 教育と男女平等（問19，20，21，22）

(6) 男女の望ましい関係のために（問23，自由記述）

２－２－２　分析・執筆担当

２　　石元清英

３　　石元清英

４－１　田中欣和

４－２　金谷千慧子

４－３　宮前千雅子

４－４　源淳子

４－５　石元清英

５　　石元清英

２－３　調査方法・回収状況

２－３－１　調査対象と抽出

2002年７月１日現在の第１部，第２部全学部の１年次生と３年次生を対象に，在学生より一定の割合で無作為抽出した女性1,000名と男性1,000名を調査対象とした。ただし，休学者は除いた。

２－３－２　調査期間

１．調査対象となった学生に調査票を９月20日に郵送した。

２．10月７日に督促を兼ねた礼状を調査対象者全員に郵送した。

３．10月31日を回収の最終締め切りとした。

２－３－３　本報告書の表示について

本報告書において百分率は，小数第２位を四捨五入して，小数第１位までを示している。したがって，図表に示された数値の合計が100にならないことがある。

２－３－４　回収状況

本調査の回収状況は，表２－３－１に示したとおりである。

表２－３－１　回収率

		学生数	調査対象	回収数	回収率
1年次	女性	2,426	500	165	33.0%
	男性	3,849	500	123	24.6
	計	6,275	1,000	288	28.8
3年次	女性	2,456	500	175	35.0
	男性	4,092	500	118	23.6
	計	6,548	1,000	293	29.3
総数	女性	4,882	1,000	340	34.0
	男性	7,941	1,000	241	24.1
	計	12,823	2,000	581	29.1

女性に比べて男性の回収率が低く，前回の93年調査（女性44.3%，男性26.6%）と比べると，男女とも，今回の調査のほうが低く，とくに女性の回収率が10ポイントほども低下している。

２－４　調査対象の属性

有効回答サンプルの属性をみると，以下のようである。

表２－４－１は，学部別構成を示したものである。女性では文学部と社会学部の構成比が高く，男性では工学部の構成比が高い。

表２－４－１　回答者の学部別構　（人，%）

	n	法学部	文学部	経済学部	商学部	社会学部	総合情報学部	工学部
総数	581	14.1	21.2	10.8	12.4	18.8	8.6	14.1
女性	340	14.1	29.1	8.5	10.6	24.7	7.9	5.0
男性	241	14.1	10.0	14.1	14.9	10.4	9.5	27.0

つぎに，学年別構成をみると，表２－４－２のようである。

表２－４－２　回答者の学年別構成　　（人，％）

	n	１年次生	３年次生
総数	581	49.6	50.4
女性	340	48.5	51.5
男性	241	51.0	49.0

浪人経験の有無をみると（表２－４－３），女性では約１割，男性では約３割の学生が浪人を経験している。93年調査と比較すると，93年調査では浪人経験があると回答したのは，女性21.9％，男性50.4％で，浪人経験のある学生が大幅に減少している。

表２－４－３　浪人経験の有無　（人，％）

	n	有	無	不　明
総数	581	20.0	79.9	0.2
女性	340	10.9	88.8	0.3
男性	241	32.8	67.2	—

表２－４－４は，出身高校の構成を示したものである。93年調査と比較すると，共学の構成比は，女性で82.8％→80.9％，男性で71.8→69.7％と，わずかではあるが，共学の高校出身者が減少している。

表２－４－４　出身高校の構成　　（人，％）

	n	共　学	別　学	その他	不　明
総数	581	76.2	21.7	1.7	0.3
女性	340	80.9	18.2	0.6	0.3
男性	241	69.7	26.6	3.3	0.4

同居家族の有無をみると（表２－４－５），単身で住んでいる学生は，男女とも２割ほどで，93年調査（女性25.7％，男性27.8％）に比べて，わずかに減少している。

表２－４－５　家族と同居しているか　（人，％）

	n	単身で住んでいる	家族と同居している	その他
総数	581	22.9	74.7	2.2
女性	340	23.5	75.6	0.6
男性	241	22.0	73.4	4.6

アルバイトの状況をみると，表２－４－６のようである。93年調査では，「大体いつもしている」は，女性25.7％，男性41.7％だったので，アルバイトを大体いつもしている学生は，女性で増え，男性で減少している。

表２－４－６　アルバイト　（人，％）

	n	大体いつもしている	ときどきしている	まったくしていない	不明
総数	581	43.2	31.0	24.3	1.5
女性	340	47.4	29.7	21.5	1.5
男性	241	37.3	32.8	28.2	1.7

アルバイトをしている学生について，アルバイトからの収入額をみると，表２－４－７のようである。

表２－４－７　アルバイトによる月収　（人，％）

	n	５万円まで	５～10万円	10万円以上	その他	不明
総数	237	55.0	39.7	2.3	2.3	0.7
女性	152	58.0	38.5	1.5	1.1	0.8
男性	85	50.3	41.4	3.6	4.1	0.6

母親の就業形態を示した表２－４－８をみると，男女とも「再就職後，パートの仕事をしている」がもっとも多く，ついで「ずっと専業主婦である」が多くなっている。「結婚前からずっとフルタイムの仕事をしている」は，男女とも15％前後である。

表２－４－８　母親の就業形態　（人，％）

	総数	女性	男性
n	581	340	241
結婚前からずっとフルタイムの仕事をしている	14.8	14.4	15.4
再就職後，フルタイムの仕事をしている	4.0	5.3	2.1
再就職後，パートの仕事をしている	33.9	35.3	32.0
ずっと専業主婦である	26.9	24.1	30.7
独立して自営業を営んでいる	3.3	2.1	5.0
家族と一緒に自営業を手伝っている	8.8	10.0	7.1
農（林・漁）をしている	0.9	0.9	0.8
その他	7.1	7.6	6.2
不明	0.5	0.3	0.8

表２－４－９は，保育経験を示したものであるが，これによると，「まったく経験がない」が男女とも６割台で，もっとも多く，保育経験がある学生では，「３歳以上からずっと」が男女とも多くみられる。

表２－４－９　保育経験　（人，％）

	総数	女性	男性
n	581	340	241
零歳の時からずっと	4.0	4.7	2.9
１～３歳頃からずっと	6.0	7.1	4.6
３歳頃まで	1.9	1.8	2.1
３歳以上からずっと	18.2	16.5	20.7
小学校から	0.9	0.6	1.2
ほんの少しの間	6.2	5.3	7.5
まったく経験がない	62.3	63.8	60.2
不明	0.5	0.3	0.8

父親の学歴をみると（表２－４－10），男女とも「４年制の大学卒業」がもっとも多くなっている。

表２－４－１０　父親の学歴　（人，％）

	総数	女性	男性
n	581	340	241
中学または高校卒業程度	39.2	41.8	35.7
短期大学卒業	2.1	2.1	2.1
４年制の大学卒業	51.5	49.7	53.9
専門学校卒業	3.1	2.4	4.1
その他	1.9	2.1	1.7
不明	2.2	2.1	2.5

母親の学歴では（表２－４－11），男女とも「中学または高校卒業程度」がもっとも多く，「４年制の大学卒業」は20％程度となっている。

表２－４－１１　母親の学歴　（人，％）

	総数	女性	男性
n	581	340	241
中学または高校卒業程度	44.6	44.4	44.8
短期大学卒業	24.6	25.0	24.1
４年制の大学卒業	21.0	21.2	20.7
専門学校卒業	7.4	7.9	6.6
その他	0.5	0.3	0.8
不明	1.9	1.2	2.9

３．調査結果の概要

今回の調査結果については，その単純集計をまとめた基礎集計表を巻末に示すとともに，詳細な分析を第４章で行っているが，ここでは特徴的な点を中心に調査結果の概要を紹介したい。

(1)　「入学前に持っていた大学への期待」について，過去２回の調査では，「職業など自分の将来を決める」「友人・知人を得る」「学問・勉学」等の項目が女性のほうに多くあがり，女性の意欲的な姿勢が目立っていたが，今回の調査では，上記の項目が男性でも多くあがっており，性差は小さくなっている。

(2)　サークルの合宿で，食事の後かたづけを女性だけでしている状況を事例として，２つの対立する意見（「女性だけでするのはおかしい」「別に男性にやってもらわなくてもよい」）への賛否を聞いたところ，「どちらかといえば」を含めて，「男女ともいっしょにすべき」という回答が男女とも７割を超えた。この傾向は，過去２回の調査でもみられた（ただし，その回答の割合は，87年，93年とも６割台）。そして，実際はどうであるのかを問うと，過去２回の調査では，男女ともに「女性が中心」が多くみられたが，今回の調査では「男女同じように」が増え，その割合は，女性では「女性中心」とほぼ同じ，男性では「女性中心」を20ポイントほども上回っている。

(3)　「困ったときの相談相手」については，男女ともに「友人」がもっとも多く，ついで「母親」となっているが，「先生」は女性で5.0%，男性で4.1%と，「アルバイト先や職場の上司」を大きく下回っている。

(4)　食事を作ったり，洗濯をするなどの生活技能については，項目により大きな性差がみられたが，その性差よりも「単身」，親と「同居」という居住形態の違いによる差が大きくみられた。そして，母親が「ずっとフルタイム」で働いている学生と，「ずっと専業主婦」である学生とのあい

だには，男女とも大きな格差がみとめられる。

(5)　「女性には女性らしさという抑圧がある」「男性には男性らしさという抑圧がある」という考えについての質問では，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した学生は，前回の調査に比べて減少しており，「女性らしく，男性らしく」という抑圧をあまり感じないという回答が増えている。

(6)　「男性は女性の前で弱音を吐くべきではない」という意見に対して，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という回答は，前回の調査でも，前々回の調査に比べて減少傾向にあったが，今回の調査ではさらに減少している。同様の傾向は，「デートの時，コーヒー代ぐらいは男性が持つべきだ」という意見に対する回答でもみられ，男性では前々回の調査から一貫して大幅に減少している。しかし，女性については，87年から93年にかけて15ポイント減少していたが，今回は93年に比べて５ポイントほど上昇している。

(7)　「夫婦別姓が認められるのはよいことだ」という意見に対する回答では，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて，女性は87年42.9％，93年61.6％，今回75.0％と，大幅に増え，男性でも同じく，32.9％，42.1％，59.7％と，女性に比べて割合が低いものの，増加傾向をみせている。「夫婦別姓を強く望む異性は，結婚相手にしたくない」という意見に対する回答では，「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせて，女性69.4％，男性73.4％と，男性のほうが高くなっている。夫婦別姓を認めるかどうかでは，女性のほうにそれに賛成する回答が多かったが，自分に関わる問題となると，男性のほうに夫婦別姓を受け入れる回答が多くなっているのである。

(8)　「希望する仕事に就けるよう，何かしているか」という質問に対して，「大学以外の勉強に重点を置いている」という回答が前回の調査に比べて男女とも増えており，「とくに何もしていない」が大幅に減少している（女性24ポイント減，男性13ポイント減）。

(9) 女性のライフスタイルと職業に関しての意見では，女性では「ずっと職業を持ち続ける」（53.8％），男性では「子育て後，再就職」（40.2％）がもっとも多く，「結婚・出産で退職，以後職業は持たない」が女性12.1％，男性20.3％となっている。前回の調査と比べると，女性では「ずっと職業を持ち続ける」の割合がほとんど変わらず，「子育て後，再就職」が３ポイントほど減少しているが，「結婚・出産で退職，以後職業は持たない」が7.6％から12.1％と，増加している。一方，男性では「ずっと職業を持ち続ける」が９ポイント増，「結婚・出産で退職，以後職業は持たない」が11ポイント減と，男性のほうで意識の変化が大きくなっている。

(10) 就職に際して重視する条件については，「やりがいがある」「安定している」が男女とも多くあがったが，「結婚出産後も働くことができる」（女性26.5％，男性2.1％），「男女とも実力で昇進が決まる」（女性24.1％，男性16.2％），「男女同一賃金である」（女性13.2％，男性1.2％）で，性差がみられた。「社会貢献を重視している」は，女性7.6％，男性15.8％と，男性のほうが高かった。

(11) 「関西大学で女性学の視点を入れたテーマとして，何を学びたいか」という質問では，男女とも「子どもの虐待」がもっとも多くあがり，女性では，これについで「海外の女性事情」「共働きと育児」，男性では，「男女雇用機会均等法」「セクシュアル・ハラスメント」が多かった。

(12) 「男女が望ましい関係を持てる社会にしていくために，関西大学はどのような改善や努力をすべきだと思うか」という質問では，男女とも「関連する科目を増やす」「学生の意識を改善する」「教員の意識を改善する」といった回答が多くあがった。

4．調査結果の分析

4－1　大学生活のなかで

4－1－1　入学前の期待と入学後の実感

5．入学前に持っていた大学への期待は主にどういうものでしたか。
（○は2つまで）

1．大学卒業の資格
2．職業など自分の将来を決める
3．友人知人を得る
4．学問や勉学
5．サークル・クラブ
6．ゆっくりする期間
7．その他
（具体的に　　）

問5で「入学前に持っていた大学への期待と思われるものを列挙し，主なもの二つを選んでもらったら「職業など自分の将来を決める」が男女とも1位であり，どちらも過半数が選んでいた。93年に比べて女性は3.4ポイント，男性では8.0ポイントの増加である。2位は女性で「友人・知人を得る」（1位だった93年から12.5ポイント減）男性では「学問や勉学」（3位だった93年から10.5ポイント増）となる。「学問や勉学」の男女差は93年では8.3ポイント女性が高かったが，今回は男性が3.7ポイントだけとはいえ高くなっている。

表4－1－1　入学前の期待（その他・NAは略）　（%）

	93年女	02年女	93年男	02年男
大学卒業の資格	13.3	15.0	15.4	22.4
職業などの自分の将来を決める	52.8	56.2	45.1	53.1
友人知人を得る	54.0	41.5	45.1	29.9
学問や勉学	32.7	31.2	24.4	34.9
サークル・クラブ	26.6	27.9	31.2	25.7
ゆっくりする期間	11.7	16.2	22.6	18.7

93年調査と比べると，とくに男性で「大学卒業の資格」「職業など自分の将来を決める」「学問勉学」が増え「友人知人を得る」「サークル・クラブ」「ゆっくりする期間」が減っているのが印象的である。長期不況の影響であろうか。前回では，男性の方に「ゆっくりする期間」といったモラトリアム志向派が多いと見えたが，今回はそうはいえない。

6．大学の入学の前と後でイメージや期待した内容と違ったことはありましたか。

表４－１－２　期待との違い　　(%)

項　　目	女性	男性
大いに違っていた	18.8	27.8
すこし違っていた	57.6	42.7
ほぼ同じ	23.2	27.4
全く同じ	0.3	2.1
N.A.	0.0	0.0

入学前後でのイメージや期待との違いについてきいて，「大いに違っていた」「少し違っていた」を合計すると，女性で76.4%，男性70.5%で大差はない。93年では、女性67.0%，男性59.7%であった。男性で「大いに違っていた」が93年よりも11.3ポイント上昇している。

４－１－２　性別役割意識・行動の変化

7．(1)あるサークルの合宿で，食事の後片づけを女子がやって，男子はテレビを見たりしていました。そのとき，A 子と B 子が次のように言いました。あなたはどちらの意見に近いですか。下の１～４の中から選んでください。

A 子：「女子だけやるのは，おかしいわ。男子もやるべきじゃない？」

B 子：「べつに，男子にやってもらわなくてもいいんじゃない。私たち女の子でできるんだから。」

1．A 子

2．どちらかといえばA 子

3．どちらかといえばB 子

4．B 子

(2)ところで上の例のような場合，あなたのまわりでは実際には後片づけはどのように行われているでしょうか。

1．女性が中心

2．男性が中心

3．男女同じように

この問７の(1)は87年，93年，今回と３回目，(2)は93年と今回で２回目である。調査に関った私たちの間では「A 子さん・B 子さん調査」とよんでいるが，性別役割分業観の推移をみるものである。

まず(1)の意識面をみる。

表４－１－３　性別役割分業観の推移　（%）

女性回答	87年	93年	02年
A　子	39.0	28.7	36,8
どちらかといえばA 子	26.6	34.3	36.5
どちらかといえばB 子	27.1	30.7	22.4
B　子	6.7	6.3	4.4
N　A	0.5	－	－

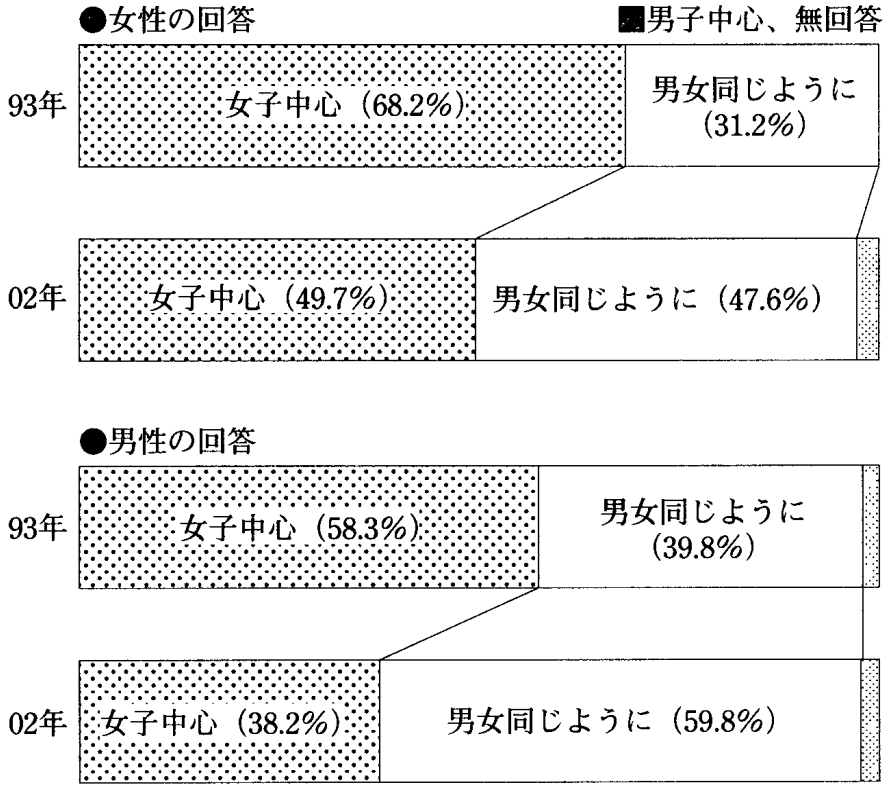
(%)

男性回答	87年	93年	02年
A　子	33.9	27.4	43.2
どちらかといえばA子	29.3	38.0	31.5
どちらかといえばB子	22.7	25.2	18.3
B　子	14.1	9.4	6.2
N　A	—	—	0.8

関西大学生では'87年以来一貫して，男女とも「A 子さん支持」つまり平等主義者が「B 子さん支持」の伝統的役割分業派よりはるかに多い。「どちらかといえば」を含めた A 子支持は今回調査では男女とも7割を超す。

しかし(2)できいた実際行動面では，'93年はやはり「女性が中心」が多く，意識と行動にズレがはっきりみられた。ところが今回調査では実際にも「男女同じように」が回答全体では5割強となった。「男性中心」はやはり少なく，男女の回答で差はあるもののこの9年間で大きく変っていることになる。

図４－１－１　実際の行動の推移



なお，問７(1)と問７(2)のクロスでは前回調査では，A 子支持者のまわりでは実際にも「同じように」なっていることが比較的多くなる傾向が一貫してみられたが，今回調査では「A 子」「どちらかといえば A 子」「どちらかといえば B 子」の間に差は小さい。はっきり「B 子」支持者のまわりでは女性回答で60.0パーセント，「女性が中心」は男性回答では73.3%で全体の回答比率にくらべて女性回答10.3ポイント，男性回答で35.1ポイント高かった。この「明確に B 子支持層」と全体の比較でも前回は女性約20ポイント，男性約30ポイントの差であった。

なお(2)の回答傾向は学年別でもほとんど差はない。

「どちらかといえば」を含む A 子・B 子支持別に問17－10の夫婦別姓支持率（「どちらかといえば」を含む）をみると男性回答では63.3%対47.4%と差があったが，女性回答では差はない。

意識面でも，また近年では行動面でも，関大生は男女平等主義，あるいは「ジェンダー・フリー」支持派になってきたことの傍証として，本年度の筆者（田中）のゼミの卒業論文のデータもご参考までに紹介しておきたい。

人権研の87年調査はISRO調査（Index of Sex Role Orientation. アメリカで開発された性役割志向性尺度。日本では東清和が日本版を作製。）を含んでいた。ISRO 得点は16点～80点の中で，高得点ほど伝統的性役割志向から解放されていることになる。佐々木俊嗣は87年人権研調査と比較するために2002年の関大生の分析を試みた（人権研調査は無作為抽出であるが佐々木や後述の坂本・影山の調査は教室配付である。しかし，佐々木の教室別データなどから見てそう極端な偏りがあるとは思わない)。その結果と87年調査のデータ等をつきあわせたのが表４－１－４である。

表４－１－４　ISRO平均点　（人，%）

学校名		関西大学	関西大学		関大　女性論		早稲田大学	同志社大学
実施年		2002	1987 Ⅰ部	Ⅱ部	1986 Ⅰ部	Ⅱ部	1986	1985
女子	n	155	356	31	22	33	244	246
	平均点	62.6	56.2	60.6	63.4	65.1	57.1	54.7
男子	n	123	269	35	44	37	589	902
	平均点	57.9	48.1	48.0	55.9	56.0	47.3	47.0

87年の関大Ⅰ部と比べて男性で9.8点，女性で6.4点も平均点が上っている。教育学科の専門科目もあるが，教職科目のクラスが多かったので，無作為抽出の場合よりいくらか高く出たと考えられるが，「女性論」等のクラスほど上るような構成ではないので，関大生全体としても上昇傾向にあるのだろうと推測する材料にはなる。

坂本雅哉は，内閣府調査（「日本の青少年の生活と意識（第２回調査)」2000年実施）での門脇厚司の分析に刺激を受け，佐々木と同様の教室配付であるが門脇の分析材料と同じ質問を行った。そして門脇が数量化第２類（似たもの集め）によってとり出した「新しい価値意識」の三つの軸を代

表する各５項目の質問について平均回答率を出し，内閣府調査の全体及び高学歴層のそれと比較しての関大生の特徴を把握しようとしたのが，表４－１－５である。

表４－１－５　新しい価値意識　（%）

	関大生平均	大学・大学院卒	2000年全体
弱者配慮	54.2	54.0	39.6
女性優遇	56.1	44.4	37.4
共生社会志向	57.9	53.0	43.4

内閣府調査でも「新しい価値意識」傾向において高学歴層は全体よりはっきりした傾向を示しているが，関大生はその高学歴層に比べても「女性優遇」（門脇の表現）において際立っていることになる。教職科目のクラスが多かったなどで関大生を十分に代表するサンプルではないとしても，他の二つの軸に比べてこの軸において目立つことは確かである。

もっともこれが関西大学生の特徴なのか，「関西の」大学生の特徴なのかは判らない。反差別・人権という理念の教育界での浸透度は中部地方以東に比べて西の方が強い（少くともタテマエのレベルでは）といわれるからである。「男女混合名簿」は大阪府下の小学校では2000年度ですでに73.8%であった。こういう素地を持つ地方出身の学生が多い大学ではある。その関西の中でも本学は一般的には人権問題の取組みでの先進的な大学の一つと考えられているが，こと女性問題に関するカリキュラムや積極的に取り組む専任教員の層の厚さという点では大阪で先進的とは決していえない。長年続いてきた総合コースの女性学が本年は開講できなかったほどである。おそらく大阪の主要大学の多くで坂本と同じような分析をすればやはり全国より高い男女平等主義の傾向が出るのではなかろうか。それは今後の課題となる。しかし関大生は全国の傾向と比較するなら望ましい方向で特徴的なものを示しているとはいえよう。

もっとも影山真佑の関大４年次生（2002年度に就職活動をした学年）対象の調査では雇用機会均等法の認識は余り高くない。影山の卒業論文は均

等法の認識水準がそのなかでも高い学生ほど就職活動中に見聞した企業による差別事例を多く挙げるということを示している。

人権研の「A 子さん・B 子さん調査」は関大生が「世間一般」の傾向よりはかなり平等主義的であること示しているが，以上のような学生たちの集めたデータもその認識を補強してくれるものである。

4－1－3　相談相手

8．困ったことがあったとき，相談する相手は誰ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

表4－1－6　相談相手　(%)

項　目	女性	男性
母親	60.0	40.2
父親	12.4	23.2
きょうだい	26.8	14.1
友だち	85.6	73.9
先生	5.0	4.1
アルバイト先や職場の上司・同僚	12.9	10.4
その他	12.9	6.6
誰にも相談しない	6.8	17.4
N.A.	0.3	0.4

男女とも「友だち」が１位，「母親」が２位。「父親」は男性では23.2%の３位であるが，女性では「アルバイト先や職場の上司・同僚」と並ぶ。「先生」が男女とも少なく「アルバイト先や職場」関係の半分以下ということには注目すべきである。「困ったこと」の内容にもよるにせよ，検討を要する。「誰にも相談しない」は男性では女性の場合よりかなり多い。「黙って耐える」ことが否定的結果を生むこともあるので注意を要しよう

（伊藤公雄『男性学入門』は青少年の「いじめによる自殺」は男性が圧倒的に多く，「いじめに関する電話相談」に電話をかけてくるのは圧倒的に女性が多いという事実に注目し，「弱音をはかない」「じっと我慢」といった男性に強い規範の問題性を論じている）。

なお，大阪府の中学生では「だれにも相談しない」が女子で12%，男子で26%であるという調査（『大阪の子どもたち —— 子どもの生活白書 —— 2001年版』大阪府人権・同和教育研究協議会）がある。「困ったこと」の内容が年齢によって違うにせよ，「相談しない」傾向は早くから性差がある。

4－1－4　生活技能の性差

9．あなたは次のようなことをしていますか。また，やればできますか。あてはまるところに○をつけてください。

	している	めったにしないがやればできる	したことがない
(1)ごはんを炊く	1	2	3
(2)おかずをつくる	1	2	3
(3)洗濯をする	1	2	3
(4)自分の部屋に掃除機をかける	1	2	3
(5)シャツのボタンをつける	1	2	3

今回はじめて生活技能や習慣に関する質問を入れてみたが，かなり興味深い結果がいくつかあった。

まず単純な性別集計を見ていく（NA 略）。

表４－１－７　生活技能・習慣（NA 略）　　（%）

(1)ごはんを炊く	全体	女性	男性
している	37.9	46.2	26.1
めったにしないがやればできる	54.2	47.6	63.5
したことがない	7.6	6.2	9.5

(2)おかずをつくる	全体	女性	男性
している	29.1	35.6	19.9
めったにしないがやればできる	59.0	57.9	60.6
したことがない	11.7	6.5	19.1

(3)洗濯をする	全体	女性	男性
している	38.4	42.1	33.2
めったにしないがやればできる	50.3	50.6	49.8
したことがない	10.8	7.1	16.2

(4)自分の部屋に掃除機をかける	全体	女性	男性
している	63.6	67.3	58.1
めったにしないがやればできる	34.7	31.2	39.4
したことがない	1.9	1.5	2.5

(5)シャツのボタンをつける	全体	女性	男性
している	36.2	49.9	17.0
めったにしないがやればできる	51.6	46.3	58.9
したことがない	11.9	4.1	22.8

当然のことながらすべてについて女性の方が「している」率は高い。しかし，(1)～(3)で女性でも「したことがない」は６～７％ある。「している」の５項目平均は，女性で48.2%，男性で30.9%であった。他方，「したことがない」の５項目平均は，女性で5.1%，男性で14.0%である。性差が最大なのは「シャツのボタンをつける」であった。後のクロス分析でもこの項目は少しちがった傾向をみせる。日常性における頻度の差，必要度の差もあったと考えられる。

人は必要に迫られれば「できる」「する」ようになるものだから，女

性・男性というだけでなく，居住条件の違い，「単身」居住か「家族と同居」かによって差があるに違いない。そこで「性別」×「居住条件」の４カテゴリーでの比較を試みたのが次の表４－１－８である（なお，「家族と同居」率の性差はほとんどない）。

表４－１－８　生活技能・性別・居住別（「その他」NA 略）　（%）

		女性		男性	
		単身	同居	単身	同居
ごはん	している	91.3	32.3	77.4	9.6
	めったにしないがやればできる	8.7	59.5	20.8	77.4
	したことがない	0.0	8.2	1.9	11.9
おかず	している	81.3	21.4	60.4	7.9
	めったにしないがやればできる	18.8	70.0	37.7	66.7
	したことがない	0.0	8.6	1.9	24.9
洗濯	している	98.8	24.1	100.0	10.2
	めったにしないがやればできる	1.3	66.5	0.0	66.7
	したことがない	0.0	8.9	0.0	22.0
掃除機	している	95.0	58.8	81.1	50.3
	めったにしないがやればできる	5.0	39.3	18.9	46.3
	したことがない	0.0	1.9	0.0	3.4
ボタン	している	68.8	43.6	20.8	16.4
	めったにしないがやればできる	28.7	51.8	62.3	57.6
	したことがない	2.5	4.7	17.0	24.3
「している」の５項目平均		87.0	36.0	67.9	18.9
「したことがない」５項目平均		0.5	6.5	4.2	17.3

「している」率の平均は「男性・単身」の方が「女性・同居」よりはるかに高い。居住条件が同一の場合「している」率平均の性差は単身で19.1ポイント，同居で17.1ポイントである。同性の場合の居住条件別の差を「している」率平均で見ると女性で51.0ポイント差，男性で49.0ポイント差である。「男性・単身」と「女性・同居」を項目別に比較していくと，「ボタンつけ」を例外として「男性・単身」の方が「している」率が高

い。同様に「したことがない」で比較しても「ボタンつけ」が例外となるが，それ以外では「男性・単身」の方が低い。「単身」の場合は男女にかかわらず必要に迫られて「できる」「する」ようになりやすいが，「同居」の場合には，男性では「おかずを作ったことがない」「シャツのボタンをつけたことがない」はおよそ四人に一人の割でいる。女性の場合は「同居」でも「したことがない」は少ない。ここに「しつけ」の性差がみえるが，女性でも「同居」なら「めったにしない」がかなり多い。

項目別で「シャツのボタンつけ」が他の項目とかなり違う数値になるのはボタンがとれてもあわてて対処しないですむだけの枚数を持っているということであろう。

その他の質問とのクロス分析でもっとも興味深いのは「母親のキャリア別」，特に「母は結婚前からずっとフルタイム」と「ずっと専業主婦」の差である。ここでも「性別」×「キャリア」の４カテゴリーでの比較を示すことにする。表４－１－９を見ていただく。

表４－１－９　生活技能・性別・母キャリア別（NA 略）　（%）

		女性		男性	
		ずっと フルタイム	ずっと 専業主婦	ずっと フルタイム	ずっと 専業主婦
ごはん	している	67.3	32.9	48.6	20.3
	やればできる	28.6	58.5	43.2	70.3
	したことがない	4.1	8.5	8.1	9.5
おかず	している	57.1	26.8	37.8	20.3
	やればできる	42.9	67.1	45.9	50.0
	したことがない	0.0	6.1	16.2	29.7
洗濯	している	63.3	31.7	62.2	21.6
	やればできる	30.6	59.8	29.7	48.6
	したことがない	4.1	8.5	8.1	29.7
掃除機	している	85.7	61.0	67.6	60.8
	やればできる	14.3	34.1	29.7	35.1
	したことがない	0.0	4.9	2.7	4.1
ボタン	している	44.9	45.1	13.5	18.9
	やればできる	53.1	47.6	62.2	52.7
	したことがない	2.0	7.3	24.3	27.0
「している」５項目平均		63.7	39.5	45.9	28.4
「したことがない」５項目平均		2.0	7.1	11.9	20.0

「している」率平均は「男性・母ずっとフルタイム」の方が「女性・母ずっと専業主婦」より高いことに注目すべきである。

母のキャリアが同じ場合の性差を「している」率平均で見ると「母・ずっとフルタイム」の場合女性が17.8ポイント高く，「ずっと専業主婦」で女性が11.8ポイント高い。「したことがない」率平均で見れば「ずっとフルタイム」で男性が9.9ポイント高く，「ずっと専業主婦」で男性が12.9ポイント高い。

同性の場合で母キャリアの差で見ていくと，「している」率平均なら，女性は「ずっとフルタイム」が24.2ポイント高く，男性も「ずっとフルタイム」が17.5ポイント高い。「したことがない」率平均は「ずっと専業主

婦」が女性で5.1ポイント，男性で8.1ポイント高い。

母キャリアの影響も，生活技能・習慣は，必要に迫られて身につけることが多いということで解釈できよう。それにしても「母が専業主婦であってこそしつけが行きとどく」といった常識の限界を示す結果であった。

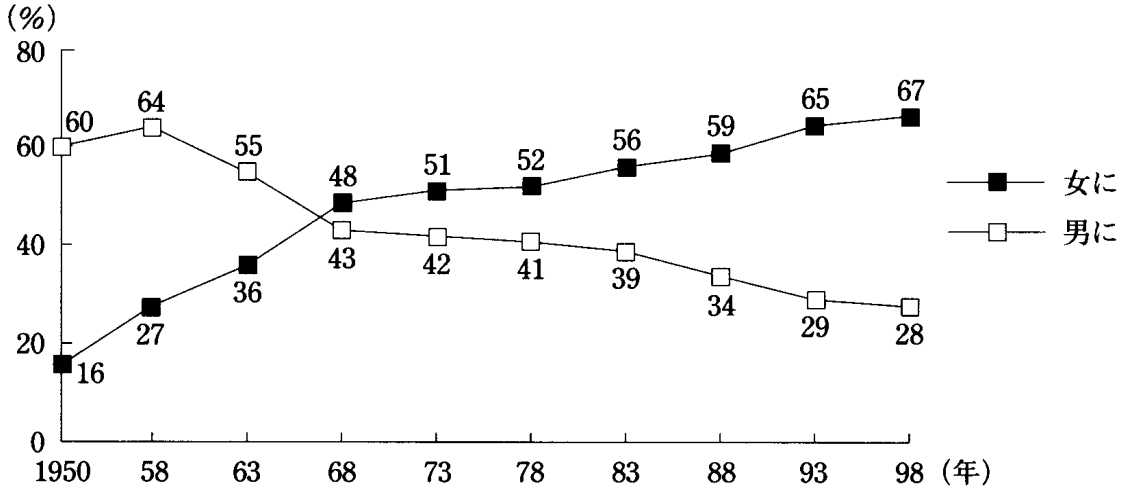
「保育所や学童保育の経験」とのクロスでも「全く経験がない」ものは「している」率が低い。これも母キャリアの差と同じことであろう。

「女の職業観」とのクロスでは，男性の場合「女性がずっと職業を持ち続ける」ことの支持者では「している」率が高かった。

４－１－５　「生まれ変り」願望

「日本人の国民性調査」（統計数理研究所）によって「生まれ変るなら男か，女か」への回答の戦後初期からの推移を『女性のデータブック・第３版』（井上輝子・江原由美子編）は，図４－１－２のようなグラフで示している（女性回答のみ）。

図４－１－２　生れかわるなら男か，女か（女性）



これは男女平等化の進展を当事者の感覚に即してトータルに示す良いデータではなかろうか。男性回答では戦後たいして変らず「異性への生まれ代り」願望は低い。

人権研調査としては今回はじめてこの質問を入れてみた（NA 略）。

表４－１－１０　生まれ代り願望　　(%)

	全体	女性	男性
同性に生まれ変りたい	49.4	44.7	56.0
異性に生まれ変りたい	25.3	33.2	14.1
どちらともいえない	24.6	21.2	29.5

「どちらともいえない」が多くなり過ぎてしまったが，女性回答での「異性への生まれ変り」願望率の高さが目につく。

近年の類似調査を見ても女性は特に若い層で「異性への生れ変り」願望率が高くなるようである。今回調査でも，学年差があり「異性へ生れ変りたい」は女性で１年次36.4%，３年次30.3%であった。男性は１年次で17.9%，３年次は10.9%である。

図４－１－３　生れかわるとしたら（未婚の青年男女，1988年）

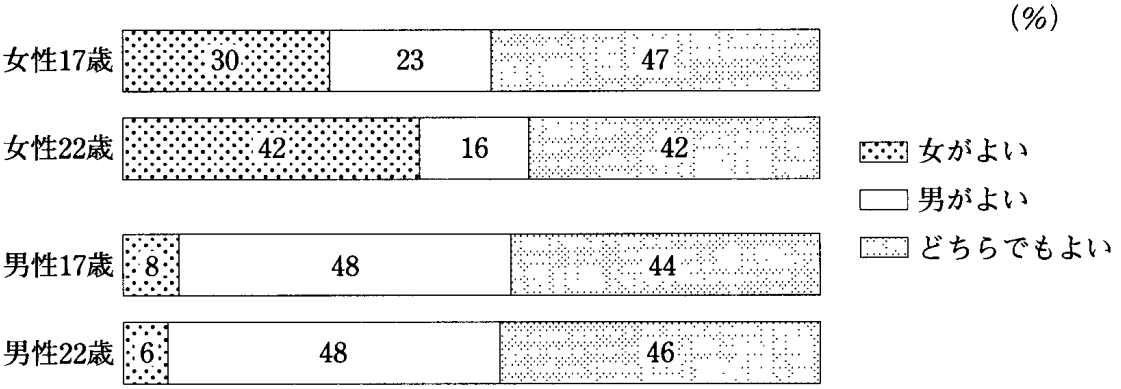
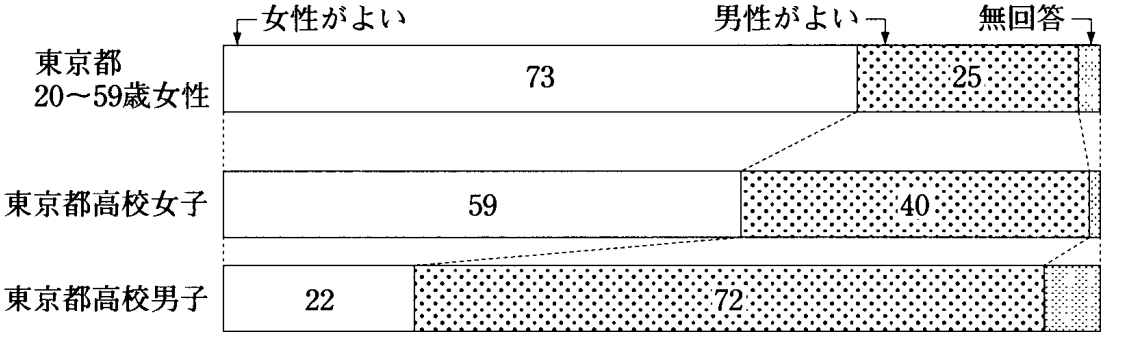


図４－１－４　男女の生れかわり（成人女性，高校生男女，1995年）



（図４－１－３，図４－１－４とも『女性のデータブック』による。図４－１－３は東京都生活文化局，図４－１－４は東京女性財団による調査）

筆者（田中欣和）のゼミでのこれまでの卒業論文では96年卒業の雑賀直子が，中学・高校生対象の調査でおもしろい分析をした。「異性に生まれ変りたい」のはどういうタイプの女子で多くなるか」に重点をおいたものであったが，職業持続・共学４年制大学志向，高学力（自己判定），高自尊感情といったタイプでそれは多くなる。高学力・高自尊感情でも専業主婦・女子大志向ではそれは少い。また十分明確ではないものの，兄がいる場合「異性への生まれ変り」願望が多くなり，弟と自分という場合はそれが少なくなるようであった。仮説形成に有用な調査であったが，今回十分に活かせなかった。

今回調査のクロス分析では，強いていえば母キャリアの影響がいくらか

見られ，サンプルの多い３グループのみ示すと，女性回答で「異性への生まれ変り」志向は，母が「結婚前からずっとフルタイム」で22.4%，「再就職後パートタイム」で35.0%，「ずっと専業主婦」で30.5%であった。

「男らしく，女らしく」とのしつけに「反発を感じた」層に男女とも「異性への生まれ変り」願望は少し多くなるが，これも有意差はない。

４－１－６　「女性が職業を持ち続ける」への支持と生育歴

４－３でくわしく分析される通り，関西大学生の「女性がずっと職業を持ち続ける」ことの支持率は高く，女性で53.8%，男性で35.7%であるが，男性回答でも全国調査での女性回答の数値に近い。

前回調査でのクロス分析でも「母のキャリア」や「母の学歴」などがこの支持率に影響することが示された。今回もかんたんに見ておく。

まず母のキャリアとの関係を，サンプルの多い３グループについてのみ示すのが，表４－１－11である。

表４－１－１１　性別・母キャリア別職業観　(%)

		ずっと職業を持ち続ける	結婚・出産退職	子育て後再就職	職業持たない	NA
女性回答	結婚前からずっとフルタイム	77.6	8.2	14.3	0.0	0.0
	再就職後パートタイム	43.3	7.5	47.5	0.8	0.8
	ずっと専業主婦	46.3	25.6	24.4	3.7	0.0
男性回答	結婚前からずっとフルタイム	64.9	2.7	27.0	2.7	2.7
	再就職後パートタイム	35.1	15.6	49.4	0.0	0.0
	ずっと専業主婦	31.1	29.7	33.8	4.1	1.4

一目瞭然である。母が「結婚前からずっとフルタイム」で働いている場合は，職業持続の支持率は高くなる。母が「再就職後パートタイム」の場合は「子育て後再就職」の支持率が高くなる。

次に母学歴との関係を見たのが，表４－１－12である。

表４－１－１２　性別・母学歴別職業観（母学歴の「その他」NA 略）　（%）

		職業持続	結婚・出産で退職	子育て後再就職	職業持たない	NA
女性回答	中学・高校卒	51.7	11.9	34.4	2.0	0.0
	短大卒	49.4	11.8	37.6	1.2	0.0
	四年制大学卒	62.5	16.7	19.4	1.4	0.0
	専門学校卒	51.9	3.7	40.7	0.0	3.7
男性回答	中学・高校卒	31.5	21.3	43.5	2.8	0.9
	短大卒	31.0	29.3	37.9	1.7	0.0
	四年制大学卒	48.0	16.0	30.0	2.0	4.0
	専門学校卒	43.8	0.0	28.6	14.3	0.0

母が四年制大学卒の場合「職業を持ち続ける」の支持率ははっきり高くなる。女性回答では全般的に高いので，母学歴別での格差は男性回答の方が大きくなる。

「保育所や学童保育の経験」とのクロスでいうと「全く経験なし」では，女性回答の場合47.9%（女性全体は53.8%），また男性回答の場合は30.3%（男性全体で35.7%）と少し低くなるが，案外差は小さい。

４－１－７　まとめ

問５（大学への期待）への回答からは，長期不況下での学生の緊張が感じられる。大学としても広義の進路指導体制（就職部だけではない）の強化に向けた検討が必要であろう。

問７（性別役割意識・行動）への回答の経年変化等を含めて，関西大学生の男女平等意識は日本社会全体よりかなり高い所にあり，また最近では規範意識のみならず自然な行動の変化も進んでいる。学生の変化のテンポに大学が追いつかないことが大いにおこりそうである。

問８（相談相手）では「先生」を挙げる学生が極めて少ない（アルバイト先の上司・同僚の半分以下）ことは，多くの教員に注目してほしい。相談できる時間を作る（文学部でのオフィス・アワー）ことも一つであろう

が，そもそも相談できる関係をどう作るか。上位年次ではゼミ等で関係ができるが，それ以外ではほとんどできていないと思われる。

問９（生活技能）への回答分析ではおもしろい結果がいろいろ出た。性差ばかりでなく居住条件や母親のキャリア（「ずっとフルタイム」か「ずっと専業主婦」か）が重要な要因となっていた。近年，かつてより遠くからでも通学するものが増えているが，「家族との同居」は条件次第でやむを得ないとはいえ，自立をおそくするという面もある。

問10（生まれ変り願望）では，女性の三分の一が「男に生まれ変りたい」と答えた。

「女性が職業を持ち続けることへの支持と生育歴」の分析では，前回調査での分析と同様に「母のキャリア」や「母の学歴」との関連がみられた。

４－２　大学が女性の人生にもたらすもの
―― 将来の職業や人生設計 ――

４－２－１　職業準備のために

女子学生の就職難は深刻化している。学ぶ場から働く場への移行は容易ではない。そこで就職準備のために，大学での専門の勉強以外，大学以外の勉強にも関心が高まっている。「希望する仕事につけるように何かしているか」の質問（問10）に対して，全体では，「大学での専門」に力を入れているのが34.3%，「大学の専門以外」6.2%「大学以外の勉強」12.9%である。女性男性で比較すると，「大学での専門」は女性32.6%，男性36.5%で男性が3.9ポイント多い，「大学での専門」「大学での専門以外」「大学以外の勉強」を合わせると，女性52.3%，男性54.8%で男性の方が2.5ポイント高くなっている。93年調査では，逆に女性の方が4.1ポイント高かった。

学年別でみると，「大学での専門」が１年次生の33.7%から，３年次生の34.8%と若干増加し，また「大学での専門以外」は3.5%から8.9%に，「大学以外での勉強」は6.6%から19.1%へとそれぞれ増加している。

93年調査と比べると，就職準備をしている合計は女性0.8ポイント増，男性7.4ポイント増でともに増加しているが，男性の増加が目立っている。今回調査では女性が「大学以外の勉強に重点をおいている」で14.1%と多く，93年調査と比較して4.8ポイント増加している。また，男性は「大学での専門の勉強に重点をおいている」が前回の31.6%から36.5%へと4.9ポイント増加している。女性は大学以外での準備が増え，男性は大学での準備が増加している。

10. あなたは今，希望する仕事につけるよう何かしていますか。

1．大学での専門の勉強に重点をおいている

2．大学での専門以外の勉強に重点をおいている

（例：　　）

3．大学以外の勉強に重点をおいている

（例：　　）

4．特に何もしていない

図４－２－１　希望する仕事につけるよう何かしていること（93年調査との比較）

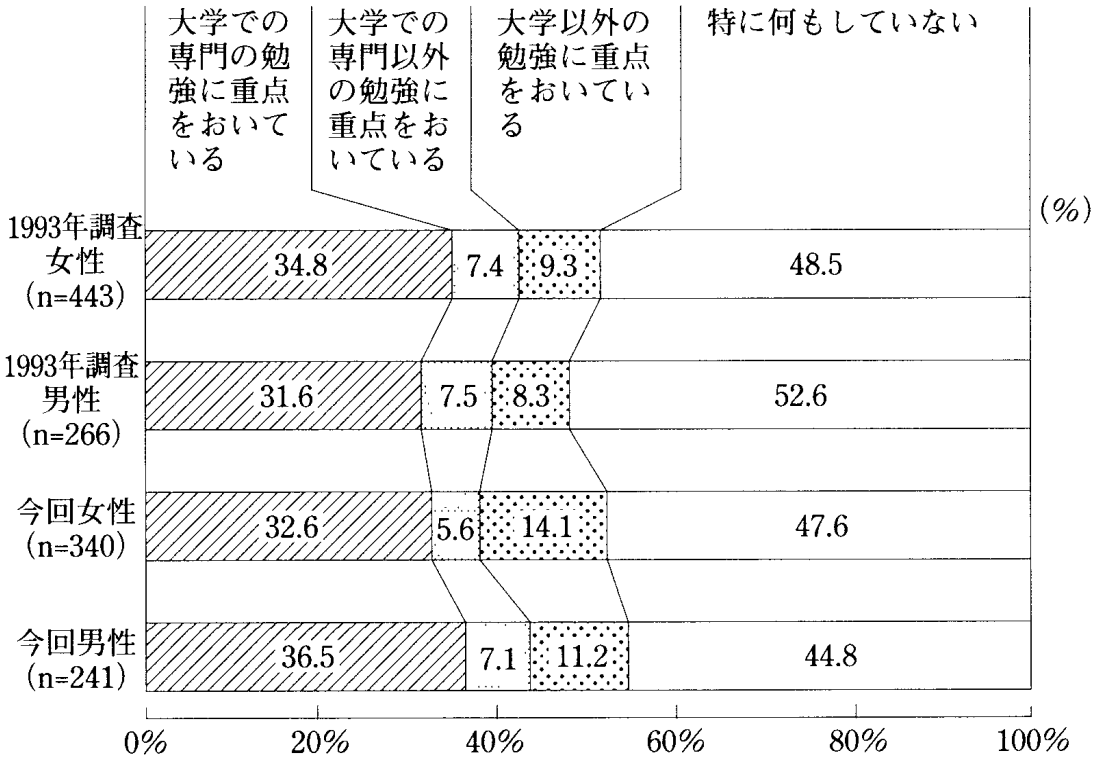


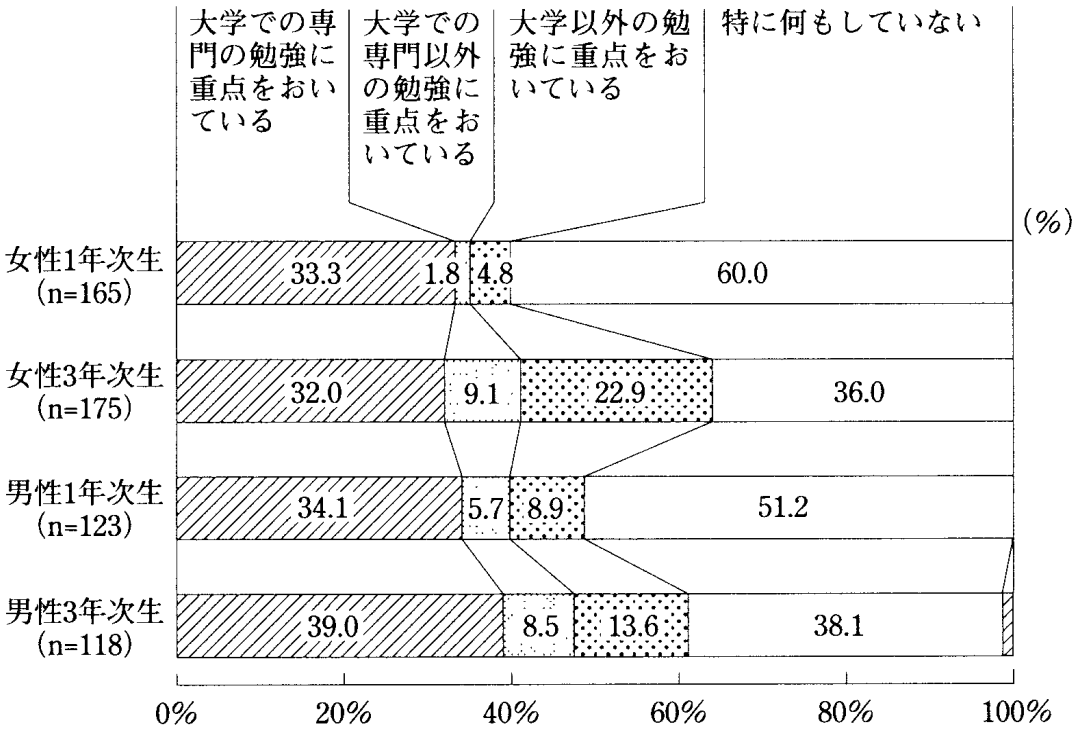
表４－２－１　希望する仕事につけるよう何かしていること（前回調査との比較）

（%）

問10．希望する仕事につけるよう何かしていますか。	大学での専門の勉強に重点をおいている	大学での専門以外の勉強に重点をおいている	大学以外の勉強に重点をおいている	特に何もしていない	無　回　答
今回調査　全体（N＝581）	34.3	6.2	12.9	46.5	0.2
今回調査　女性（n＝340）	32.6	5.6	14.1	47.6	0.0
今回調査　男性（n＝241）	36.5	7.1	11.2	44.8	0.4
1993年調査　全体（N＝684）	32.0	5.9	7.9	54.2	0.0
1993年調査　女性（n＝443）	34.8	7.4	9.3	48.5	0.0
1993年調査　男性（n＝266）	31.6	7.5	8.3	52.6	0.0

また，「大学での専門」「大学での専門以外」「大学以外の勉強」を合わせた「就職準備をしている割合」では，男性は１年次生48.7%，３年次生61.1%と12.4ポイント増，女性は１年次生39.9%，３年次生64.0%と24.1ポイント増となっている。なかでも女性の「大学以外の勉強に重点を置いている」が大幅に増加しており，女性３年次生の22.9%が目立っている。

図４－２－２　希望する仕事につけるよう何かしていること（学年別）



４－２－２　職業観

(1)　女性と職業について

問11では，女性のライフスタイルと職業に関しての意見を聞いている。

11．女性と職業について，最も近い意見に○を１つつけてください。
（男女とも答えてください）

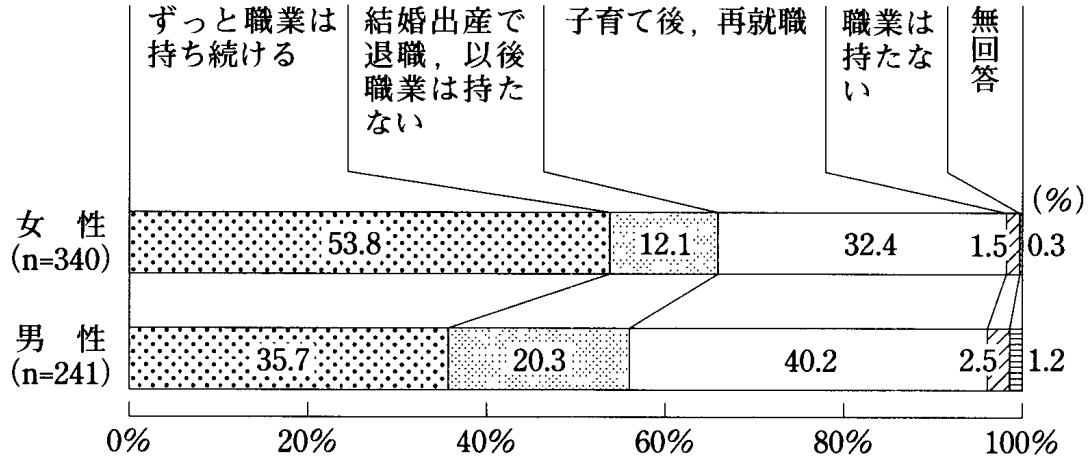
１．ずっと職業は持ち続ける

２．結婚・出産で退職，以後職業は持たない

３．子育て後，再就職

４．職業を持たない

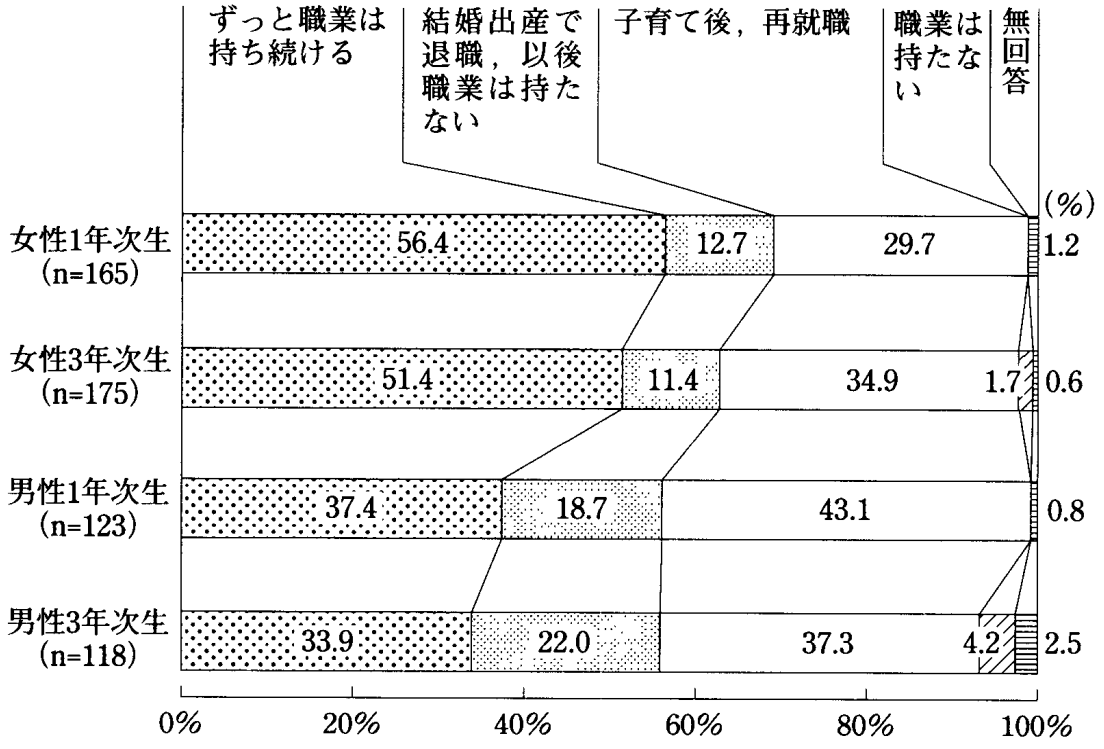
図４－２－３　女性と職業について（性別）



女子学生では「ずっと職業を持ち続ける」（以下「持ち続ける」と略す）が53.8％と最も多く，半数以上が「持ち続ける」と回答している。続いて「子育て後再就職」は32.4％，「結婚出産で退職」は12.1％である。「職業を持たない」は1.5％ときわめて少ない。

男子学生は「子育て後，再就職」40.2％の方が「ずっと職業を持ち続ける」35.7％より，4.5ポイント多くなっている。

図４－２－４　女性と職業について（学年別）



女性の１年次生では「ずっと職業を持ち続ける」は56.4%だが，３年次生では51.4%にやや減少し，その分「子育て後再就職」が増える。

男子学生も３年次生では「ずっと職業を持ち続ける」「子育て後再就職」が減少し，「結婚出産で退職，以後職業を持たない」「職業を持たない」が増加している。

「持ち続ける」が減少し「子育て後再就職」が増加する傾向を，女性の置かれている現実に見合った変化であるともとれるが，この変化の経過のなかで女子学生の「就職・将来について」の悩みの大きさも伺われる。

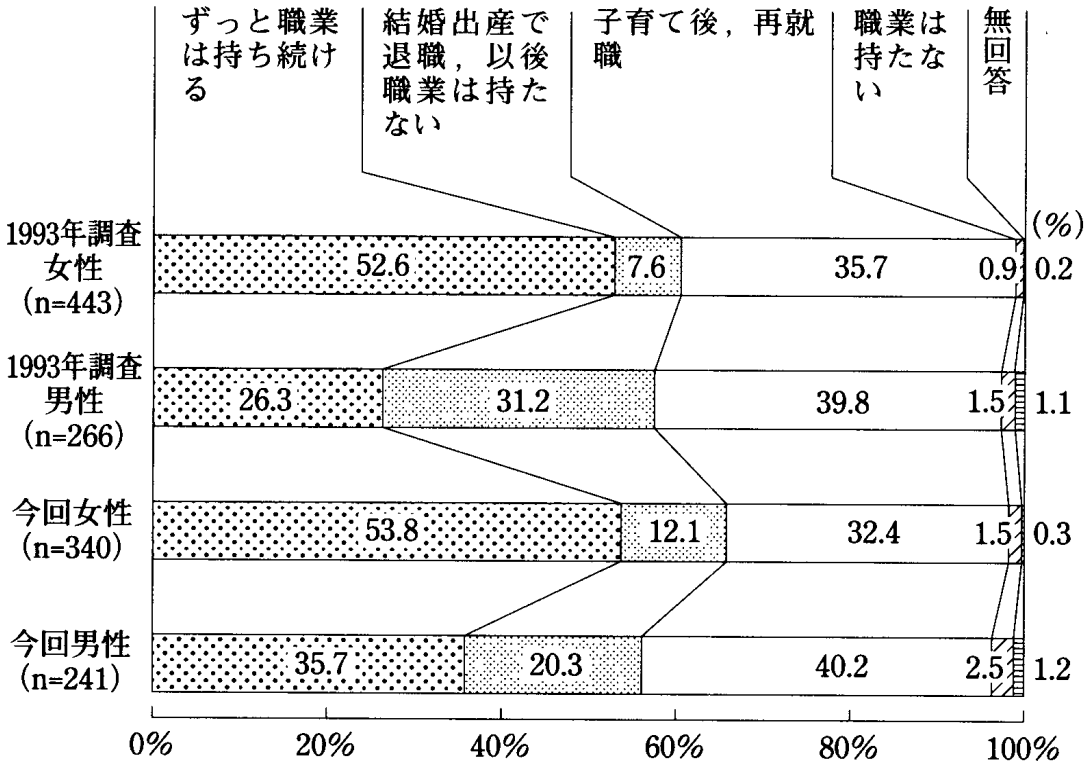
「結婚出産で退職，以後職業を持たない」は男性約２割，女性約１割であり，男性は３年次生で3.3ポイント増加，女性は３年次生で1.3ポイント減少している。

男性は「ずっと職業を持ち続ける」が9.4ポイント増加している。その分「結婚出産後職業を持たない」が減少している。

女性は，「ずっと職業を持ち続ける」は53.8%と高く，93年調査より1.2ポイント増加してはいるが，「結婚出産で退職，以後職業を持たない」も4.5ポイント増加している。その分「子育て後再就職」が減少している。

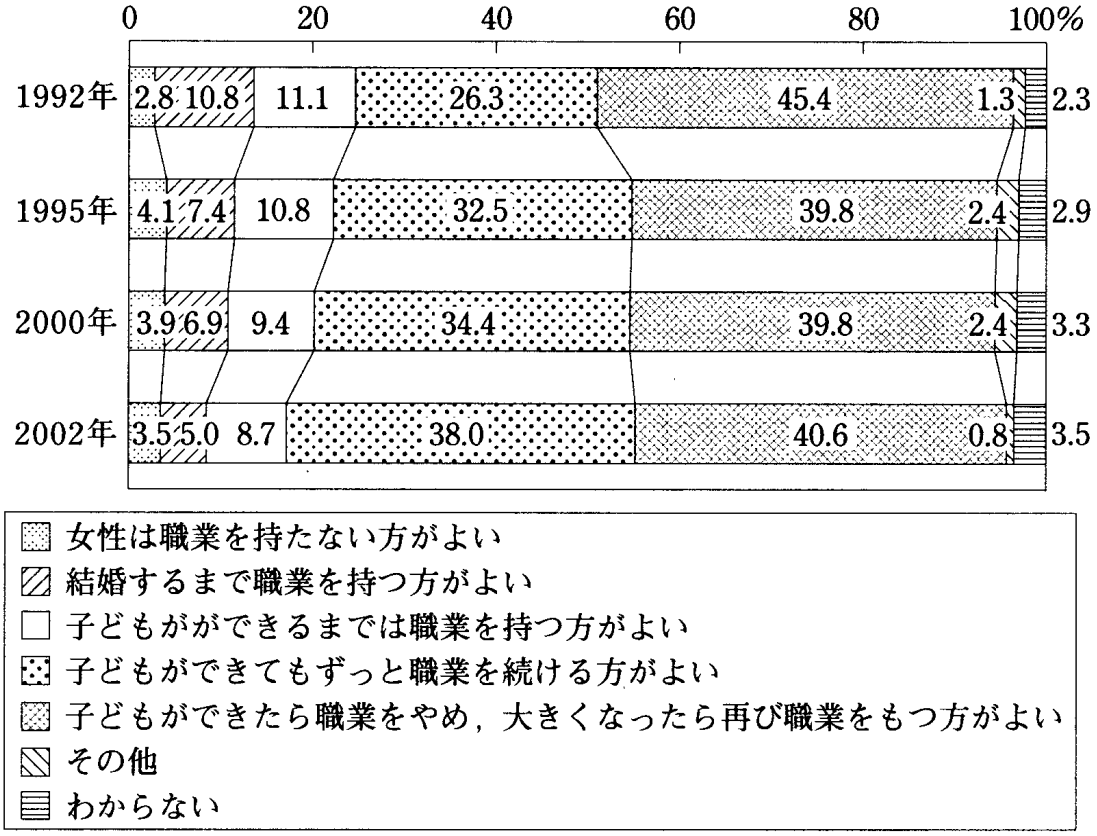
参照図４－２－１（79ページ）から全国調査との比較をみると，2002年の女性では，「ずっと持ち続ける」は38.0%，「子育て後再就職」が40.6%であるから，本学の女子学生の方が，かなり「継続型」志向が多いことがわかる。

図４－２－５　女性と職業（93年調査との比較）



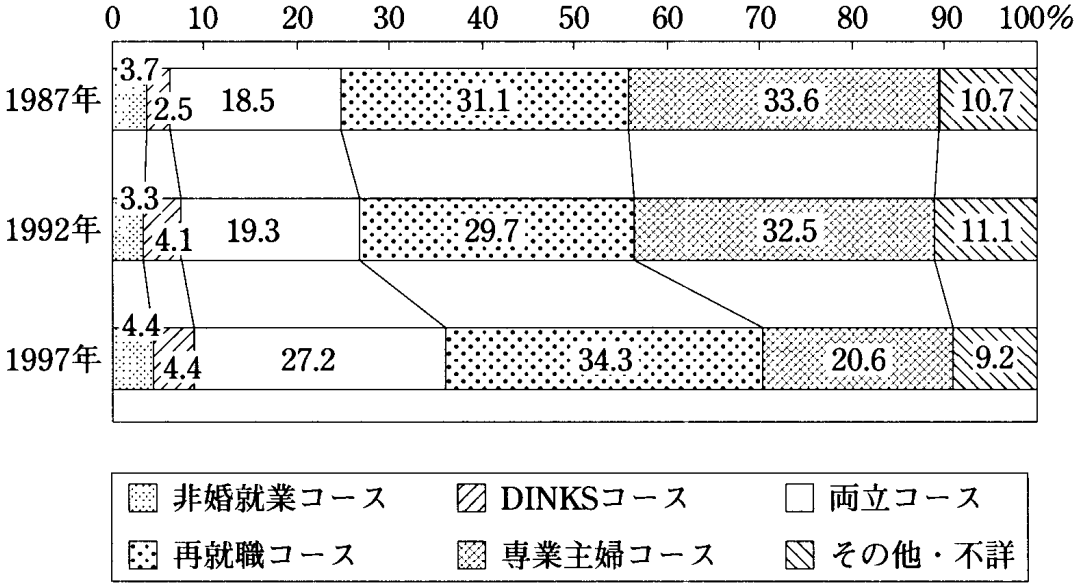
1993年の前回調査結果との比較をみると，女性の「持ち続ける」は，わずか1.2ポイント増加している。男性の増加の方が，9.4ポイントで高い。この男性の増加は「結婚・出産で退職，以後職業は持たない」の9.1ポイントの減少とほぼ同数値である。

参照図４－２－１　女性が職業を持つことについての考え方（女性）



資料：総理府「男女平等に関する世論調査」（1992年）
総理府「男女共同参画に関する世論調査」（1995年）
総理府「男女共同参画社会に関する世論調査」（2000年）
総理府「男女共同参画社会に関する世論調査」（2002年）

参照図４－２－２　未婚女性の理想とするライフコース（希望者の割合）



資料出所：国立社会保障・人口問題研究所「第11回出生動向基本調査」(1997年)

(注)　「非婚就業コース」：結婚せず一生仕事を続ける

「DINKSコース」：結婚するが子どもは持たず仕事を一生続ける

「両立コース」：結婚し子どもを持つが仕事も一生続ける

「再就職コース」：結婚して子どもを持つが結婚あるいは出産の機会にいったん退職し子育て後に再び仕事を持つ

「専業主婦コース」：結婚して仕事を持ち結婚あるいは出産の機会に退職しその後は仕事を持たない

(2)　男性と職業について

12. 男性と職業について望ましいのは。（○は１つ）

１．家庭を顧みなくても一流企業でバリバリ働き出世をする

２．安定した企業に就職する

３．収入はすくなくても自分の好きな分野で能力を発揮する

４．仕事はそこそこだが家庭と自分の生き方を大切にする

５．夫婦ともに第一線で仕事ができるよう家事育児も協力しあう

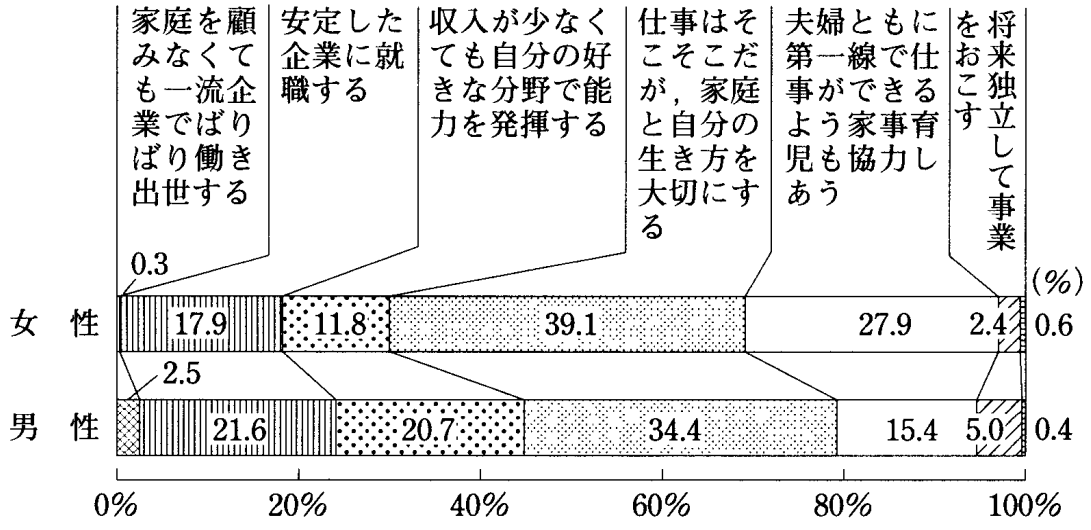
４．将来独立して事業を起こしたい

男性の仕事の関わり方（問12）をみる。これは男性の仕事の関わり方と男性の「生き方」について女性・男性の意見を聞いたのであるが，ともに「仕事はそこそこだが，家庭と自分の生き方を大切にする」が最も多く，男性34.4%，女性39.1%で，大きな差はない。ただ女性の場合は，その次が「夫婦とも第一線で仕事ができるよう家事育児も協力しあう」27.9%であるが，男性は「安定した企業に就職する」21.6%が多い。

「収入が少なくても自分の好きな分野で能力を発揮する」は男性20.7%，女性11.8%と男性に若干多い。

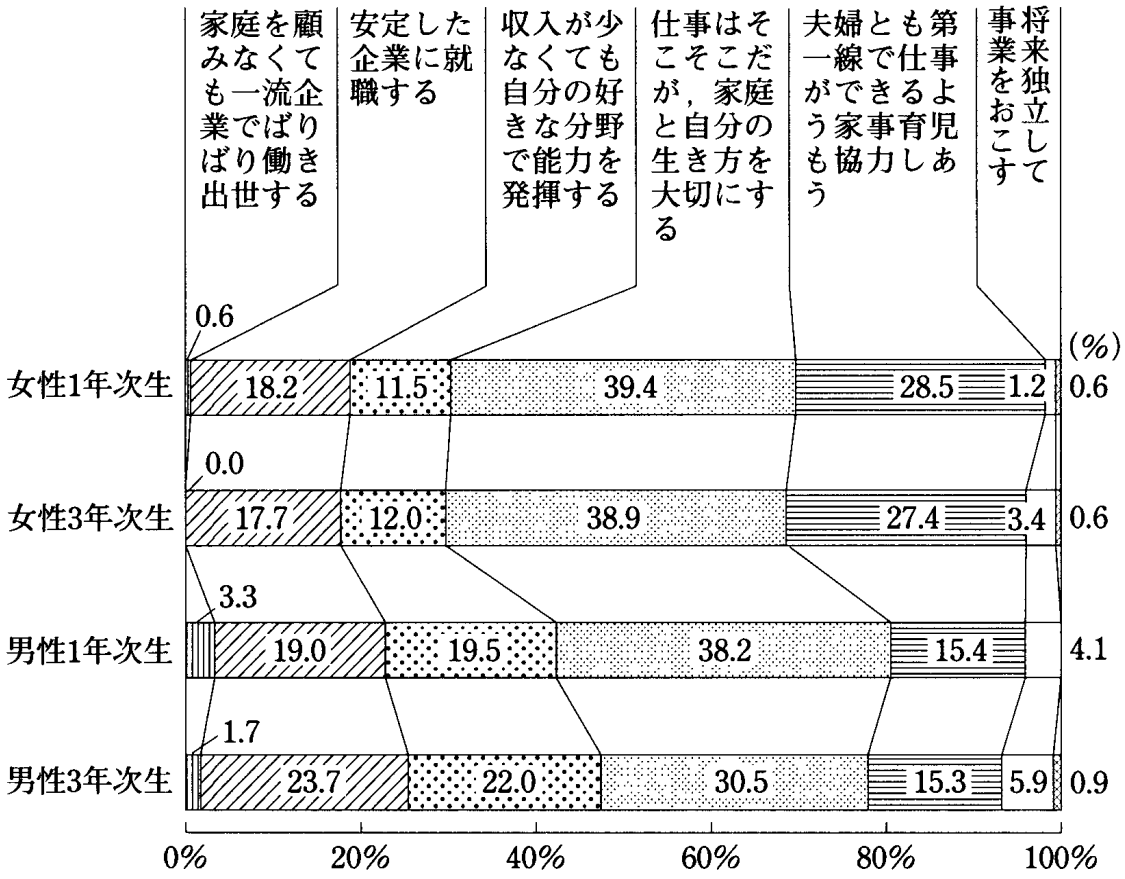
男女で差が多いのは，「収入が少なくても自分の好きな分野で能力を発揮する」で，男性が8.9ポイント差で多くなっている。「夫婦ともに第一線で仕事ができるよう家事育児も協力をしあう」で女性が多く，12.5ポイント差である。

図４－２－６　男性と職業について（性別）



男性の生き方を学年別にみると，女性は１年次生と３年次生を比較しても「男性の生き方」に対する意見に大きな違いはみられないが，男性は「安定した企業に就職する」が１年生19.5%から３年生23.7%へと4.2ポイント増加，「仕事はそこそこだが，家庭と自分の生き方を大切にする」が１年次生38.2%から３年次生30.5%と7.7ポイント減少している。

図４－２－７　男性と職業について（学年別）



４－２－３　就職に際して重視する条件

問14では職業観と密接に関係のある「就職に際して重視する条件」について，第１，第２，第３と順位をつけて質問した。第３条件までの回答を全部合計して，女性の回答の多い順に並べたのが図４－２－８である。

男性も女性も第１位は「やりがいのある仕事」，第２位は「安定している」である。第３位は女性では「将来性ある職種」で，男性の場合は「給料が高い」になっている。第４位は女性は「結婚出産後も働くことができる」で，男性は「将来性ある職種である」となっており，第５位は女性は「男女とも実力で昇進が決まる」，男性の場合は「休日が多く残業が少ない」という結果になっている。

93年調査，87年調査との比較は，図４－２－９で示す。ここでは性別を

比較しやすくするために作成されたものであり，選択肢は女性の回答の多い順で表示している。93年回調査と今回調査では順位が入れ替わっている。

第１位「やりがいのある」，第２位「安定している」は変化がない。第３位は「将来性がある職種である」，第４位が「結婚出産後働くことができる」，５位は「男女とも実力で昇進が決まる」である。女性の「安定している」が順位は変わらないものの大幅に増加していること，「将来性」が上位に上がってきていることなど，長く働くことを前提に考えられていることが伺える。

14. あなたが会社に就職すると仮定して，重視する条件を３つだけ選んでください。

1．安定している
2．給料が高い
3．やりがいのある仕事ができる
4．男女とも育児休暇がとれる
5．男女同一賃金である
6．男女とも実力で昇進がきまる
7．休日が多く，残業が少ない
8．福利・厚生施設がよい
9．社会貢献を重視している
10．知名度が高い
11．家族や友人が勧める
12．結婚・出産後も働くことができる
13．女性にお茶くみを強要しない
14．将来性のある職種である

最も重視する条件 □　二番目に重視する条件 □　三番目に重視する条件 □

図４－２－８　就職に際して重視する条件（回答数／回答者）

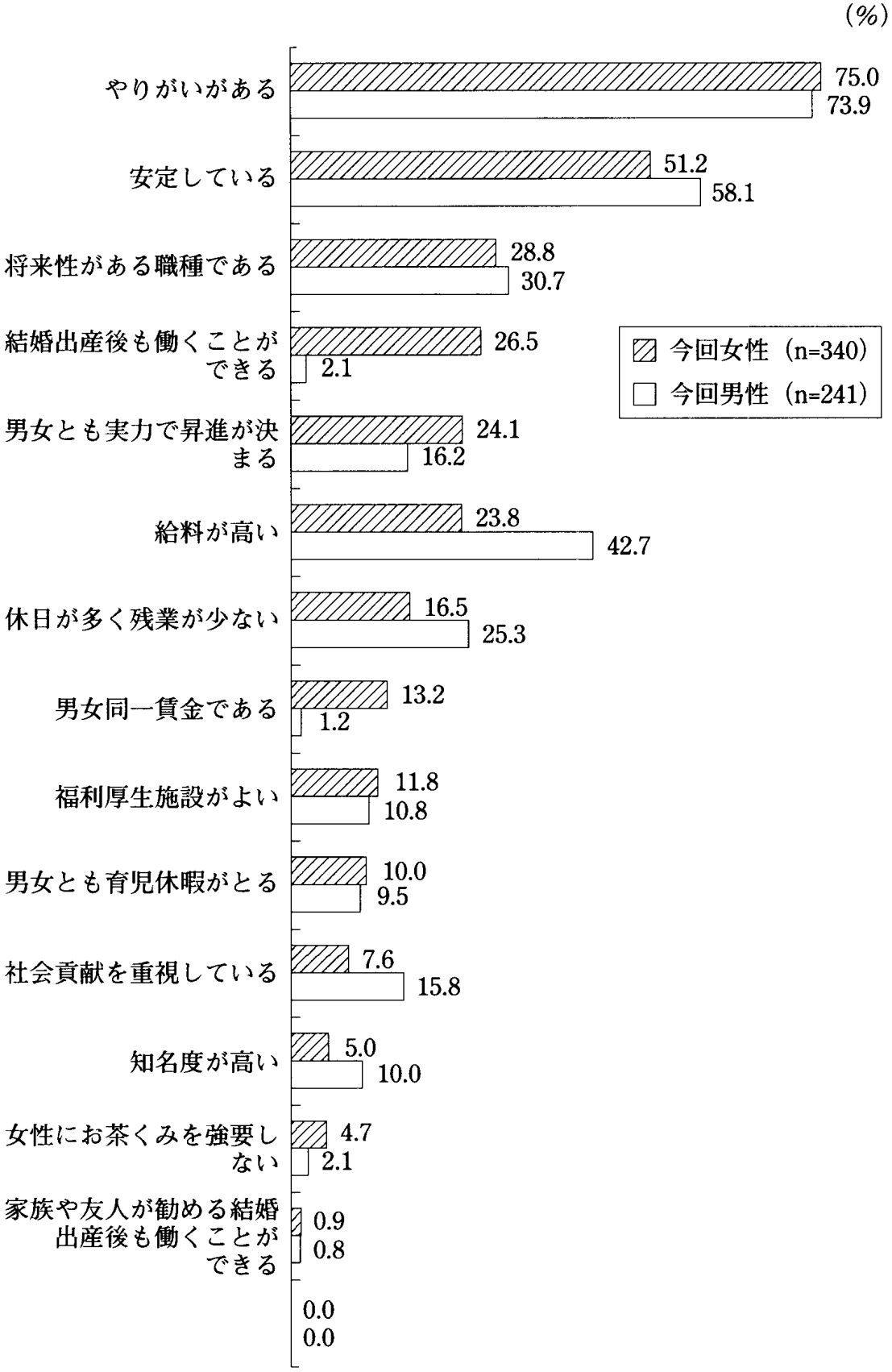
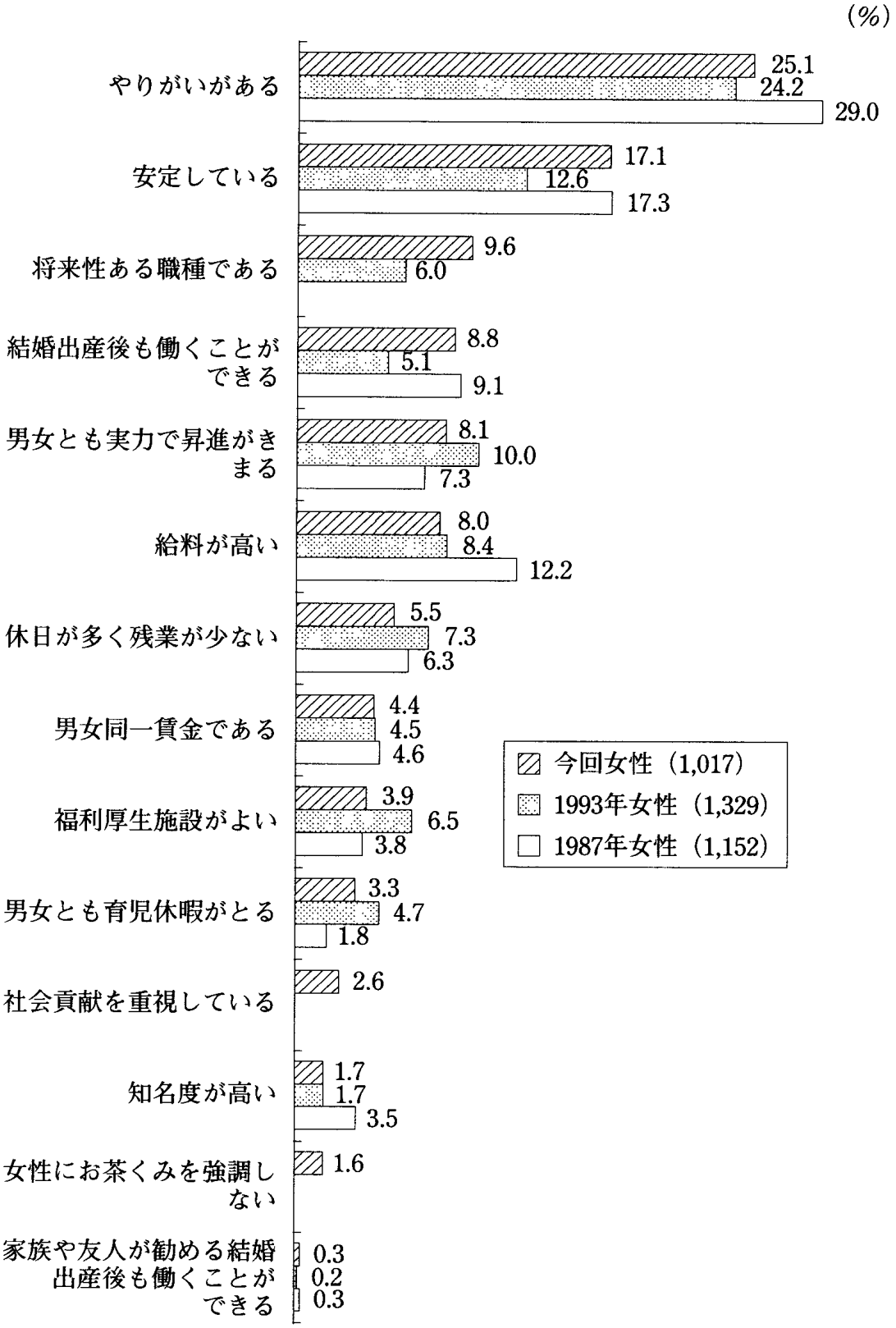
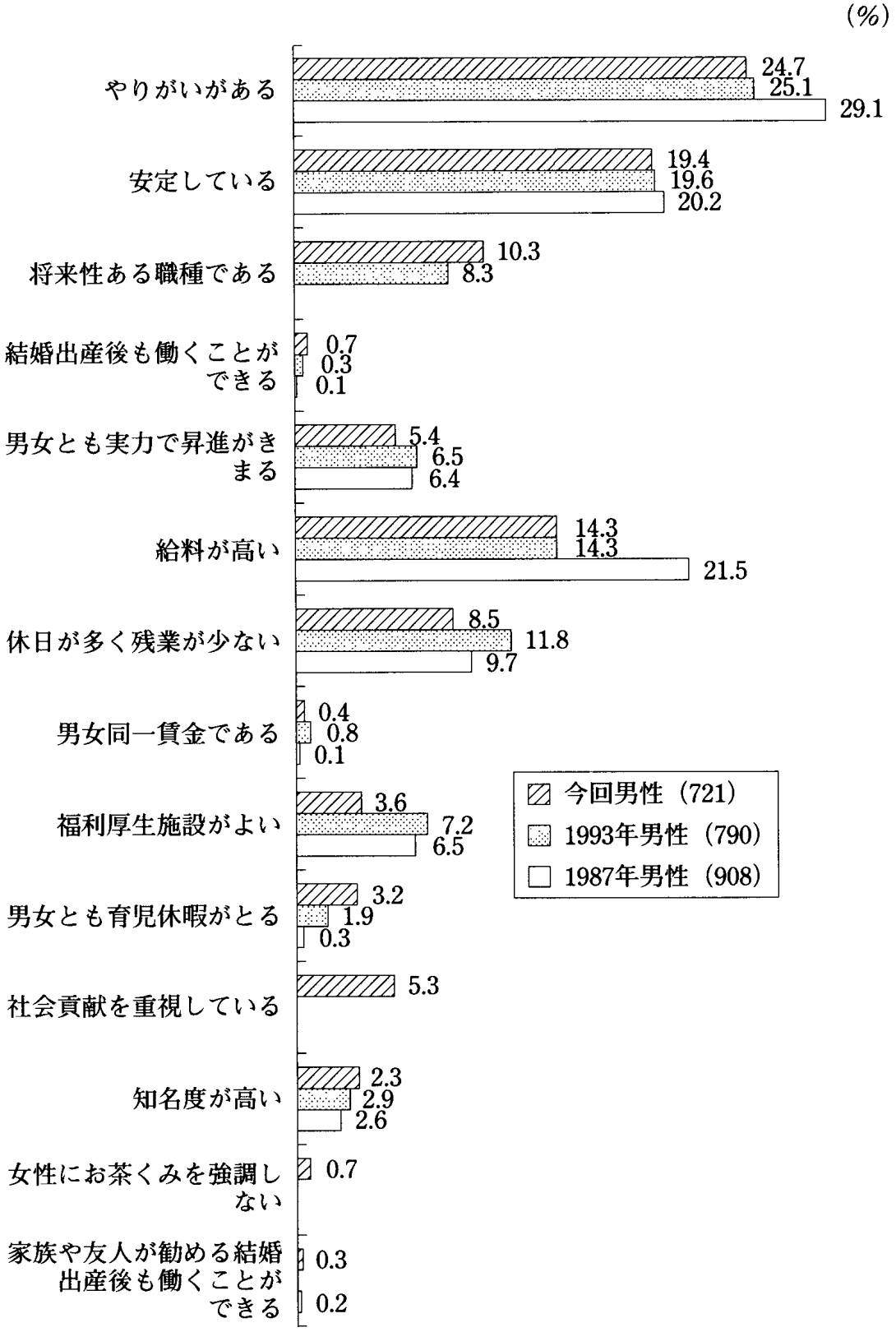


図４－２－９　就職に際して重視する条件（回答数／回答総数）



93年調査，87年調査との比較のため，複数回答を回答総数で割った比率で示している。

図４－２－１０　就職に際して重視する条件（回答数／回答総数）



93年調査，87年調査との比較のため，複数回答を回答総数で割った比率で示している。

４－２－４　女性の人権が尊重されていないと感じること

(1)　「職場での昇進・昇格・賃金の格差」が最も人権問題

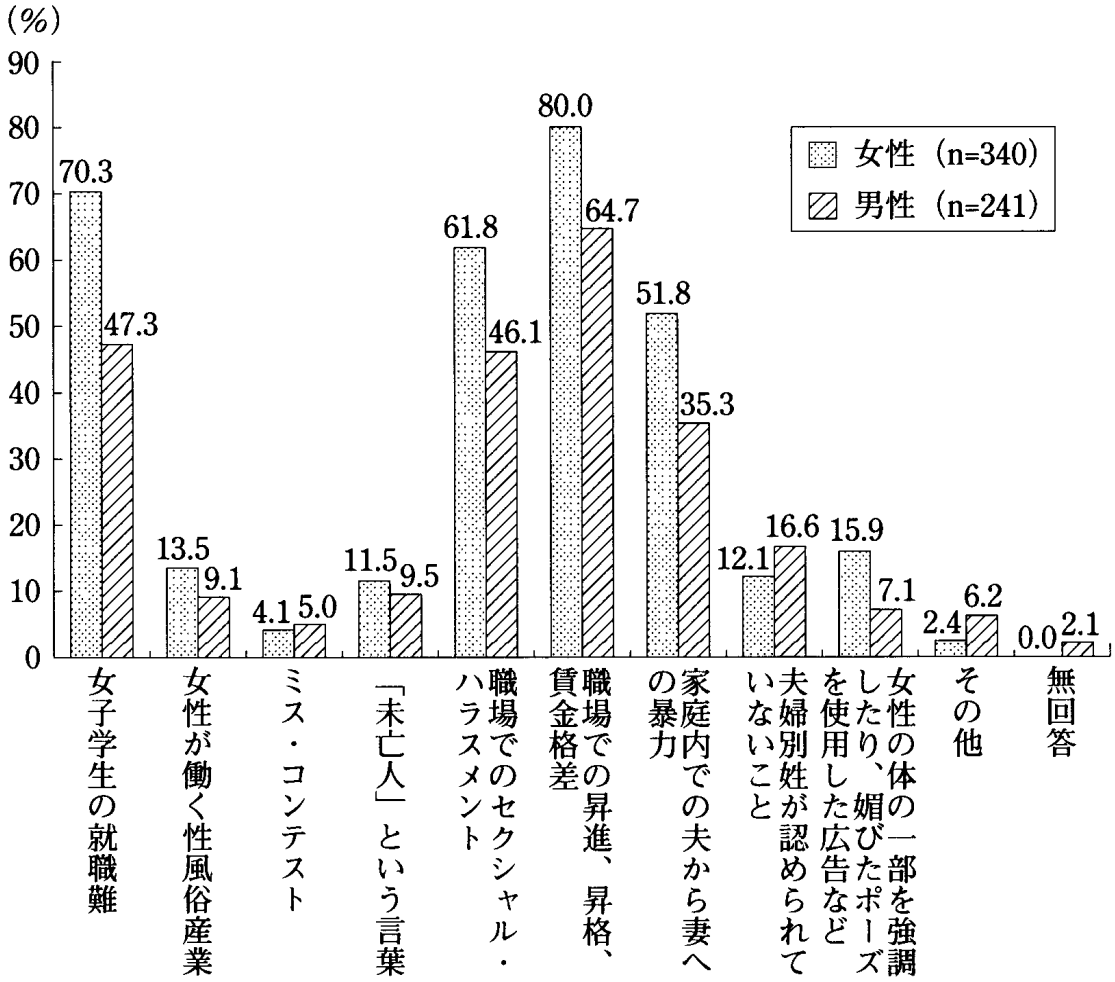
女性の人権が尊重されていないと感じることについて，問13で聞いている。男子学生・女子学生ともに「職場での昇進・昇格・賃金の格差」が80.0%，64.7%と高い比率になっている。次いで多いのは「女子学生の就職難」で男女それぞれ70.3%，47.3%である。３番目は「職場でのセクシャル・ハラスメント」でそれぞれ61.8%，46.1%である。４番目が「家庭内での夫から妻への暴力」である。女性は51.8%と半数を超え，男性も35.3%と多くなっている。

「ミス・コンテスト」は人権が尊重されていないとあまり感じていないようである。男女別でみると，「夫婦別姓が認められていないこと」を除いて，全ての選択肢で女性の方が多くなっている。

13. 女性の人権が尊重されていないと感じるのは，次のどんなことがらですか。

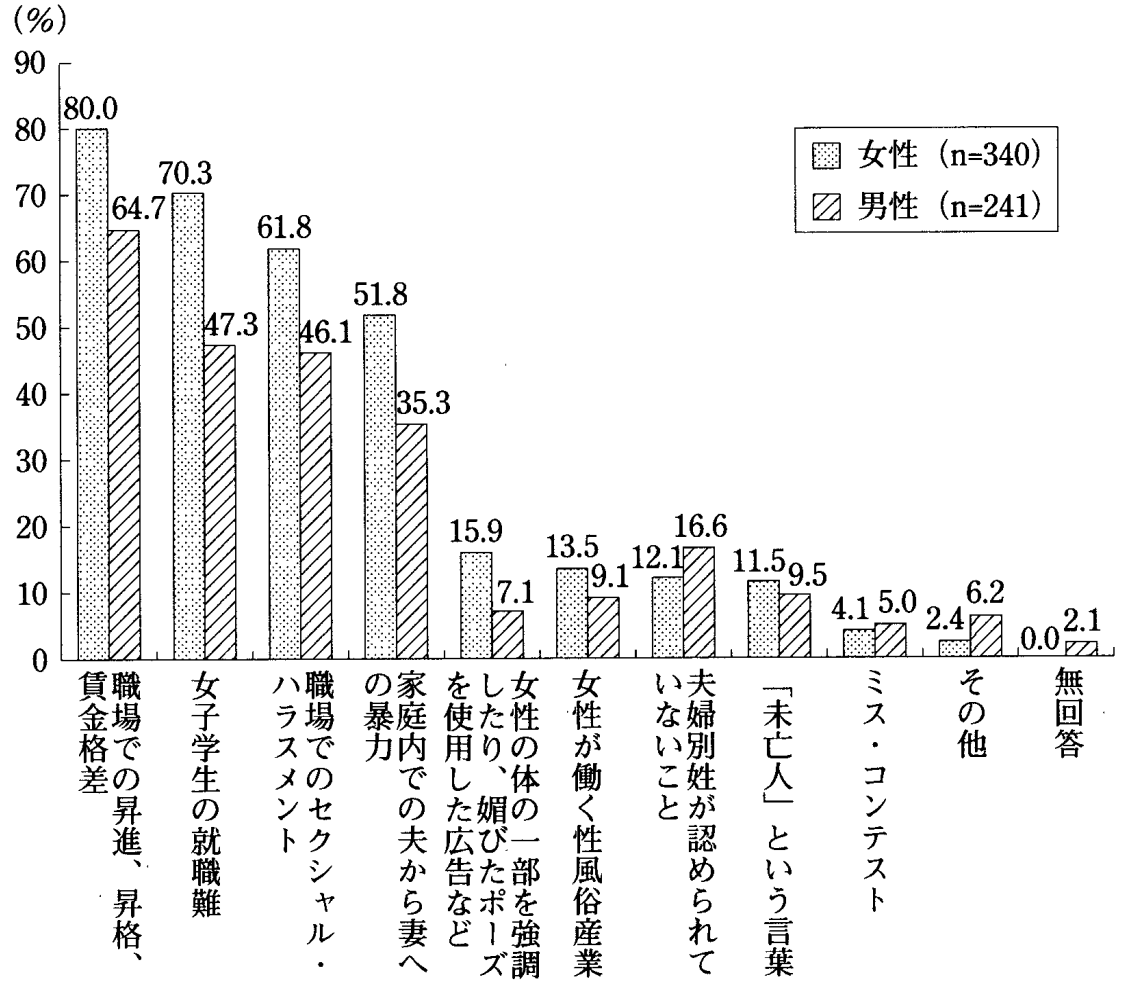
1．女子学生の就職難
2．女性が働く性風俗産業
3．ミスコンテスト
4．「未亡人」という言葉
5．職場でのセクシュアル・ハラスメント
6．職場での昇進，昇格，賃金格差
7．家庭内での夫から妻への暴力
8．夫婦別姓が認められていないこと
9．女性の体の一部を強調したり，媚びたポーズを使用した公告など
10．その他（　　）

図４－２－１１　女性の人権が尊重されていないと感じること



女性と男性で，格差の大きいものをあげてみると，「女子学生の就職難」が最も大きく，23.0ポイントである。次いで「家庭内での夫から妻への暴力」16.5ポイント，「職場でのセクシャル・ハラスメント」15.7ポイント，「職場での昇進，昇格，賃金格差」が15.3ポイントとなっている。

図４－２－１２　女性の人権が尊重されていないと感じること（女性の多い順表示）



(2)　吹田市民意識調査と比較

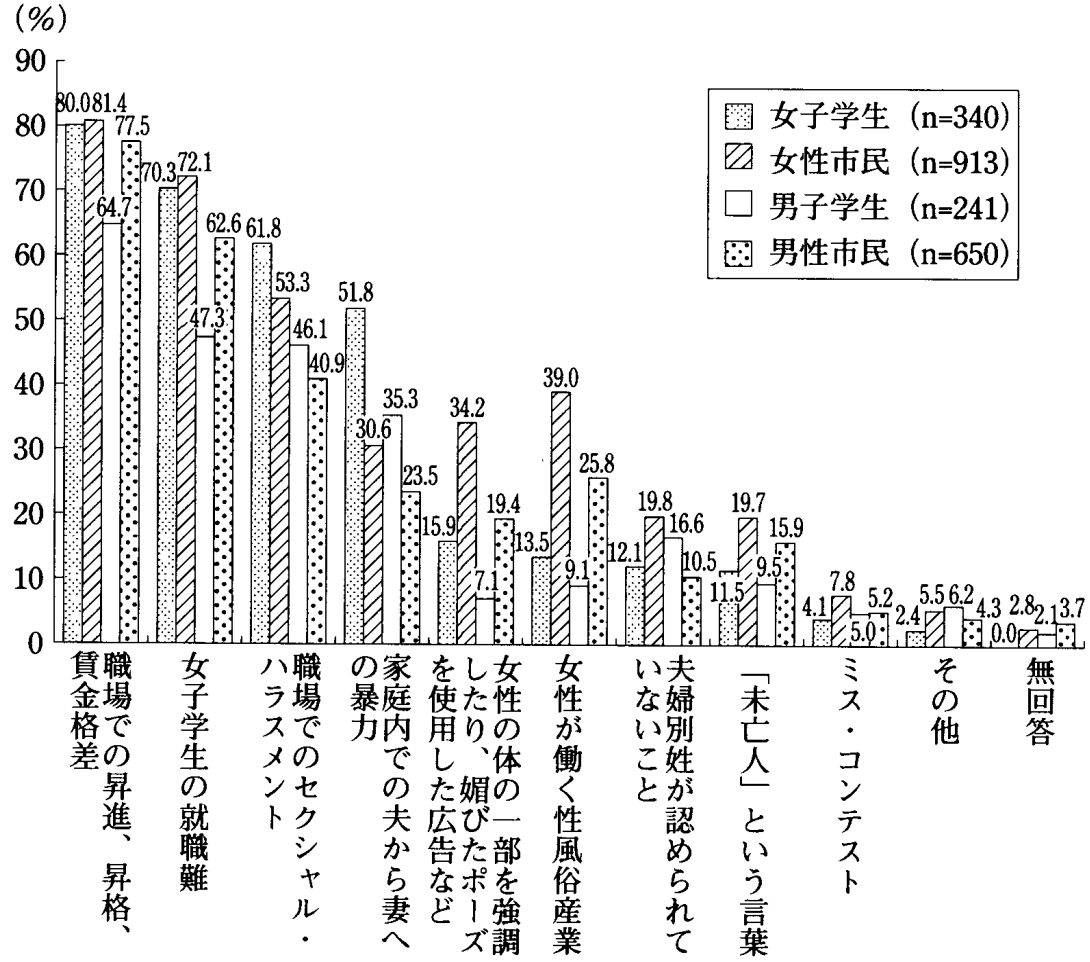
今回調査と1997年吹田市民意識調査と比較すると，「職場での昇進，昇格，賃金格差」は８割，「女子学生の就職難」では７割の女子学生・女性市民があげている。就職，昇進，昇格，セクシュアルハラスメントなど自ら直面することになる問題への女子学生・女性市民の関心の高さが伺われる。

男子学生は「職場での昇進，昇格，賃金格差」「女子学生の就職難」が女子学生・女性市民・男性市民より10ポイント～20ポイント以上少なく，また「職場でのセクシャルハラスメント」「家庭内での夫から妻への暴力」「夫婦別姓」以外は男性市民より少なくなっている。

「家庭内暴力」は女子学生が多く，「性風俗産業」や「性表現」は女性

市民が多くなっていること，「セクハラ」での男子学生，男性市民の少なさ，「家庭内暴力」の女性市民の少なさなどをみると，身近にある問題より自分から少し距離がある問題の方が気づきやすい面もあるようだ。

参照図４－２－３　吹田市民意識調査との比較



女子学生，男子学生，女性市民，男性市民を比較してみると，たとえば「職場での昇進・昇格・賃金の格差」や「女子学生の就職難」では男子学生が，「人権が尊重されていないと感じること」が最も低く，女性市民が最も高い。

「家庭内の夫から妻への暴力」に関しては，女子学生が最も高く，次いで男子学生，女性市民，男性市民と言う順序になっている。いずれも当事者にならない立場からみた方が，人権が尊重されていない状況はよくみえるのかもしれない。

まとめ

「93年調査よりも，女子学生に職業を継続しようという意向が強くなってきているのは確かなことである。またそれを支持する傾向は男子学生においても同様である。

関西大学へ入学し，そこで将来の職業や人生設計をする予定であった女子学生は，３年次では，大学以外で仕事に役立つ技能を身につけようとダブルスクール族が増えるし，職業観を「結婚後も出産後も職業を持ち続ける」を少しだけ「子育て後再就職」に変更する。しかし自らの職業を考えるときは，「やりがいのある仕事につくこと」や「性にこだわらない実力主義」が女性の職業生活を充実させるのに重要な課題であると認識しており，それが就職するに際して重視する条件になっている。

しかし，女性と男性がカップルを組み，結婚や出産や子育てと職業継続を想定すると，やはり両立が困難な場合に直面すれば女性の方が「仕事をやめる」とか「休職する」という伝統的なステレオタイプの意識が拭いきれない。男性の方がその傾向は大きい」というのは93年調査にも今回調査にも，同じ傾向である。

女性の人権が尊重されていないと感じることについては，男子学生・女子学生ともに「職場での昇進・昇格・賃金の格差」が最も高い比率になっている。次いで「女子学生の就職難」「職場でのセクシャル・ハラスメント」であり，４番目が「家庭内での夫から妻への暴力」である。人権問題のテーマとして女性労働問題が明確に位置づけられる時代になってきたことを物語るものである。

提案１　キャリア相談やキャリアセンターコースの充実

その対策として，従来の就職課の仕事を充実させ，入学当初から自分のライフプランとキャリアプランをしっかり描いて職業を探し，着実な準備

が出来るように，キャリアコンサルタントの導入，女性と職業生活に関わるキャリアコースセミナーを充実させるという提案をする。

提案２　インターンシップの充実

第２は，「自分のやりたいこと」と「魅力ある企業」のマッチングのために，インターンシップの充実はきわめて有効であろうと思われる。インターンシップから就職に流れることもあるかもしれないが，その効果よりも，企業を実際に知るために，インターンシップの充実が望まれる。

４－３　女性観・男性観・結婚観

４－３－１　家庭でのメッセージ

16. あなたは家庭で「男は男らしく，女は女らしく」とよく言われましたか。

１．よく言われた
２．ときどき言われた
３．あまり言われなかった
４．まったく言われなかった

（１．２を選んだ人のみお答えください）

そのように言われたとき，あなたは反発を感じましたか。

１．強く感じた
２．あまり感じなかった
３．わからない

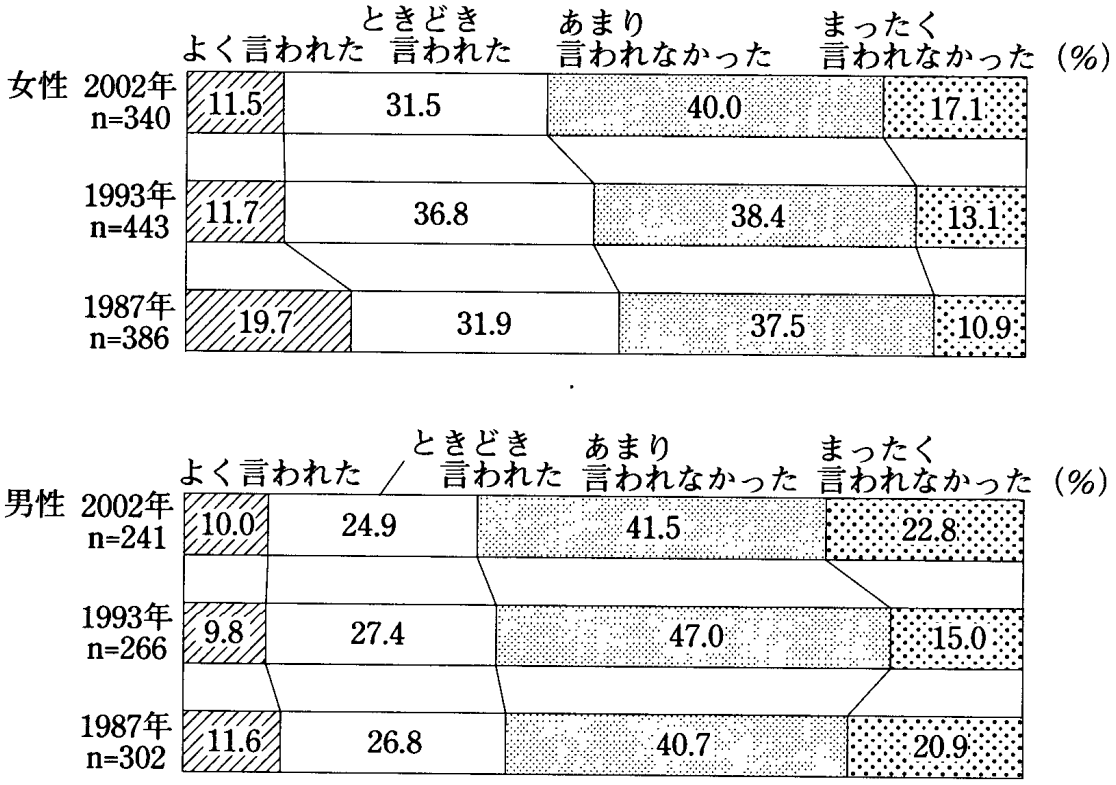
「女は女らしく」「男は男らしく」というメッセージは日常生活のさまざまな場面で，シャワーのように流されている。私たちの意識や社会の仕組みは，そういったジェンダーによって構成されているともいえる。関西大学の学生は，ジェンダーや性別役割規範についてどのように考えているのだろうか。本章の目的は，それを明らかにしていくことである。

人間にとって，家庭での生育環境は大きな影響力を持つものである。関大生たちは，「男は男らしく」「女は女らしく」といったメッセージを家庭で浴びて育ったのか。まず，そこからみていこう。

図４－３－１からわかるように，問16の質問に対して，「よく言われた」「ときどき言われた」という人を合計すると，女性では43.0％，男性では34.9％となっている。「あまり言われなかった」「まったく言われなかった」は女性で57.1％，男性で64.3％である。

この質問は1987年，93年にもされているので，それらとの比較も図４－３－１に明らかである。「よく」「ときどき」言われた女性は87年では51.6％，93年は48.5％である。男性では87年に38.4％，93年に37.2％となっている。つまり，87年，93年，そして今回の数値から，「男らしく，女らしく」というメッセージを家庭で言われた学生は確実に減ってきている。ただ，男性よりも女性に対して，性別を強調するメッセージがより多く送られている実態については87年，93年，そして今回と変化はみられない。

図４－３－１　家庭で「男らしく，女らしく」と言われたか（問16）

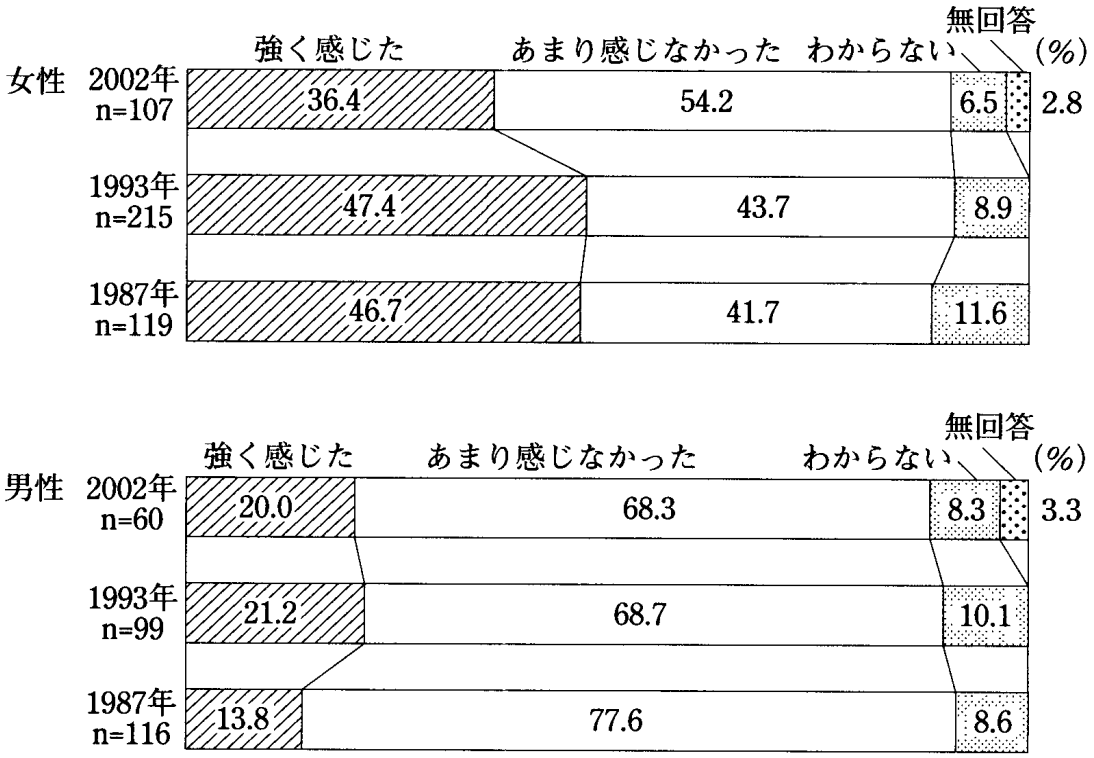


また，そのような「男らしく，女らしく」と言われたときに反発を感じたかどうかについては，図４－３－２に表している。「強く感じた」女性は今回の調査では36.4％，「あまり感じなかった」女性は54.2％となっており，「強く感じた」男性は20％，「あまり感じなかった」男性は68.3％である。これも前回，前々回と比較すると，87年に「強く感じた」女性は46.7％，93年は47.4％と，両者の数値にあまり変化がみられないのに対し，93年から今回調査の数値に違いが見受けられる。反発を「強く感じた」女性が10ポイント以上減少しているのである。逆に反発を「あまり感じなかった」という女性が10ポイント以上増加している。93年から今回調査までの約10年の間に，1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定されるなど，女性の社会参加について十分ではないものの法的整備が若干おこなわれた部分はあるが，性別役割規範は大きく変化していないだろう。つまり，反発を感じないほどに女性が「女性らしさ」から解放されているとは考えられないのである。それなのに女性役割を強調されることに反感を感じない女性が増加しているのは，いったいどうしてなのだろうか。

一方，男性に目を移すと，87年から93年の調査の間に大きな差が見受けられる。すなわち，「男らしく」と言われたときに反発を「強く感じた」男性は87年には13.8％であったのが，93年には21.2％と増加している。しかし今回の調査では20％で，93年の調査と大きな変化はみられない。

男女を比較すると，女性に反発を「強く感じた」割合が，87年，93年，そして今回ともに高くなっており，女性に性役割をより強調する社会であることに変わりはないようだ。

図４－３－２　反発を感じたか（問16）



４－３－２　「女性らしさ」「男性らしさ」の抑圧

17. 世の中には次のような意見がありますが，あなたはそれぞれについてどう思いますか。あてはまるところに○をつけてください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
(1)女性には女性らしさという抑圧がある	1	2	3	4
(2)男性には男性らしさという抑圧がある	1	2	3	4
(3)男性は女性の前で弱音をはくべきではない	1	2	3	4
(4)やはり女性は男性に守ってもらいたいものだ	1	2	3	4
(5)デートの際，コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ	1	2	3	4

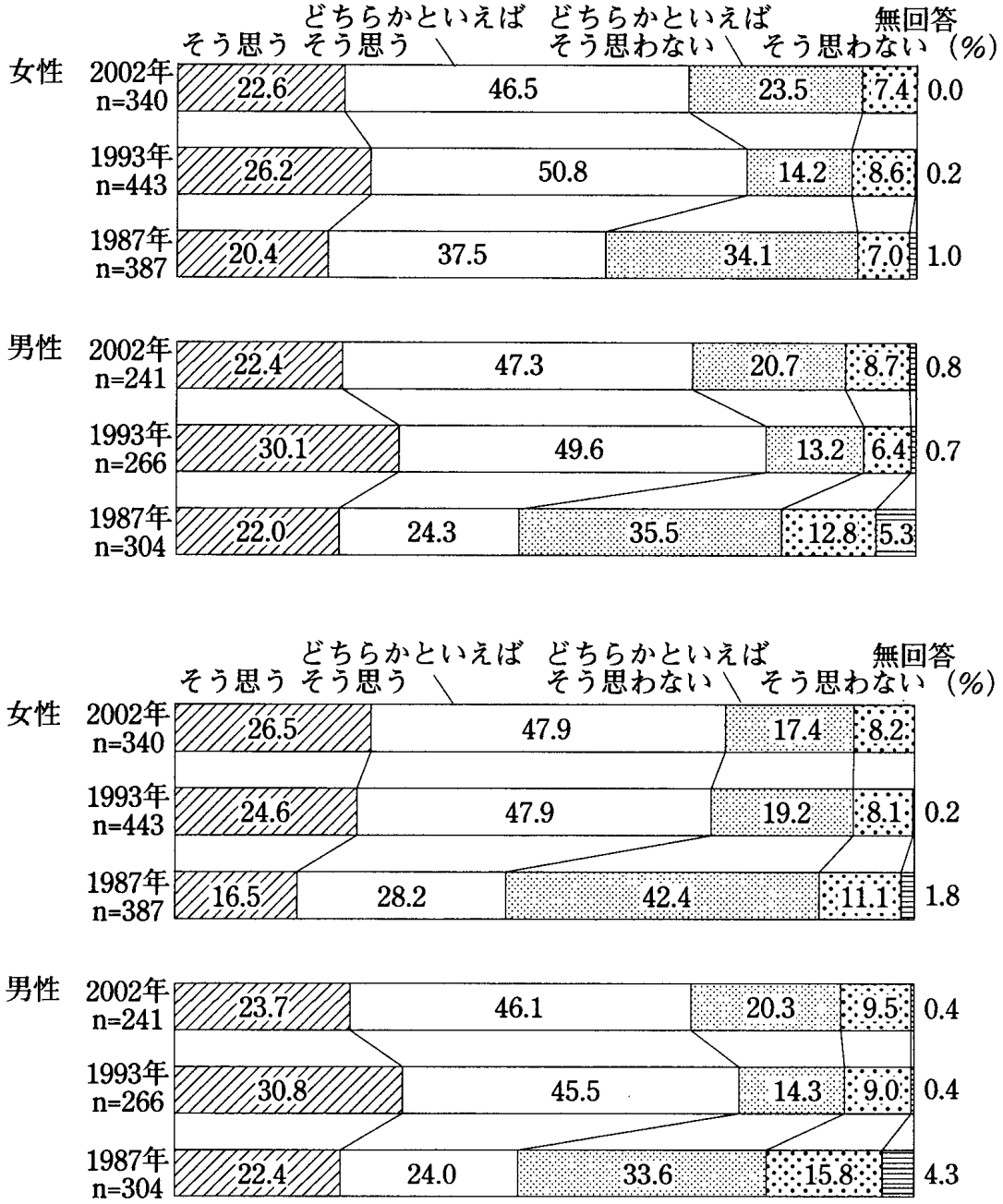
問17(1)(2)は，それぞれ「女性には女性らしさという抑圧がある」「男性には男性らしさという抑圧がある」という考えについての質問で，図４－３－３に示している。女性らしさの抑圧について，あると思っているのは「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合計して女性では69.1%，男性では69.7%となっている。男性らしさの抑圧について，あると思っているのは女性で74.4%，男性で69.8%である。男女でそれほど大きな違いはみられない。

これを過去２回の調査と比較してみると，女性らしさの抑圧について，あると思っていた女性は87年に57.9%であったのが，93年では77.0%と大きく増加していたのに対し，今回の調査では69.1%と減少している。同様に，男性らしさの抑圧があると思っていた男性は87年に46.4%，93年に76.3%と増加の傾向が見られたが，今回は69.8%と減少している。女性も

男性も，自らが受けるであろう「女性らしく，男性らしく」という抑圧について，総じて感じにくくなっていることがわかる。

93年調査から今回の調査にいたるまでの期間で，性別役割規範に大きな変化がない以上，「女性らしく，男性らしく」という抑圧にも大差はないはずである。それにもかかわらず，自らが受ける抑圧を感じない学生が増えている。さきほどの問16との関連で考えると，「女性らしく」といったメッセージに反発を感じず，また自らが受ける抑圧について無関心な女性が増えているということができるのである。女性差別がいまだ厳然と存在する社会において，自らの問題に無頓着であるというのは，危惧される状態ではないだろうか。

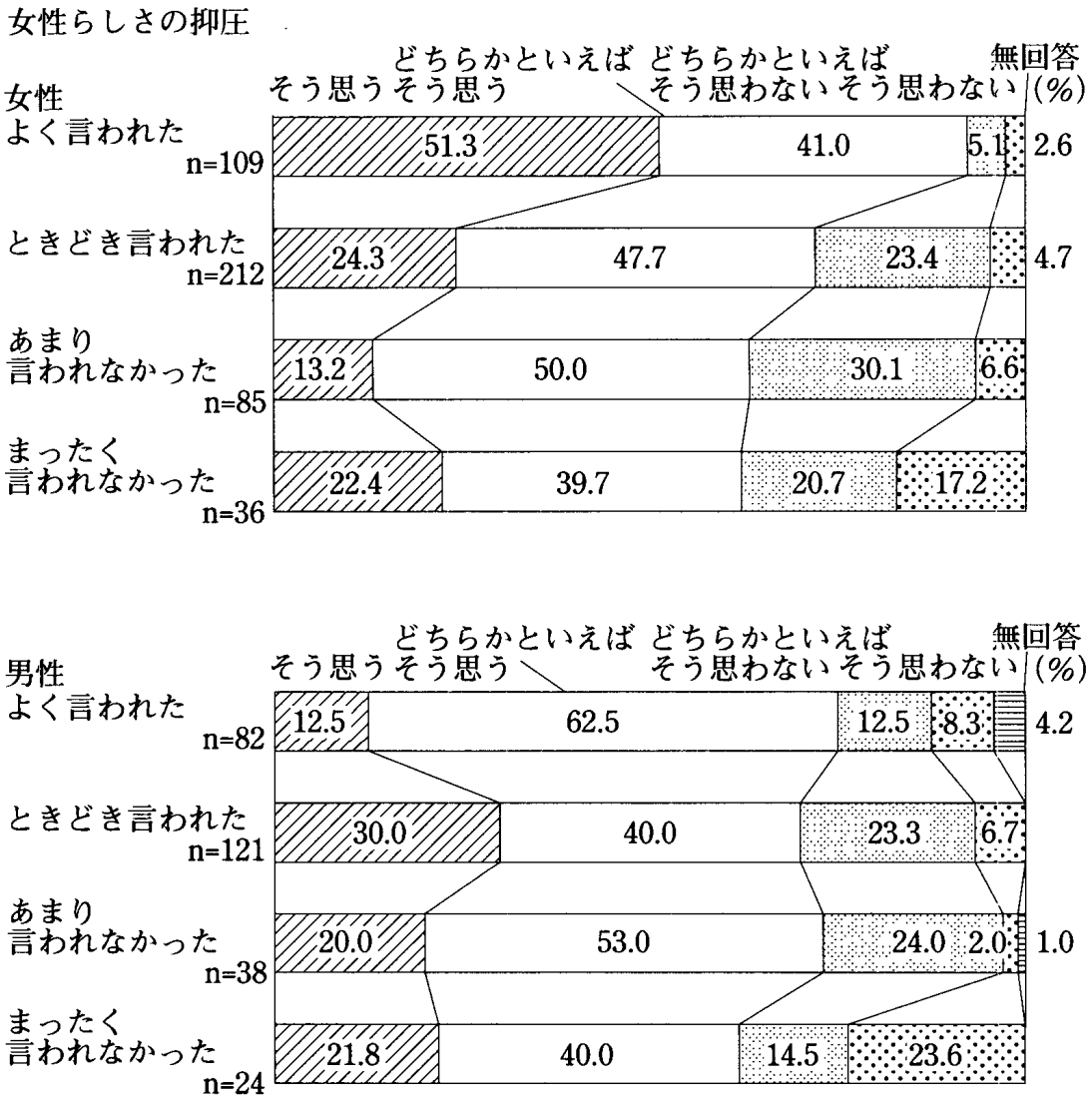
図４－３－３　女性らしさ，男性らしさの抑圧（問17-1・2）



この問17(1)(2)をそれぞれ，問16の「男は男らしく，女は女らしくと家庭で言われたか」という質問とクロスさせたのが図４－３－４である。女性も男性も，「男は男らしく，女は女らしく」と「ときどき」も含めて言われた学生たちが，「女性には女性らしさという抑圧がある」「男性には男性

らしさという抑圧がある」と考える傾向にあることがわかる。特に「女らしく」と言われて育った女性の感じる抑圧感の高さが際だっており，「どちらかと言えば」を含めて92.3%という数値となっている。また，「男は男らしく，女は女らしく」とよく言われた学生は，異性の感じる抑圧にも共感的である。単に「男らしく」「女らしく」とだけ言われて育っていても，それはやはり「男は男らしく，女は女らしく」というワンセットのメッセージとして機能しているということだろうか。

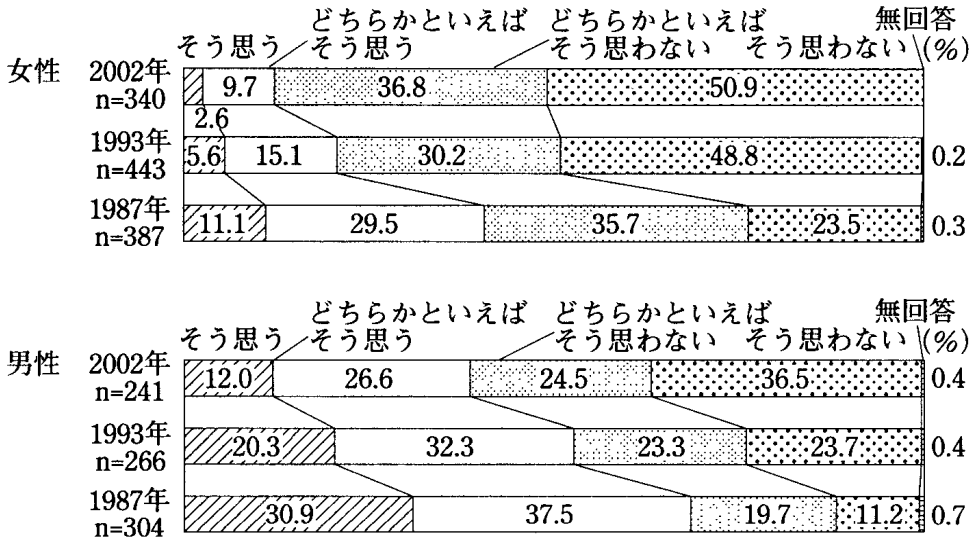
図４－３－４　「男らしく，女らしく」と言われたか×
女性らしさ，男性らしさの抑圧（問16×問17-1・2）



問17(3)は，「男性は女性の前で弱音をはくべきではない」という意見に対しての答えである。図４－３－５から明らかなように，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人をあわせると「男性は女性の前で弱音をはくべきではない」と思っている人は，女性では87年に40.6%，93年には20.7%と半減しており，そして今回の調査でも12.3%とまた大きく減少している。男性の意識をみると，87年に弱音をはくべきではないと思っていた男性は68.4%，93年には52.6%と減少の傾向があり，今回の調査で38.6%とさらに減少している。

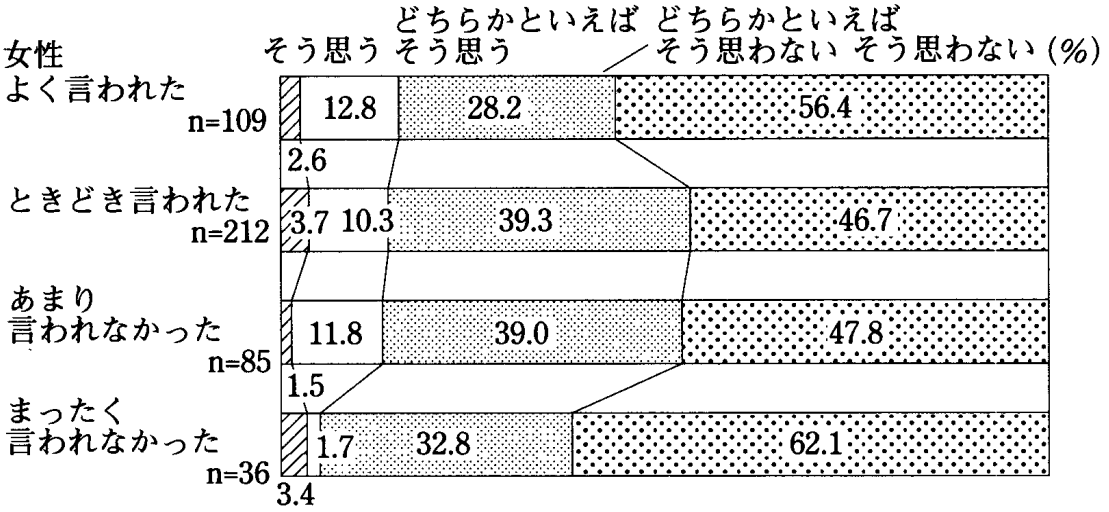
調査を重ねる度ごとに，男女とも男性が女性の前で弱音をはくことを許す傾向が強くなっている。87年の調査で弱音をはくべきではないと思っていた女性が４割程度であったことからも，元々女性は男性の弱音に対して寛容であったと考えられるが，その傾向は今回さらに強くなっている。一方、男性は87年の調査のときには，自らの弱音を許せなかった人が７割近くにものぼっていたが，今回の調査では４割を下回るまでになっている。しかし，女性に比べると，男性は自らの弱音を許せない傾向にあるようだ。

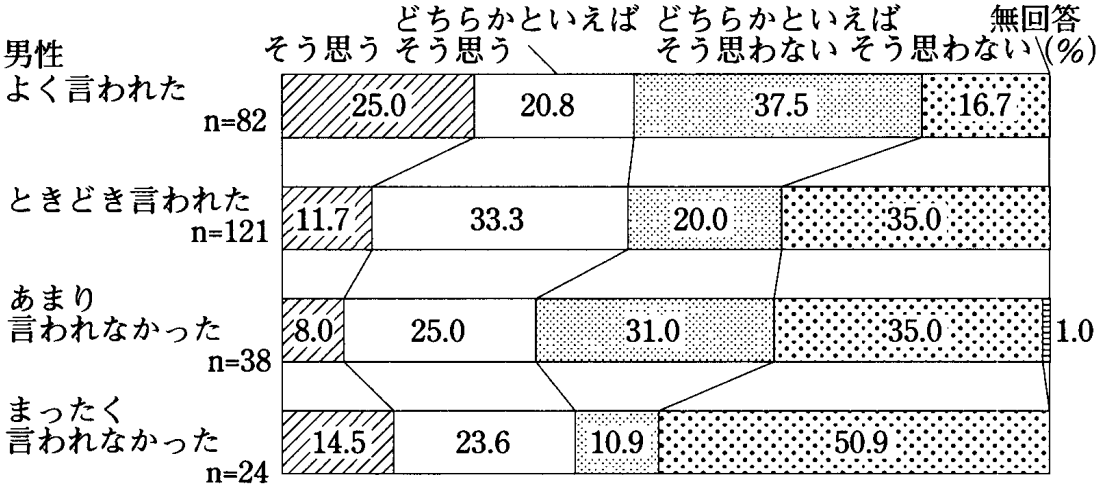
図４－３－５　男性は女性の前で弱音をはくべきではない（問17-3）



この問と，問16の「男は男らしく，女は女らしくと言われたか」をクロスさせてみよう。図４－３－６からわかるように，男性も女性も，「男は男らしく，女は女らしく」と言われなかった層に，「男性は弱音を吐いてもよい」と考える傾向にあることがわかる。

図４－３－６　「男らしく，女らしく」と言われたか×
男性は弱音をはかない（問16×問17-3）



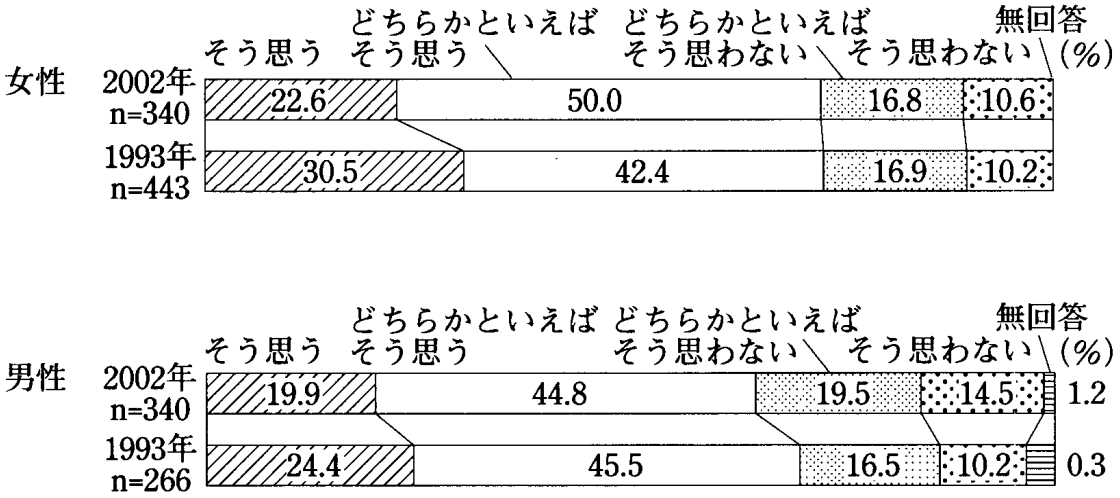


問17(4)の「やはり女性は男性に守ってもらいたいものだ」は，問17(3)の「男性の弱音」に対比した質問で，図４－３－７に示している。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合計すると，女性は72.6%，男性は54.7%となっている。93年の調査にも同じ質問があったが，その際，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた女性は72.9%，男性は69.9%であった。前回も男性に守ってもらいたいと考える女性は７割を超えており，２度の調査のうちに大差はない。しかし男性側の意識に変化がみられる。前回の調査では，７割近い男性が「女性は男性に守ってもらうべきだ」と思っていたのに，今回はそう考える男性はほぼ半数になっている。先の問17(3)とも関連するが，男性自身が従来の「男らしく」といった規範から少し自由になってきている傾向なのであろうか。

また問17(3)「男性の弱音」との関連でみると，女性は男性の弱音を許容しながらも一方で「男性に守ってもらいたい」と考えていることがうかがい知れる。一見その姿は矛盾するようにも見受けられるが，しかしそうではないのではないか。おそらく，理想とする男性像が，従来の「強い」男性像から変化してきているのではないだろうか。最近のマスコミに登場する男性タレントの姿を見ていても，「強い」男性像というよりは性的にはニュートラルなイメージのある男性が多くの女性の人気を集めている。「弱音をはく男性であってもかまわない，しかし最後はきちんと守ってほしい」という女性の本音が垣間見られる気がするのである。

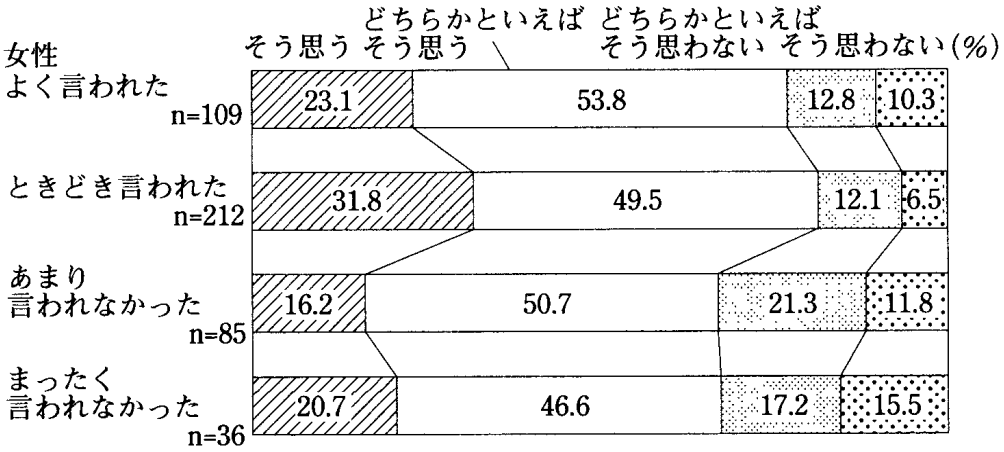
このような女性側の一見矛盾するような認識を考慮に入れると，男性の意識の変化も，単に「男らしさ」から自由になっているのではない気もする。つまり，恋愛の主導権を握っているのは女性だといわれる現在（ただし，その背景には男性主導社会があるのだが），女性の持つ理想の男性像に，男性側があわせているのではないかという見方もできるのである。女性の理想像に合わせるためであっても，男らしさにこだわるという実態が少しでも変わるのであれば歓迎すべきことであるのかも知れないが。

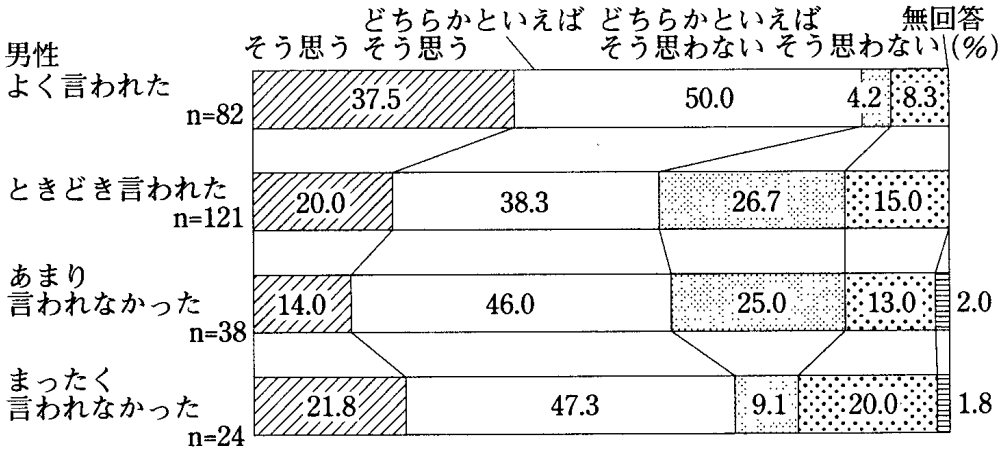
図４－３－７　女性は男性に守ってもらいたい（問17-4）



先の「男性の弱音」と比べる意味からも，「男らしく，女らしく言われたか」という質問とこの問をクロスしてみよう。図４－３－８からは，興味深いことに，「男らしく，女らしく」と言われたことと，「女性は男性に守ってもらいたいものだ」に目立った相関関係はみられないことがわかる。先の「男性の弱音」とのクロスとは対照的である。「女性は男性に守ってもらいたいものである」という認識は，「男らしく，女らしく」と家庭で言われなかった層であっても，それ以外の様々な場面で受けるメッセージということになるのだろうか。

図４－３－８　「男らしく，女らしく」と言われたか×
女性は男性に守ってもらいたい（問16×問17-4）



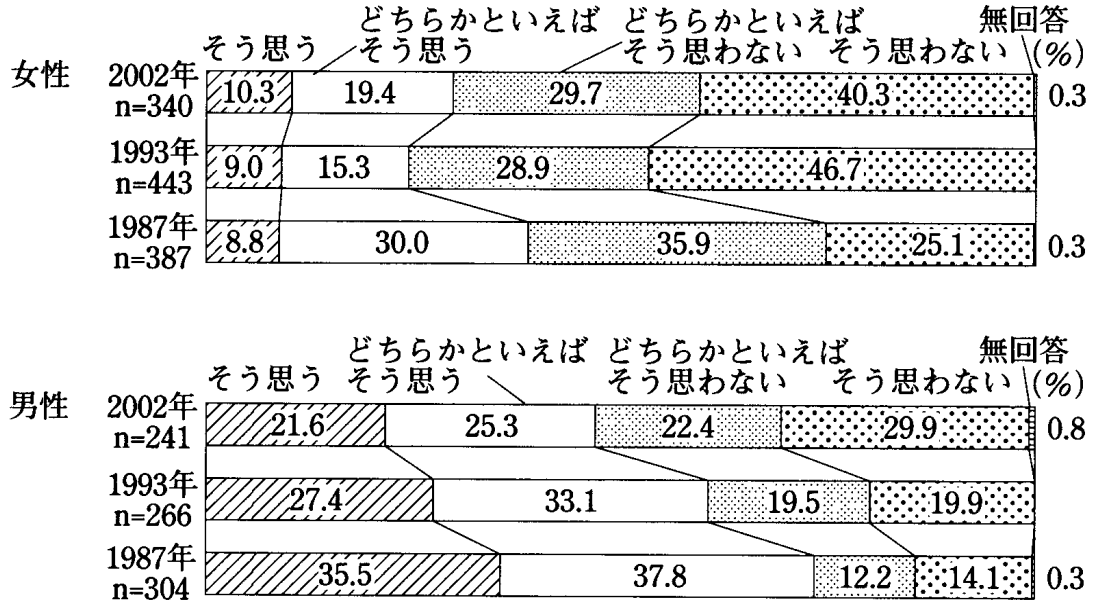


問17(5)「デートの際，コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ」に対する意見はどうだろうか。この問も87年，93年にもされているので，それとの比較をとおして考察していこう。

図４－３－９からわかるように，87年の調査で「デートの際，コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ」と考えていた女性は，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合計して38.8％であったが，93年にはその値は24.3％と減少していた。しかし，今回また「コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ」と考える女性が29.7％と若干増加している。一方，男性は，「コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ」と考える人が87年では全体の73.3％，93年には60.5％と女性同様減少傾向にあった。そして今回も

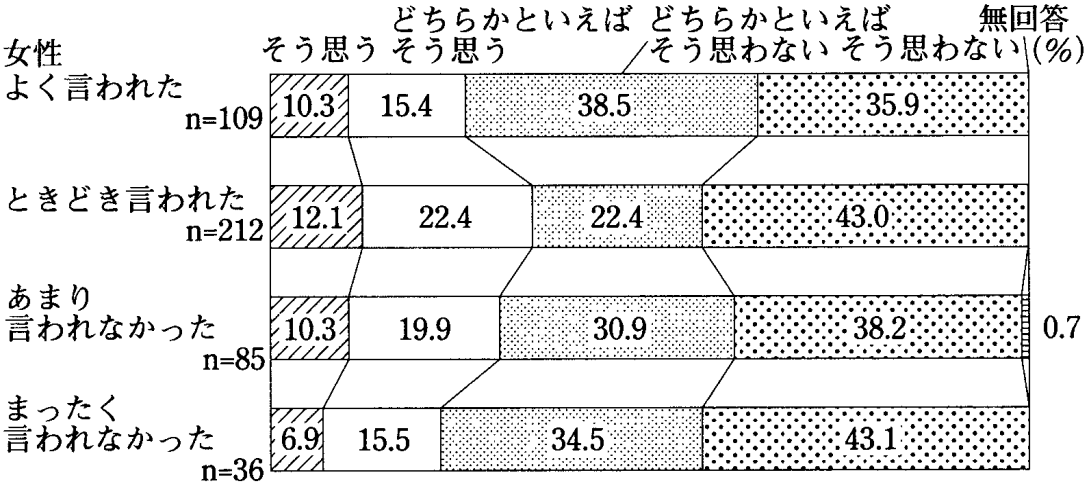
46.9%と，さらに減少している。男女を比べると，より男性に「コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ」とする考えが根強いといえるが，しかし前回，前々回の調査を考慮に入れると，男性側の意識の変化が急激である。「デートの際，コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ」と考える人は，男女とも半数以下になった。

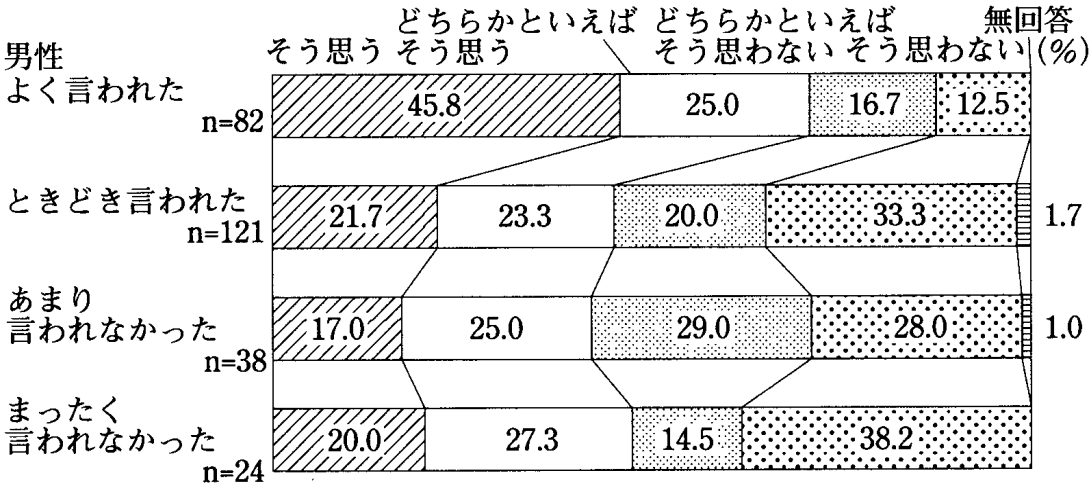
図４－３－９　デートの際のコーヒー代（問17-5）



この問と「男らしく，女らしく言われたか」という問16をクロスさせたものが図４－３－10である。女性については，「女らしく」と言われたこととデートの際のコーヒー代にさほどの相関関係があるとは思われない。一方，男性をみると，「男らしく」とよく言われた男性がコーヒー代にこだわっていることがわかる。

図４－３－１０　「男らしく，女らしく」と言われたか×
デートの際のコーヒー代（問16×問17-5）





4－3－3　性的関係（セクシュアリティ）

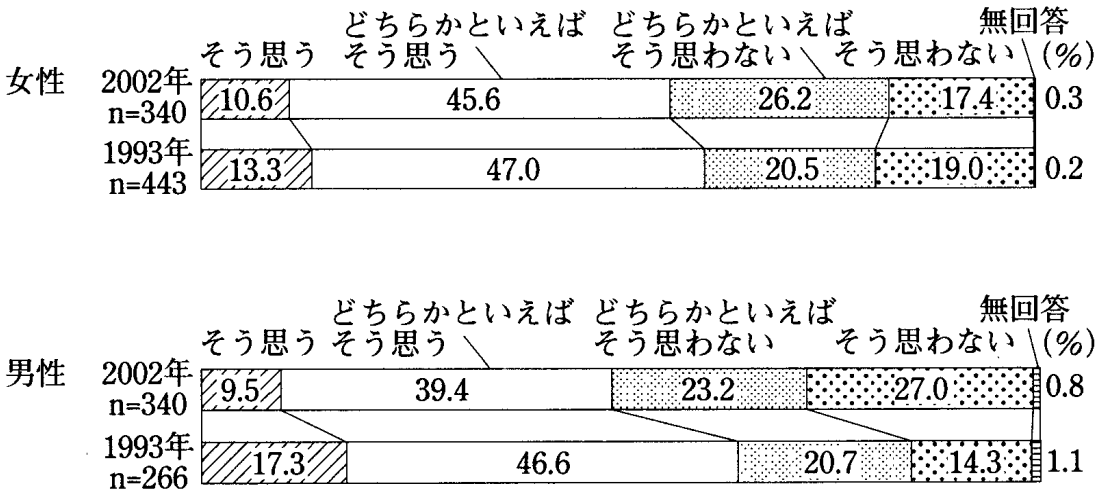
17. 世の中には次のような意見がありますが，あなたはそれぞれについてどう思いますか。あてはまるところに○をつけてください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
(6)性的関係では男性がリードすべきだ	1	2	3	4
(7)女同士，男同士の同性の結婚も認めるべきだ	1	2	3	4
(8)本人の自発的意思であっても，売春することはよくない	1	2	3	4
(9)性風俗店に行く男性は，非難されるべきである	1	2	3	4
(10)夫婦別姓が認められるのはよいことだ	1	2	3	4

問17(6)「性的関係では男性がリードすべきだ」はどうだろうか。この問は93年の調査でもされているので，これもその比較をとおしてみていこう。

図４－３－11に示されているように，93年は「性的関係では男性がリードすべきだ」と考えていた女性は，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて60.3%，そして今回はそう考える女性は56.2%となっている。男性のうち「性的関係では男性がリードすべきだ」と考えていた比率は93年には63.9%と女性よりもそう考える割合が若干高かったのが，今回は48.9%と，その値は女性を下回っている。ここでも，男性の意識に大きな変化がみてとれるのである。

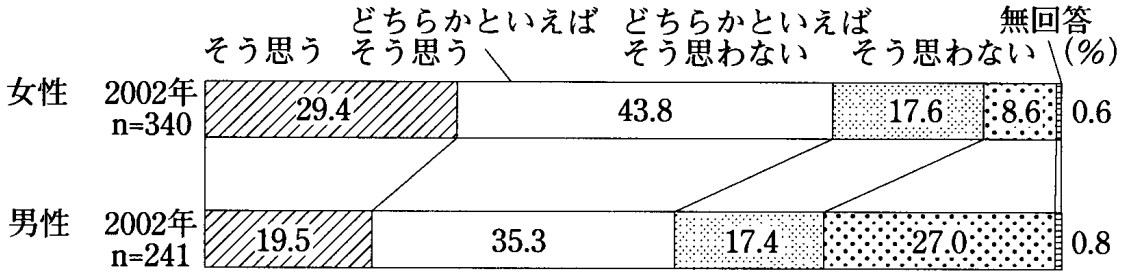
図４－３－１１　性的関係における男性主導（問17-6）



問17(7)「女同士，男同士の同性の結婚も認めるべきだ」は同性愛を認めるか否かを問う質問で，今回はじめてされたものである。ただ，質問が「結婚」を認めるかどうかとなっているので，単純に同性愛を認めるかを問われているのだと受け取る人もいれば，憲法の改正も含めて同性の夫婦を認めるのかというレベルで質問を受け取る人もいるだろうと思われる。そのあたりも勘案して考えていくべきだろう。

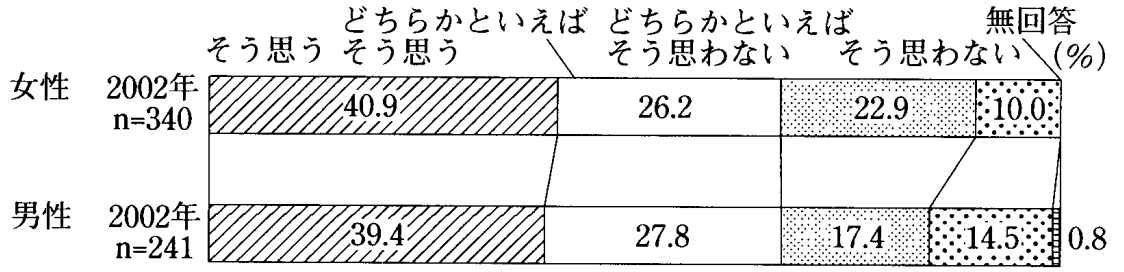
図４－３－12に明らかなように，「女同士，男同士の同性の結婚も認めるべきだ」と考える女性は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた者を合計して，全体の73.2%であり，一方，男性は全体の54.8%となっている。男女とも半数以上が同性のカップルを認める傾向にある。ただし，男女間に20ポイント近くの差があり，女性の方が同性愛には好意的である。

図４－３－１２　女同士、男同士の結婚（問17-7）



問17(8)(9)は買売春を問う質問である。93年調査でも買売春を問う質問はあったが，今回は売春行為と買春行為を分けて問うている。まずは売春行為に対する質問である(8)「本人の自発的意思であっても，売春することはよくない」から考察していこう。図４－３－13からわかるように，「本人の自発的意思であっても，売春はよくない」と考えるのは「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合計して，女性で67.1%，男性で67.2%となっている。男女ともほぼ同じく全体の７割の人が，たとえ本人の自発的なものであったとしても，売春という行為は許されるものではないと考えていることがわかる。

図４－３－１３　本人の意思であっても売春はよくない（問17-8）

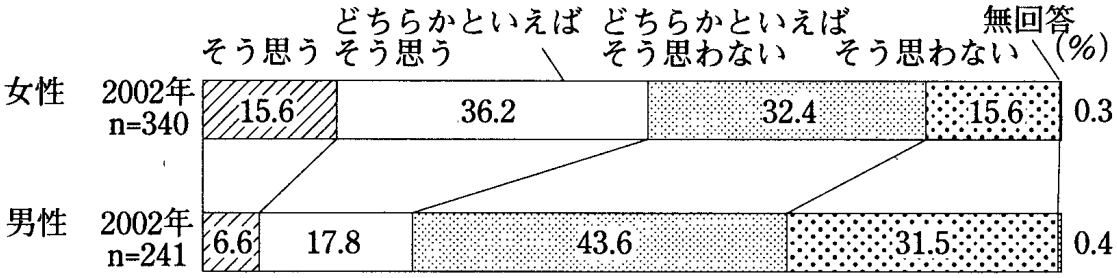


問17(9)「性風俗店に行く男性は，非難されるべきである」は，ストレートではないが買春行為にかかわる質問で，図４－３－14に示している。「性風俗店に行く男性は，非難されるべきである」と考える女性は，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合計して，全体の51.8%で，半数が非難されるべきだと考えていることがわかる。「どちらかといえばそ

う思わない」「そう思わない」を合計すると48.0%となり，半数は性風俗店に行く男性は非難されるべきものではないと考えている。性風俗店に行く男性に対する女性の評価は大きく割れているといえるだろう。ただし，これは一般論としての考えで，自分のパートナーである男性が性風俗店に行くということになれば，また答えは変わるかも知れない。

一方，「性風俗店に行く男性は，非難されるべきである」と考える男性は，全体の24.4%となっており，非難されるべきだと考えるのは４人のうちわずか１人だけで，あとの３人はそのように考えていないことがわかる。

図４－３－１４　性風俗店に行く男性は非難されるべき（問17-9）



問17(8)の売春行為（大半が女性の売春行為を連想しているのではないだろうか）には７割近い男女が厳しい評価を下しているのに対し，男性の買春行為（性風俗店に行くという行為）に対しては概して寛容であるといえるだろう。特に男性自身，大変甘いと言わざるを得ない。ただ「性風俗店」という語から，ストレートに買春行為の是非が問われているのだと思う人もいれば，そうでない人もいるだろう。特にそのような店に行く機会があまり多くないと思われる女性は，性風俗店に行くことをストレートに買春に結びつけて考えなかったかも知れない。しかし，実際に足を運んだり，情報を得たりする機会が多いであろう男性自身は，そこで何がおこなわれているかわかっているはずである。最近の裁判の判決においても，個室付き浴場の中で買売春がおこなわれていることは「公知の事実」とされている。つまり性風俗店でおこなわれていることは買春行為であるという

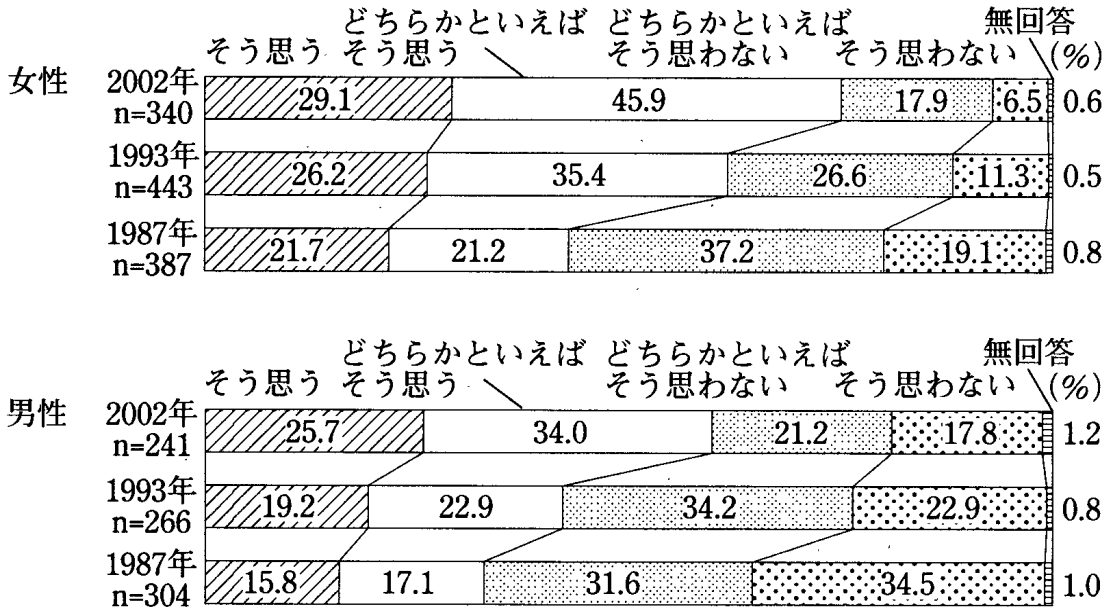
認識が一般常識であるとされている。

ここには「女性の売春には厳しく，男性の買春には甘い」という従来の日本社会の意識そのものが反映されている。20歳前後という若い大学生の意識にも，それが刷り込まれていることに愕然とするばかりである。買う男性の存在が買売春を成立せしめているのだということを知ってもらいたい。

問17(10)「夫婦別姓が認められるのはよいことだ」は，87年，93年にもされている質問なので，それとの比較をとおして考察しよう。結果は図４－３－15に示している。

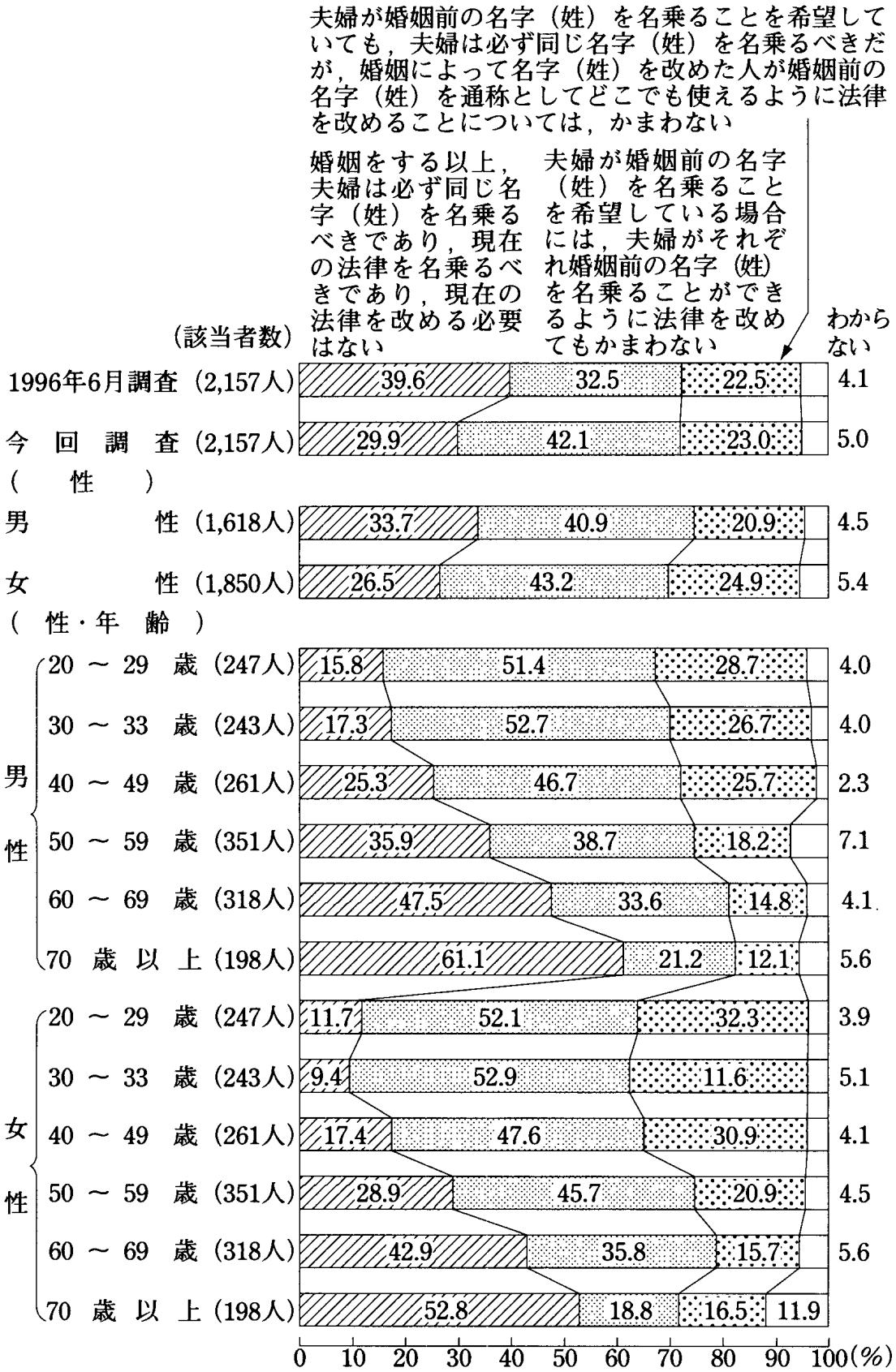
87年に夫婦別姓を認めていた女性は，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて，全体の42.9%，つまり半数に満たなかったのが，93年になると61.6%と大きく増えている。そして今回，その割合は75%となっており，女性の４人のうち３人は夫婦別姓に賛成していることがわかる。一方，男性は87年にはわずか32.9%しか夫婦別姓に賛成していなかったのが，93年には42.1%となり，そして今回59.7%，すなわち６割近い男性が，夫婦別姓に賛意を示していることがわかる。男女とも，年を追うごとに夫婦別姓に賛成する人が増えているといえるだろう。女性に賛意を示す傾向が強いのは，結婚に際して多くの場合女性が姓を改めることになるからであろう。

図４－３－１５　夫婦別姓賛成（問17-10）



夫婦別姓に賛意を示す割合が高いのは，関西大学の学生に限ったことではない。2000年に内閣府のおこなった世論調査でも，その傾向が明確に現れている（参照図４－３－１）。選択的夫婦別姓について，「夫婦が婚姻前の名字を名乗ることができるように法律を改めてもかまわない」もしくは，「婚姻によって名字を改めた人が婚姻前の名字を通称としてどこでも使えるように法律を改めてもかまわない」と答えた，すなわち夫婦別姓賛成派は，20代男性で80.1%，20代女性では84.4%である。このような声を十分に政策に反映させて，夫婦別姓が当たり前に認められる社会は来ないものだろうか。現在においても，結婚に際して，98%以上の割合で女性が姓を改めているのである。確かに女性の改姓を強制する法律は存在しない。しかし，実際には「結婚のときには女性が姓を改めるものだ」という意見がまかりとおっているのが現状である。その現実を変えるためにも，夫婦別姓が合法的に認められるシステムを作りあげることが必要である。

参照図４－３－１　選択的夫婦別氏制度（2000年５月内閣府世論調査）



4－3－4　恋愛観，結婚観

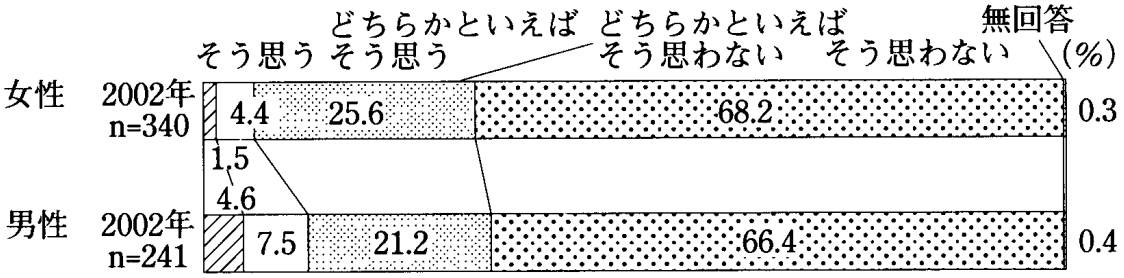
18. 次のような考え方について，あなたはどう思いますか。あてはまるところに○をつけてください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
(1)有名国立大学に在学している異性は，恋人にしたくない	1	2	3	4
(2)自分より酒量の多い（アルコールに強い）異性は，恋人にしたくない	1	2	3	4
(3)恋人とドライブするときは，助手席に座りたくない	1	2	3	4
(4)夫婦別姓を強く望む異性は，結婚相手にしたくない	1	2	3	4
(5)結婚相手の収入は自分よりも多くないほうがよい	1	2	3	4
(6)自分よりさまざまな知識や情報をもっている異性を恋人にしたい	1	2	3	4
(7)決断力があり，しっかりと自己主張する異性を恋人にしたい	1	2	3	4

問18は，自分の恋愛観，結婚観に関係する問いである。(1)から順にみていこう。

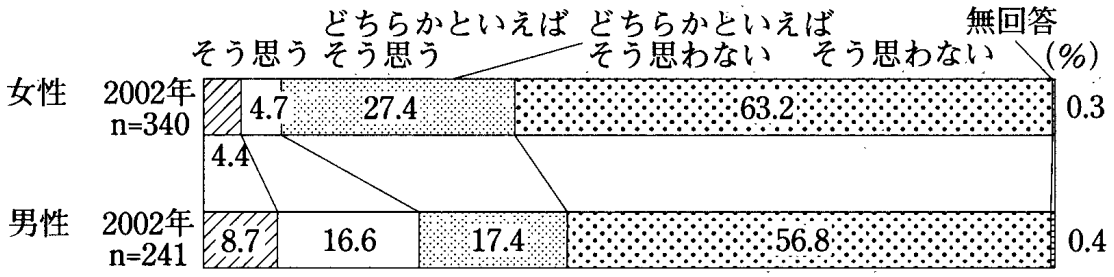
(1)「有名国立大学に在学している異性は，恋人にしたくない」について，図４－３－16からわかるように，「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えた女性を合計すると93.8%，「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えた男性は87.6%となっている。男女とも，有名国立大学の恋人は歓迎する傾向がある。女性は自分のパートナーの男性にいわゆる「三高」（高学歴，高収入，高身長）を求めるとよくいわれるが，この問の結果にも現れている。しかし，男女の間にさほどの差は認められない。

図４－３－１６　有名国立大学生は恋人にしたくない（問18-1）



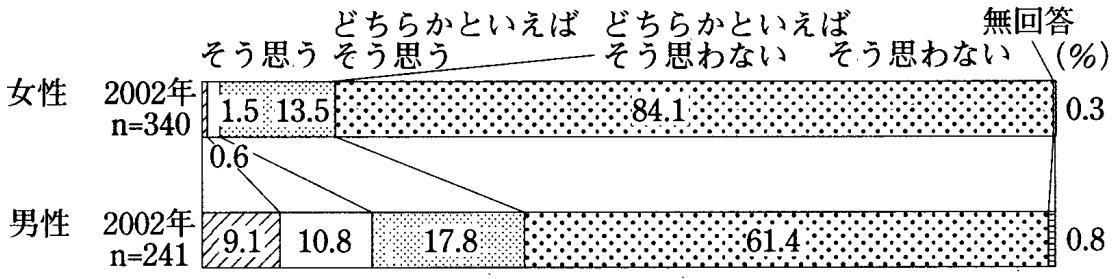
問18(2)(3)は，日常生活の具体的な場面での恋人との関係を問う質問である。(2)「自分より酒量の多い（アルコールに強い）異性は，恋人にしたくない」という意見については，図４－３－17に明らかなように，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」人は，女性で9.1%，同じくそう答えた男性は25.3%である。男性の方に，自分よりアルコールの強い恋人をあまり好まない傾向があるようだ。

図４－３－１７　自分より酒量の多い異性は恋人にしたくない（問18-2）



(3)「恋人とドライブするときは，助手席に座りたくない」という考えについて，関大生はどう思うのだろうか。図４－３－18から，「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」，つまり助手席に座りたいと思う女性が97.6％で圧倒的多数を占めている。これに比べて助手席に座りたいと思う男性は79.2％となっており，女性に比べて男性は「助手席に座る」ということに対して，抵抗感が若干うかがえる。

図４－３－１８　ドライブのときは助手席に座りたくない（問18-3）



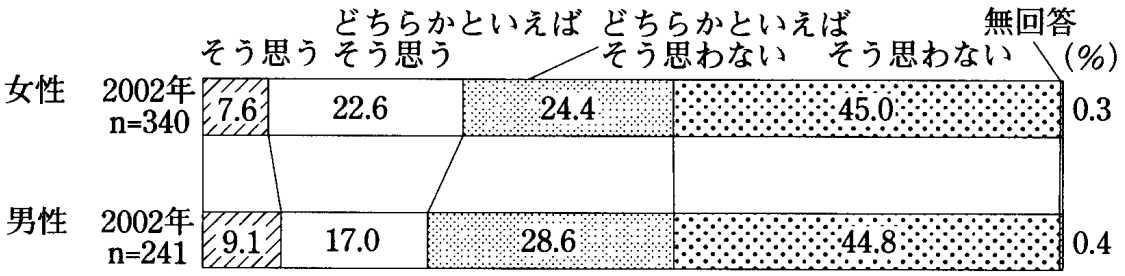
このふたつの質問に対する結果をみると，「アルコールの強さ」，「車の助手席に乗る」という具体的な場面において，男性の抵抗感が強いことがわかる。やはり，「男性は強くなければならない」という意識があるのだろう。ただし，男女の間で答えが逆転するほどの差は認められない。

(4)「夫婦別姓を強く望む異性は，結婚相手にしたくない」に対する回答をみていこう。夫婦別姓についての質問は問17(10)でもされているが，問17の方は一般論として賛成するかどうかを問うものであり，この質問は，自分の結婚に際してどう考えるかを問うものである。

図４－３－19に明らかなように，「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えた女性を合計すると，69.4％となっている。つまり７割近い女性は夫婦別姓を望む相手と結婚してもかまわないと考えているわけである。一方男性は，「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせて73.4％で，女性よりも逆に男性の方が，自分のパートナーの夫婦別姓には好意的であることがわかる。問17(10)「夫婦別姓が認められることはよいことだ」についての答えでは，75.0％の女性が夫婦別姓について賛意を示していたが，その値と比べると，自分の結婚に直面して考えると，夫婦別姓に賛意を示す割合が若干ではあるが減少している。男女の対比で考えると，問17(10)では，男性よりも女性の方が夫婦別姓に対して賛意を示す傾向にあったのに対し，問18(4)ではその逆になっているのが興味深い。女性は，一般論としては夫婦別姓に賛成するが，いざ自分の問題として直面すると，二の足を踏む傾向にあるということであろうか。

男性の回答に注目すると，問17(10)では夫婦別姓に賛成する男性は59.7％であったのに対して，問18(4)では夫婦別姓を望む異性と結婚してもよいと考える男性は73.4％に及んでいる。ここでも，男性の恋愛難や結婚難（主導権を女性が握っているため）が指摘されている現在，女性の要望に少しでも応えようとする姿がみえているということなのだろうか。

図４－３－１９　夫婦別姓を望む異性は結婚相手にしたくない（問18-4）



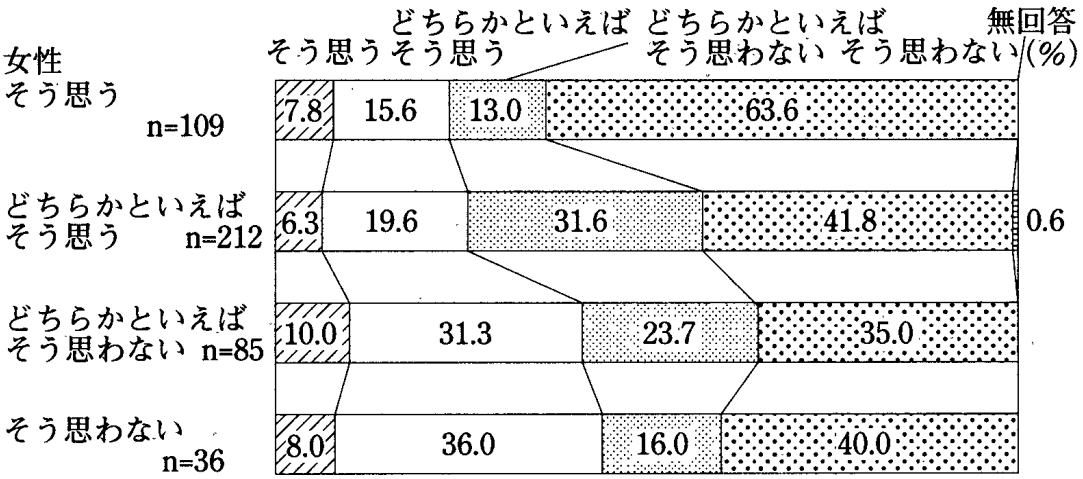
この問と，問17(1)「女性らしさの抑圧」，および問17(2)「男性らしさの抑圧」をクロスさせてみよう。

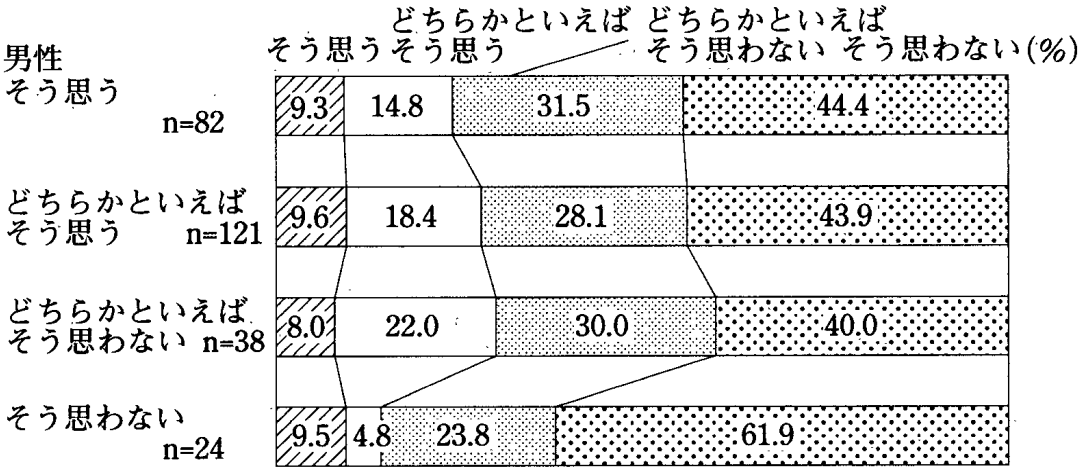
図４－３－20からわかるように，「女性らしさの抑圧」を感じる女性に

「どちらか」も含めて「そう思わない」と答える女性が多い。つまり「女性らしさの抑圧」を感じる女性は，結婚相手が夫婦別姓を望む男性であってもかまわないと考える傾向にあることがわかる。

一方，男性の感じる「女性らしさの抑圧」と結婚相手の夫婦別姓に大きな相関関係はないように思われるが，ただ「女性らしさの抑圧」をまったく感じない男性に，「そう思わない」と迷いなく答えた人が61.9%もいるのが注目される。「どちらか」を含めると，「女性らしさの抑圧」をまったく感じない男性の85.7%が結婚相手が夫婦別姓を求めてもかまわないと考えている。

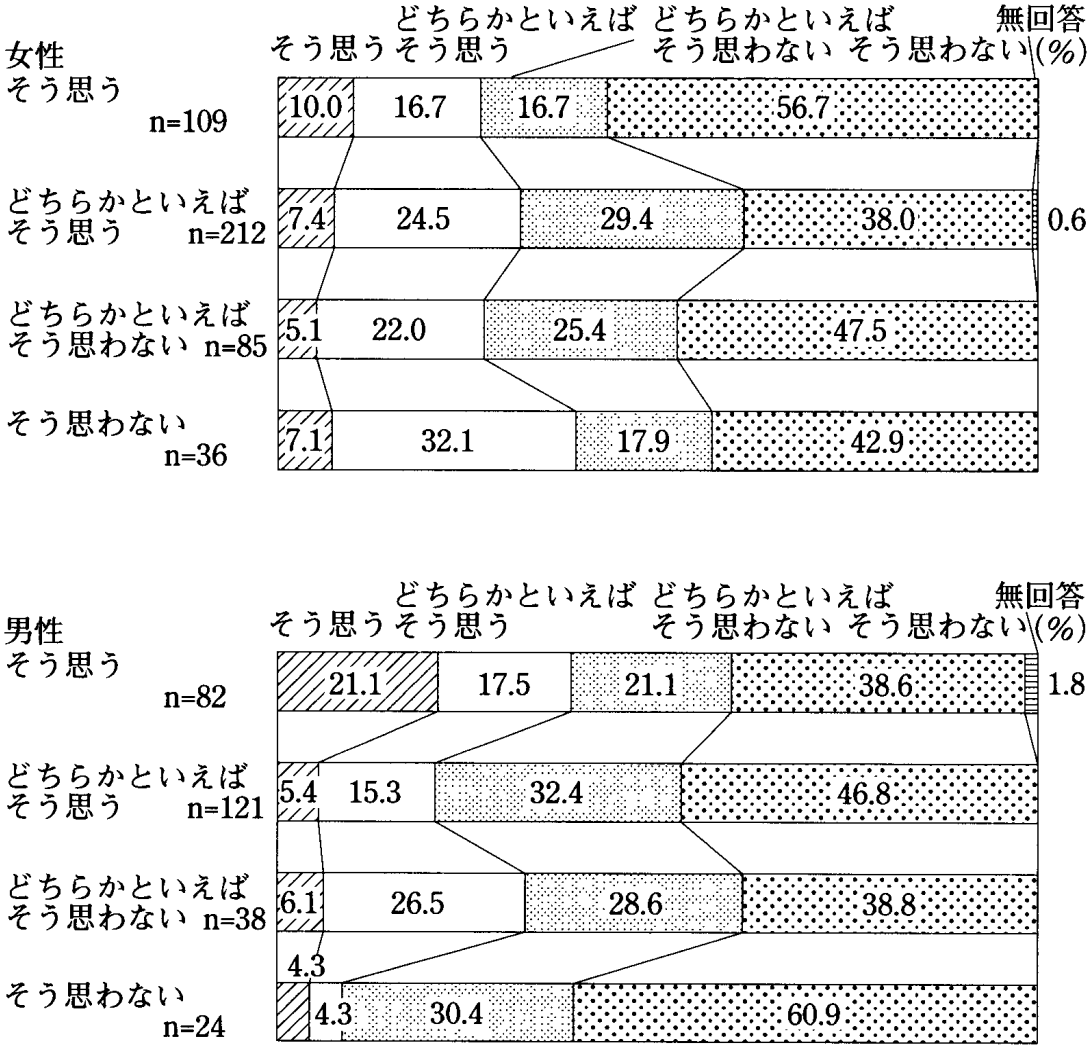
図４－３－２０　「女性らしさの抑圧」×夫婦別姓を望む結婚相手
（問17-1×問18-4）





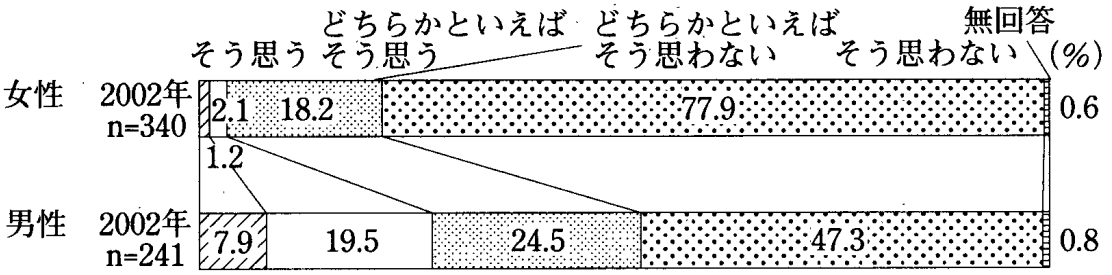
では，「男性らしさの抑圧」とのクロスはどうであろうか。図４－３－21からは女性の感じる「男性らしさの抑圧」と結婚相手の夫婦別姓には，さほどの相関関係があるようにはみられない。しかし男性の感じる「男性らしさの抑圧」はそうではないようだ。「男性らしさの抑圧」をまったく感じない男性のうち，「どちらか」も含め「そう思わない」と答えた人が91.3％も存在する。また男性は，「女性らしさの抑圧」「男性らしさの抑圧」の双方についてそれを感じない人が，結婚相手の夫婦別姓に好意的であることがわかる。女性が「女性らしさの抑圧」を感じる女性ほど結婚相手の夫婦別姓に好意的であったことと対照的である。

図４－３－２１　「男性らしさの抑圧」×夫婦別姓を望む結婚相手
（問17-2×問18-4）



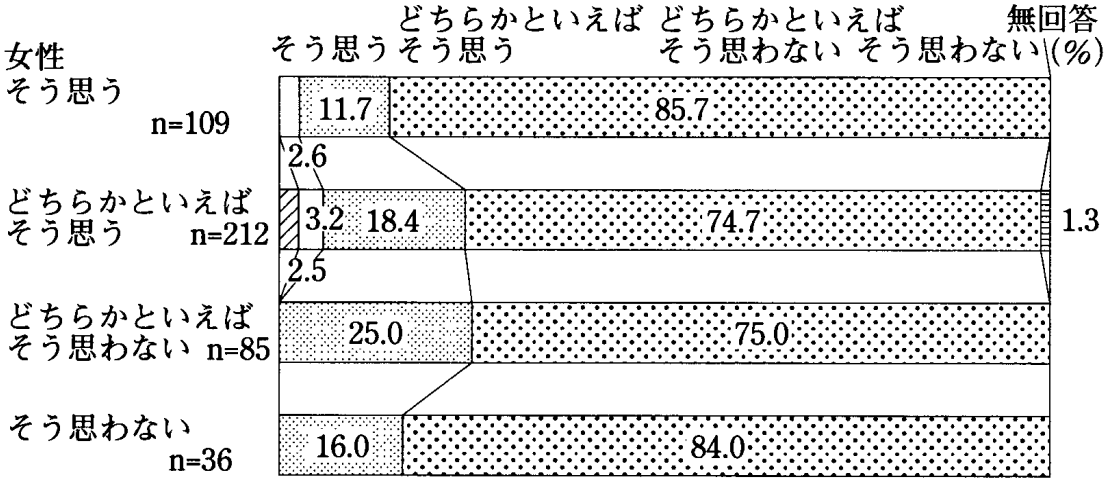
次に，(5)「結婚相手の収入は自分よりも多くないほうがよい」という意見に対しての答えをみていこう。図４－３－22からわかるように，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた女性はわずか3.3％であるが，男性で同様の答えを出したのは27.4％である。男性がより経済力にこだわっていることがわかる。ここでも女性が男性に三高を求める姿がある。このことは女性が男性に経済的に依存しており，その依存関係はとりもなおさず男性による女性の支配関係と表裏一体であることを表しているといえるだろう。先のデートの際のコーヒー代とも関連するのではないだろうか。

図４－３－２２　結婚相手の収入は自分より多くないほうがよい（問18-5）



この問と「女性らしさの抑圧」「男性らしさの抑圧」をクロスさせてみよう。図４－３－23から，「女性らしさの抑圧」を感じる感じないにかかわらず，女性は結婚相手の収入が自分より多いほうが好ましいと考えていることがわかる。ただし「女性らしさの抑圧」を感じる女性のうち，若干ではあるが「結婚相手の収入は多くないほうがよい」と答える人が存在している。「女性らしさの抑圧」を感じている女性の一部は女性から男性への経済的な依存関係を認識しており，その傾向から意識的に逸脱しようとしているとも考えられる。先ほど，夫婦別姓を望む人と結婚してもかまわないと考える傾向にあったのも，「女性らしさの抑圧」を感じる女性であった。このことからも，そのように考えてよいのではないだろうか。

図４－３－２３　「女性らしさの抑圧」×結婚相手の収入（問17-1×問18-5）



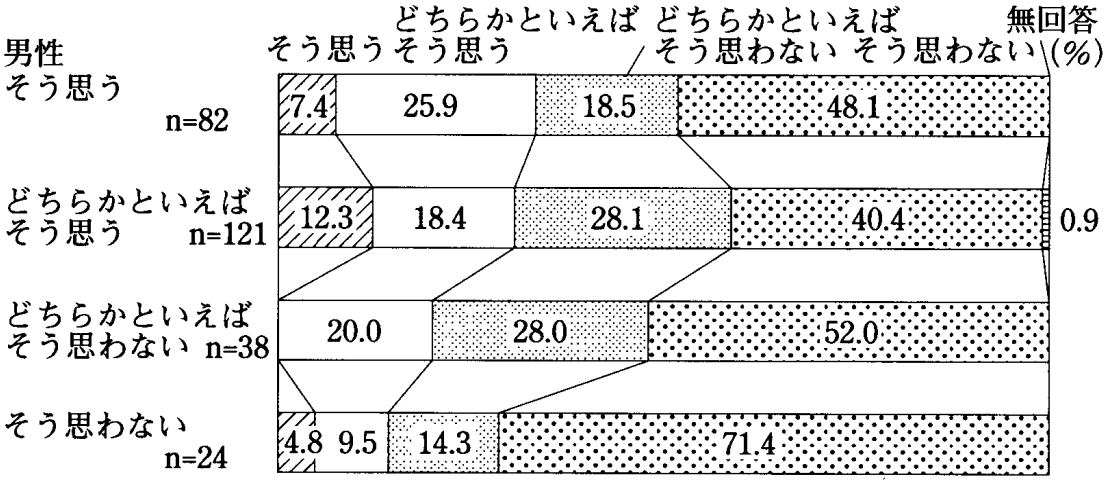
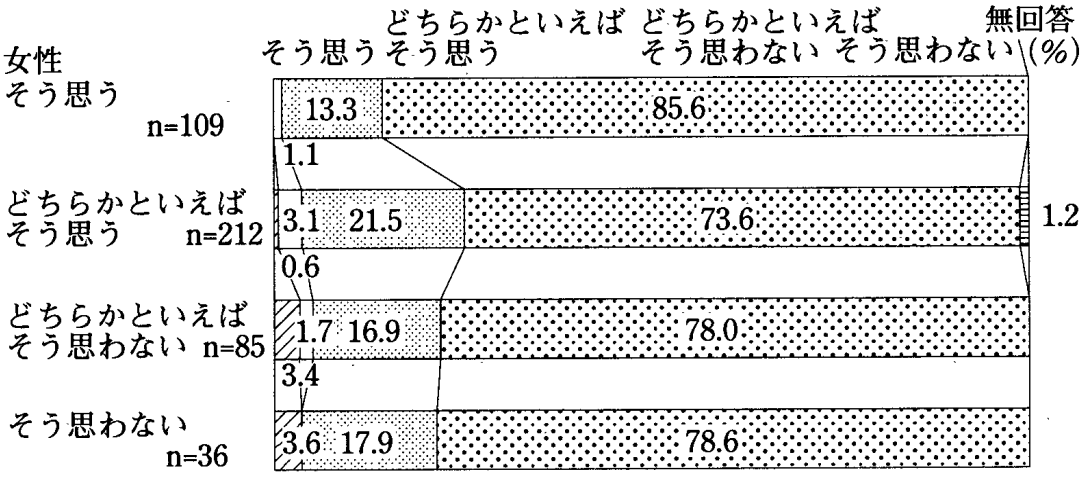
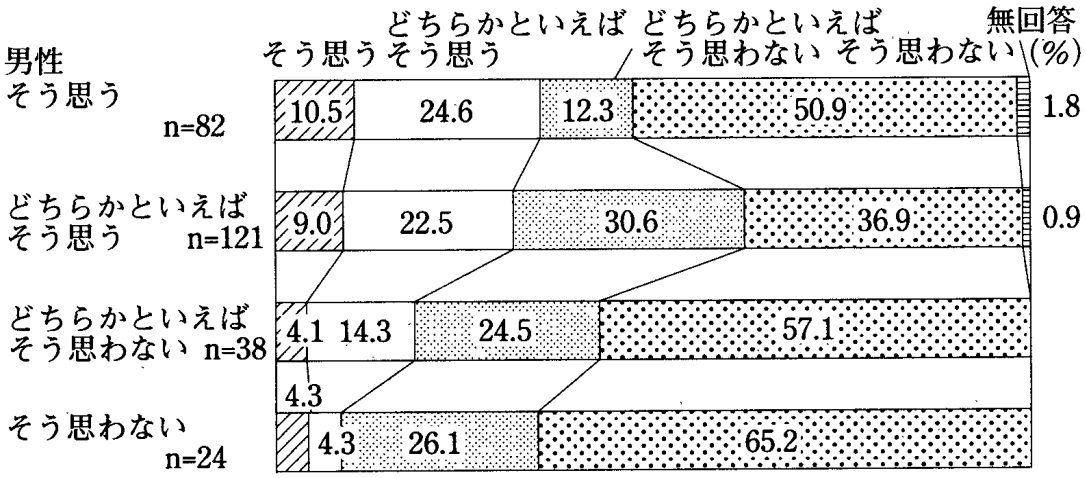


図４－３－24からは，女性の感じる「男性らしさの抑圧」と結婚相手の収入には大きな相関関係がないことがわかる。男性は「男性らしさの抑圧」がないと感じている層に，結婚相手の収入にこだわらない傾向がうかがえる。特に「男性らしさの抑圧」をまったく感じない層のうち，92.3%の男性が結婚相手の収入は自分より多くてもよいと考えていることに注目したい。

図４－３－２４　「男らしさの抑圧」×結婚相手の収入（問17-2×問18-5）

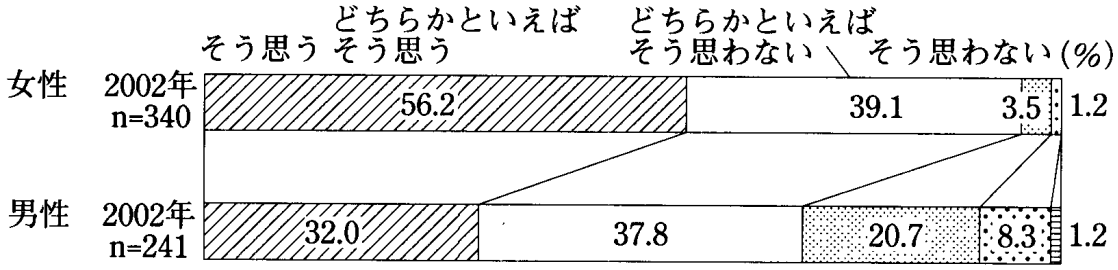




(6)(7)は自分のパートナーの教養や決断力を問う質問である。

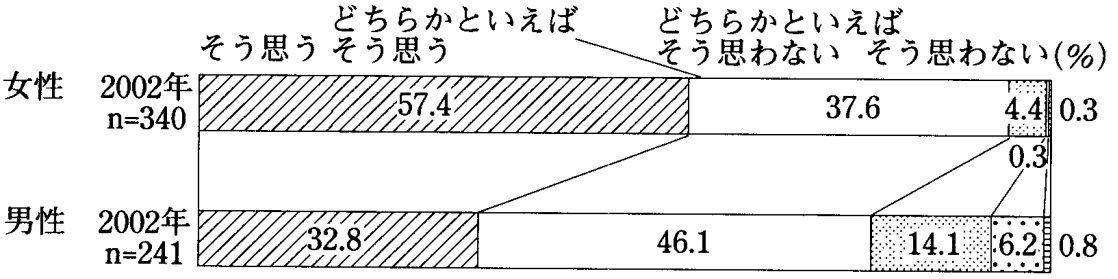
(6)「自分よりもさまざまな知識や情報をもっている異性を恋人にしたい」については，図４－３－25に明らかなように，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた女性は95.3%である。圧倒的多数の女性は，自分よりも知識や情報量の豊かな恋人を望んでいることがわかる。同様に男性で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えたのは全体の69.8%である。やはり，男性は自分よりも知識や情報を多くもつ恋人を，女性ほど望んでいないことがわかる。

図４－３－２５　自分より知識や情報をもつ異性を恋人にしたい（問18-6）



(7)「決断力があり，しっかりと自己主張する異性を恋人にしたい」という考えについては，図４－３－26に示している。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた女性を合計すると95.0%となり，ここでもまた圧倒的多数の女性が決断力に富んだ自己主張できる男性を望んでいることがわかる。男性においては「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせると，全体の78.9%であり，(6)の質問と同様，決断力のある恋人を女性ほどは望んでいない。

図４－３－２６　決断力，自己主張する異性を恋人にしたい（問18-7）



問18を通して考えてみると，女性は男性に学歴や経済力，知識や決断力など，さまざまな面において常に自分よりもうわまっていて欲しいと思う傾向が明確である。一方，男性が女性に対して自分よりもうわまっていて欲しいと考える傾向はそれほど強くはない。やはり，男性が女性よりも上位に立った恋愛観，結婚観が，ある一定程度，生きているといえる。

4－3－5　まとめ

では，最後に関西大学学生の女性観，男性観，結婚観について概観してみよう。87年，93年，今回と通して考えると，表面的には従来の「女らしさ」「男らしさ」から少しずつではあるが解放されてきているように見受けられる。女性の意識の変化はもちろんであるが，特に今回の調査では，男性の意識に大きな変化がみられた。「男性の弱音」や「性的関係における男性のリード」などについては，「男らしさ」にこだわる層がどちらかといえば少数になってきているのが印象的である。

恋愛，結婚に関する意識では，やはり男性がある一定程度上位に立った恋愛観，結婚観がうかがえた。

一方，買売春の問題についての意識は，根強く崩れないところもあるようだ。特に男性の買春行為に対する評価の甘さからは「売る女性に厳しく，買う男性に甘い」というこれまでの日本社会に浸透してきた認識が，20代の学生の中にも広範に存在することが明白になった。「売る女性に厳しく，買う男性に甘い」という認識は，結局のところ「慰安婦」問題にも通ずる認識である。国際社会からは「慰安婦」問題に関するその責任を指摘されているのにもかかわらず，問題を曖昧にし，なかには「働いていた女性は商売としてやっていたのだから犯罪にはあたらない」などといった言葉が聞かれることさえある日本社会の現状を鑑みると，関大生の買売春に関する現状認識も看過しえないのである。

また，87年，93年と比較して，女性も男性も「女性らしさの抑圧」「男性らしさの抑圧」を感じない傾向にあるのが気にかかるところである。それに加え，「女性らしく」といったメッセージを受けたときに反発を感じる女性が少なくなっているのも引っかかるところである。現在，1999年に成立した「男女共同参画社会基本法」をめぐって大きな揺り戻しの動きがある。基本法は，多くの女性の期待をもって成立したものであったが，女性団体からは「男女平等基本法」を望む声が多かったのも事実である。最近では，「基本法は男らしさ，女らしさを否定するものではない」などと

いった言説が政治家の口から出たこともあった。このような現状は「男女共同参画」といった心地よい言葉で，女性差別が見えにくくされてしまっていることと無関係ではないような気もするのである。今回調査の，男女とも自らの抑圧の無関心であったり，「女性らしく」とのメッセージに反発を覚えない女性が増えたりといった状況も，この基本法をめぐる事象とのつながりで考えることができるのではないだろうか。

今回の調査から明らかになったのは，関大生は総じて，社会の問題と自分自身とを関連づけて考えず，ジェンダーや性別役割規範を自分との関係で捉えていないのではないかということである。つまり，男女の関係は社会における関係であるとの認識が女性男性ともに希薄になっているのではないだろうか。そのような状態からは，女性差別の現実を直視することもできないだろう。

社会において，女性として男性として生きていく限り（たとえトランスジェンダーであったとしても），男女の関係をいかに築いていくかということと，無関係でいられる人などいない。社会の仕組みを構造化しているジャンダーの問題は，関大生一人ひとりの問題であるはずだ。

４－４　大学教育の実態
――教育の目的と手段――

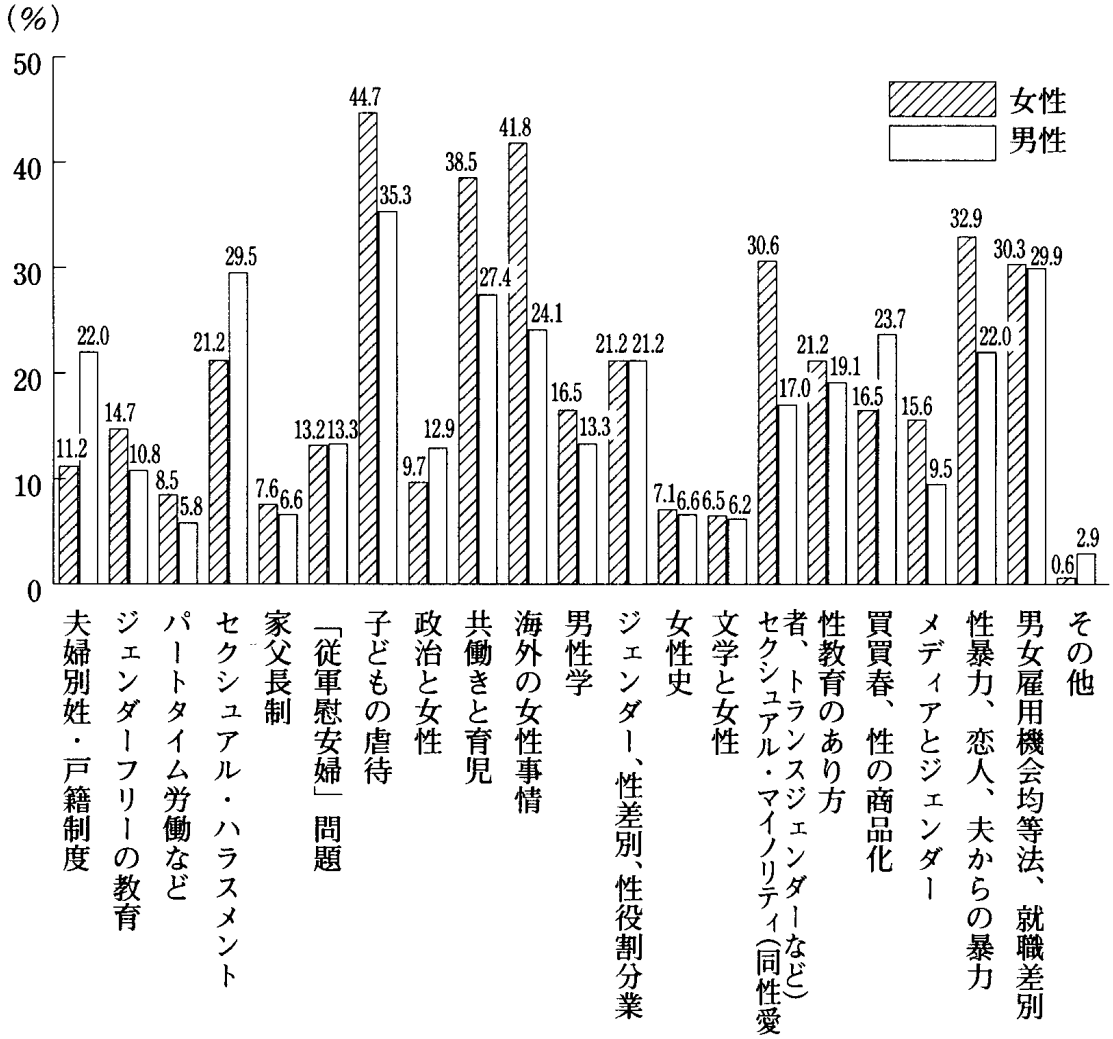
４－４－１　関西大学で学びたいテーマ

1999年，「男女共同参画社会基本法」が制定されて以来，行政機関をはじめ学校でジェンダーフリーという用語が飛び交っている。そうしたなかでジェンダーの視点を採り入れた教育は新しい世紀を迎えて加速している。ジェンダーという概念で新たに導入されたように思われているが，ことばを代えていえば，それは女性学と大差ない。問20の「あなたは，関西大学で女性学の視点を入れたテーマとして，次のうちどんなものを学びたいですか」という設問は，女性学への関心度を計る設問である。

20. あなたは，関西大学で女性学の視点を入れたテーマとして，次のうちどんなものを学びたいですか。（○は５つまで）

1．夫婦別姓・戸籍制度
2．ジェンダーフリーの教育
3．パートタイム労働など
4．セクシュアル・ハラスメント
5．家父長制
6．「従軍慰安婦」問題
7．子どもの虐待
8．政治と女性
9．共働きと育児
10．海外の女性事情
11．男性学
12．ジェンダー，性差別，性役割分業
13．女性史
14．文学と女性
15．セクシュアル・マイノリティ（同性愛者，トランスジェンダーなど）
16．性教育のあり方
17．買売春，性の商品化
18．メディアとジェンダー
19．性暴力，恋人・夫からの暴力
20．男女雇用機会均等法，就職差別
21．その他（　　）

表４－４－１　学びたいテーマ



男女ともに学生には必ずしも身近な問題とは思えない「子どもの虐待」に高い関心が寄せられている。男女間での違いは，女性が「海外の女性事情」や「共働きと育児」に関心を示すのに対し，男性は「セクシュアル・ハラスメント」「男女雇用機会均等法，就職差別」に関心を示している。いずれも現実的な関心であろう。また，こうした回答から大学がこれらの情報を十分に提供できているかが問われてくる。

４－４－２　男女関係や性差別問題に関する学習機会

1980年代，フェミニズムの台頭によって大学にも女性学の講座が開設さ

れ始めた。また行政機関でも市民講座などのなかに女性学講座の開講が始まった。大学でのその講座名はさまざまで女性学という名称のところや，女性問題，女性論などという名称も使用された。関西大学の総合コースに女性学が開講されたのは1986年だった。

関西大学で女性学に関係する学習の機会をどのように得られているかを問うたのが問21の「あなたは大学入学後，男女関係や性差別問題に関する学習の機会を得たことがありますか。あればそのすべてに○をつけてください」である。

21. あなたは大学入学後，男女関係や性差別問題に関する学習の機会を得たことがありますか。あればそのすべてに○をつけてください。

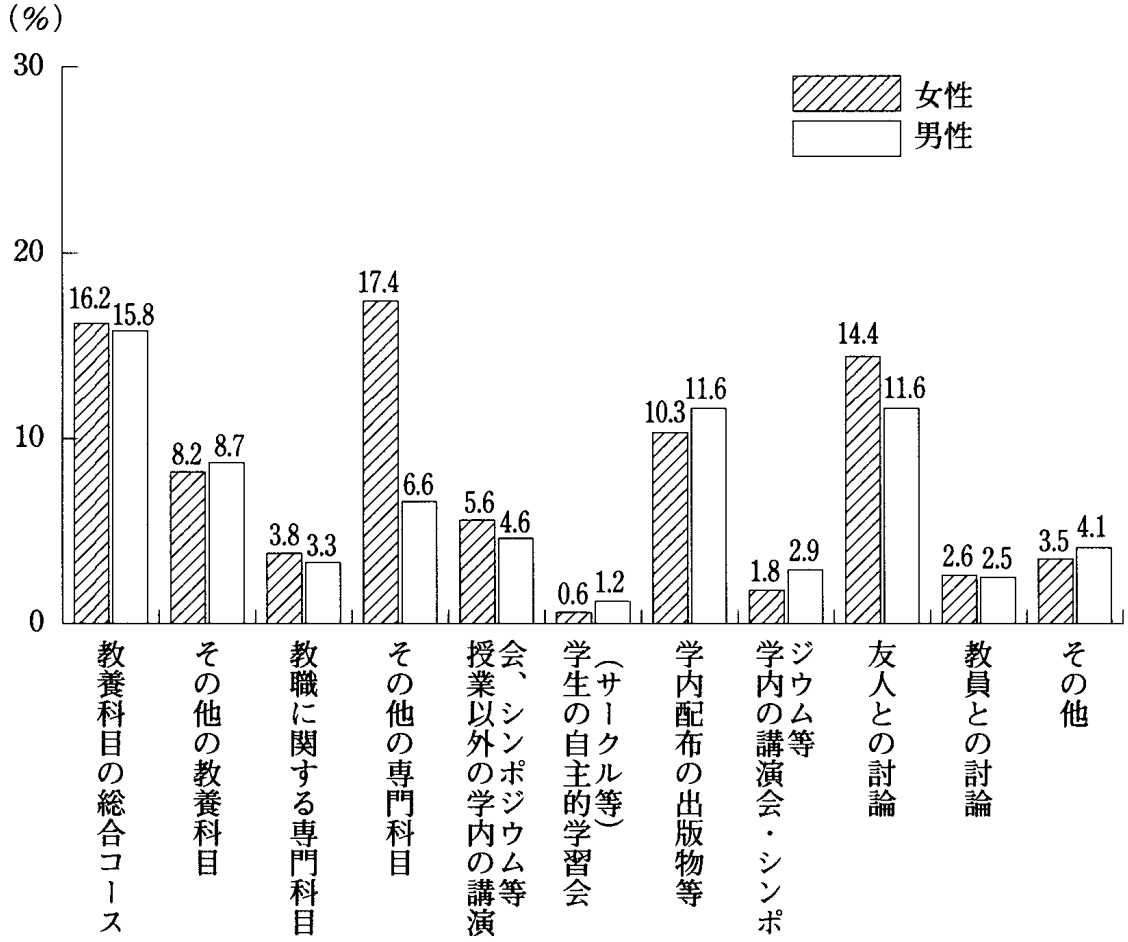
1．教養科目の総合コース
2．その他の教養科目
3．教職に関する専門科目
4．その他の専門科目
5．授業以外の学内の講習会
6．学生の自主的学習会
7．学内配布の出版物等
8．学外の講演会・シンポジウム
9．友人との討論
10．教員との討論
11．その他（　　）

図４－４－２で目立つのは無回答である。女性・１年次生　53.3%，女性・３年次生　31.4%，男性・１年次生　54.5%，男性・３年次生　43.2%という無回答率は，男女共同参画社会への歩みを進めている時代社会の推移と比較するとき物足りなさを禁じ得ない。無回答のなかでは女性・３年次生が最も低かった。その理由は，より男女関係や性差別問題への関心が高まる年齢，生活に直面しているからであろうか。ちなみに女性・３年次生が「学習の機会を得た」として挙げたのは，「その他の専門科目」29.1%，「友人との討論」18.9%，「教養科目の総合コース」15.4%，「学内配布の出版物等」13.1%，「その他の教養科目」9.7%，「授業以外の学内の講演会，

シンポジウム等」7.4%の順位である。

また，全体の男女比をみていくと，女性は「その他の専門科目」がもっとも多く，次が「教養科目の総合コース」である。男性は「教養科目の総合コース」がもっとも多い。そうしたなかで共通しているのは，両者とも「友人との討論」で，大学生にとって大切な場と考えられている。より問題を提起できる授業が望まれるところである。

図４－４－２　男女関係や性差別問題に関する学習の機会



学部別にみると表４－４－１のようになる。

表４－４－１　学部別にみた男女関係や性差別問題に関する学習の機会

（人，％）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無回答
法学部	18	8	1	16	3	－	2	2	10	－	3	32
文学部	27	9	9	11	4	1	14	2	16	2	4	54
経済学部	13	5	1	4	2	2	10	2	7	2	4	27
商学部	8	1	3	1	5	1	5	3	10	3	1	45
社会学部	19	15	3	40	7	1	15	2	18	5	4	31
総情	4	4	2	3	9	－	10	1	8	3	4	17
工学部	4	7	2	－	－	－	7	1	8	－	2	55
法学部	22.0	9.8	1.2	19.5	3.7	－	2.4	2.4	12.2	－	3.7	39.0
文学部	22.0	7.3	7.3	8.9	3.3	0.8	11.4	1.6	13.0	1.6	3.3	43.9
経済学部	20.6	7.9	1.6	6.3	3.2	3.2	15.9	3.2	11.1	3.2	6.3	42.9
商学部	11.1	1.4	4.2	1.4	6.9	1.4	6.9	4.2	13.9	4.2	1.4	62.5
社会学部	17.4	13.8	2.8	36.7	6.4	0.9	13.8	1.8	16.5	4.6	3.7	28.4
総情	8.0	8.0	4.0	6.0	18.0	－	20.0	2.0	16.0	6.0	8.0	34.0
工学部	4.9	8.5	2.4	－	－	－	8.5	1.2	9.8	－	2.4	67.1

法学部，文学部，経済学部は，それぞれ「教養科目の総合コース」(1)がトップであり，社会学部は「その他の専門科目」(4)となっている。学部の性格とも重なった結果といえよう。商学部と工学部は「友人との討論」(9)が多い。総合情報学部は「学内配布の出版物等」(7)である。全体としては，「友人との討論」が高い。また，大学には，「教養科目の総合コース」「その他の専門科目」「学内配布の出版物等」などで情報提供をする役割があることを示している。

４－４－３　男女の望ましい関係をもてる社会のために

４－４－３(1)　大学が努力すべきこと

社会には，女性差別が歴然として存在する。フェミニズムの台頭により，その改善の兆しもみえ，「男女雇用機会均等法」や「男女共同参画社会基本法」などによって男女間の格差やジェンダーによる差別を解消する方向に

あることは確実であるが，現状は女性差別の解消にまだほど遠い。男女が望ましい関係をもてる社会を生み出すために大学でどのような改善や努力が必要かを問うたのが問22である。

22. 男女が望ましい関係を持てる社会にしていくために，関西大学はどのような改善や努力をすべきだと思いますか。あてはまるものに○をいくつでもつけてください。またそのうちで一番重要だと思うことの番号を選んでください。

1．関連する授業を増やす
2．関連する講演会，シンポジウムなどを多くする
3．学内で配布される出版物等に関連する記事や論文を多く掲載する
4．教員の意識を改善する
5．事務職員の意識を改善する
6．学生の意識を改善する
7．学生の自主活動を活発にする
8．女性教員を増やす
9．女子学生の比率を高める
10．セクシュアル・ハラスメント防止の取り組みに力を入れる
11．その他（　　）

一番重要だと思うことの番号 □

回答率は以下の順位になった。

①関連する授業を増やす	50.4%
②学生の意識を改善する	45.6%
③教員の意識を改善する	39.6%
④セクシュアル・ハラスメント防止の取り組みに力を入れる	

26.9%

⑤事務職員の意識を改善する　23.4%

⑥関連する講演会，シンポジウムを多くする　20.8%

⑦女性教員をふやす　20.0%

⑧学生の自主活動を活発にする　18.6%

⑨学内で配布される出版物等に関連する記事や論文を多く掲載する　13.6%

⑩女子学生の比率を高める　10.2%

⑪その他　2.6%

⑫無回答　2.1%

この回答に関しては男女ともに大きな差異はない。この結果のなかでとくに問題を指摘できるとすれば，３位に挙げられている「教員の意識を改善する」であろう。これは最後に設けられた自由記述とも関連し，厳しい意見が学生から指摘されている。教員の何気ない「ことば」によって女性や２部学生が傷ついている。それはまた直接の被害を受けていない男性も感じている。回答から女性問題に限らない人権意識の欠けている教員の存在を指摘できるだろう。教員の意識改善の対策は大学にとって大きな課題である。

「セクシュアル・ハラスメント防止の取り組みに力を入れる」は，関西大学ではすでに取り組まれている。しかし，回答からは，学生にその情報が十分に届いていないことを物語っている。近年，セクシュアル・ハラスメントを悪利用する事件がおこっている。男性が被害者になる事件である。こうした事件は許せない。しかし，セクシュアル・ハラスメントの90パーセントは男性が加害者である。こうした事件が起こる理由は，女性が被害者になるセクシュアル・ハラスメントの現実の裏返しである。セクシュアル・ハラスメントの被害にあう女性の心理もまだまだ理解されない状況にあるなかで，大学もその温床の場のひとつである。学生や職員には未だ声をあげにくい環境にある。大学として今後も引き続いて積極的な取り組み

が望まれる。

４－４－３(2)　一番重要なこと

問22のうち一番重要なこととして挙げたのは次の結果となった。

①関連する授業を増やす　28.8%

②学生の意識を改善する　20.7%

③教員の意識を改善する　10.7%

④関連する講演会，シンポジウムを多くする　7.6%

⑤学生の自主活動を活発にする　7.4%

⑥セクシュアル・ハラスメント防止の取り組みに力を入れる　6.7%

⑦女性教員をふやす　5.3%

⑧学内で配布される出版物等に関連する記事や論文を多く掲載する　3.4%

⑨女子学生の比率を高める　3.3%

⑩無回答　2.9%

⑪その他　1.7%

⑫事務職員の意識を改善する　1.5%

回答のなか，上位３位は，前回（1993年度版）のアンケートと同じ結果である。「学生の意識を改善する」には，「関連する授業を増やす」ことによって可能性を見出すことができる。しかし，現実はこうしたアンケートの結果が活かされているとは言い難い。関連する授業のひとつである「教養科目の総合コース(女性学)」が2003年度は開講されていないからである。

教養科目の総合コースが開講されなかった原因は学生にあるのではない。大学の事情である。学生は授業を要望する権利がある。後輩，大学，そして社会をよくするために学生自身が授業の再開を要望していくことも大切であろう。

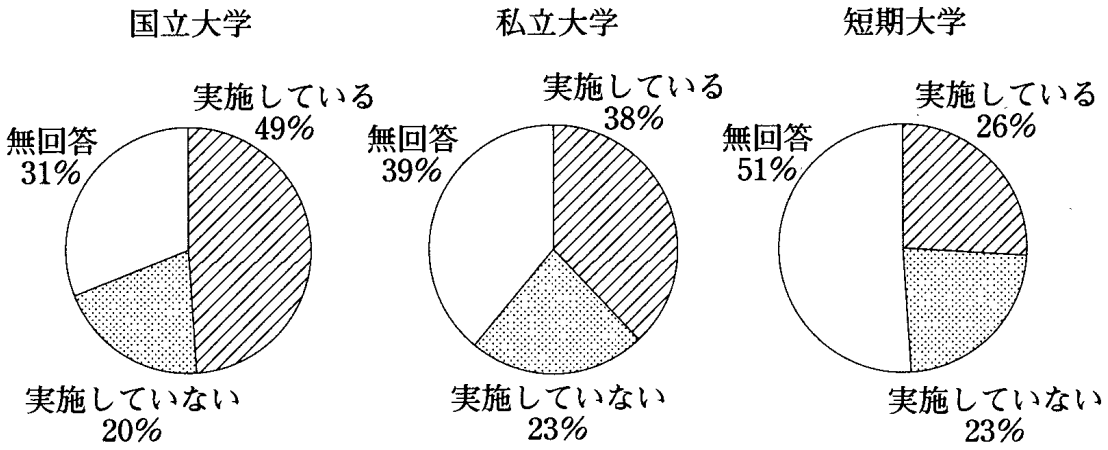
全国の大学短大で女性学の関連講座が開講されているのは396校である。その内訳は，参照図表４－４－１の通りである（2002年「女性情報」６月

号～９月号による)。アンケート処理について，アンケート用紙を送った教務課から担当教官に転送されたりしていて，各大学によってまちまちであり，完璧なデータとはいえないことが断ってあるが，現在の大学の状況を概観できるだろう。ちなみに1993年度のアンケートが実施された報告書によると，1990年のデータで251校である（関西大学人権問題研究室女性問題研究班『大学教育と女性』1994，90ページ)。女性学関連講座はデータの上でも確実に増えている。

参照図表４－４－１　女性学関連講座実施状況（2002年度）

	全学校数	女性学講座を実施している大学	総講座数
国公立大学	161	79(75)	380(313)
私立大学	460	175(139)	697(489)
短期大学	544	142(123)	284(254)
計	1,165	396(337)	1,361(1,056)

※　(　)内の数字は2001年度



４－４－４　高校時代の教育と今後の課題

回答から，学生が女性学（ジェンダー）の視点が重要なことを認識している。もとより，そうした教育は大学に限らない。むしろそれは家庭から始まり保育園，幼稚園，小学校，中学校，高校や地域や社会とそれぞれのなかで順次学んでいく必要がある。問19では高校時代に受けた関連の授業

内容（教育）を聞いている。それぞれの結果は表４－４－２～４の通りである。

表４－４－２　避妊の方法について，詳しく教えてもらった

女性

NO.項目	は　い	いいえ	おぼえていない	無回答
１年次生	120	28	17	－
３年次生	91	52	31	1
１年次生	72.7	17.0	10.3	－
３年次生	52.0	29.7	17.7	0.6
TOTAL	211	80	48	1
(%)	62.1	23.5	14.1	0.3

男性

NO.項目	は　い	いいえ	おぼえていない	無回答
１年次生	80	25	16	2
３年次生	52	41	23	2
１年次生	65.0	20.3	13.0	1.6
３年次生	44.1	34.7	19.5	1.7
TOTAL	132	66	39	4
(%)	54.8	27.4	16.2	1.7

表４－４－３　妊娠の仕組みについて，詳しく教えてもらった

女性

NO.項目	は　い	いいえ	おぼえていない	無回答
１年次生	150	12	3	－
３年次生	158	13	4	－
１年次生	90.9	7.3	1.8	－
３年次生	90.3	7.4	2.3	－
TOTAL	308	25	7	－
(%)	90.6	7.4	2.1	0.0

男性

NO.項目	は　い	いいえ	おぼえていない	無回答
１年次生	87	21	14	1
３年次生	65	24	27	2
１年次生	70.7	17.1	11.4	0.8
３年次生	55.1	20.3	22.9	1.7
TOTAL	152	45	41	3
(%)	63.1	18.7	17.0	1.2

表４－４－４　裁縫，料理について，実習で教えてもらった

女性

NO.項目	は　い	いいえ	おぼえていない	無回答
１年次生	132	18	14	－
３年次生	119	29	27	－
１年次生	80.0	10.9	8.5	－
３年次生	68.0	16.6	15.4	－
TOTAL	251	47	41	－
(%)	73.8	13.8	12.1	0.0

男性

NO.項目	は　い	いいえ	おぼえていない	無回答
１年次生	95	18	8	2
３年次生	81	21	15	1
１年次生	77.2	14.6	6.5	1.6
３年次生	68.6	17.8	12.7	0.8
TOTAL	176	39	23	3
(%)	73.0	16.2	9.5	1.2

いずれの項目も女性の方が高く，男性が低い。そのなかで「避妊の方法について，詳しく教えてもらった」については，女性62.1%，男性54.8%である。しかし，教えてもらったが，身についた教育であったとはいえない現実がある。例えば，経口避妊薬ピルの入手方法や飲み方を具体的に答えることができる学生はほとんどいない。ピルを見たこともないという学生も大勢いる。望まない妊娠，できちゃった妊娠が多い日本の状況は，こうした教育の実態と決して無関係ではあるまい。

また，「裁縫，料理について，実習で教えてもらった」結果は，男女ともに高いポイントを示しているが，今だ「性別役割分業」が強固な日本の状況を変えていくには女性学の視点をもった教え方がより必要である。

まとめ

社会的文化的性差であるジェンダーにとらわれた意識の問い直しが始まっている。大学の取り組みは1980年代に始まった。それは地域の女性センターや公民館などで開講される女性学に関連する講座と軌を一にしていた。関西大学も同様だった。その最初に開講された（1986年）教養科目総合コースの女性学に参画したが，専任の男性教員と非常勤の女性教員との協同作業で始まった。あれから15年以上の歳月が流れ，ジェンダーの視点

をもつ教育の必要性が謳われる時代になった。人権の視点に立てば，当然の流れであると思うが，ジェンダーが提起している女性問題が解決するにはまだまだほど遠い現実がある。時代社会のさまざまな関係，構造について90年代になって明るみに出てきた女性への暴力（セクシュアル・ハラスメント，ドメスティック・バイオレンスなど）やセクシュアル・マイノリティの問題でも，女性への暴力が犯罪であるという認識には至っていないし，セクシュアル・マイノリティの人の存在がそのまま認められていないのが現実である。女性学の関連講座で学ぶことがいかに重要であるかを痛感する。

筆者（源）は2001・2002年度の総合コースの担当者のひとりだった。その経験からいうと，学生のなかには「自分の問題」として問われる授業との出会いを嫌う学生もいる。しかし，多くの学生は積極的に授業を受けていた。学年末になると次のコースがどこで用意されているかと訊ねてくる学生も多かった。友人に聞かせたいという学生もいた。とはいえ，総合コースだけですべての問題を学ぶことができるとは思わない。教養科目，専門科目などのなかでもその必要性を感じる。

女性学の関連授業は，人権の立場から考えても避けることのできない授業であり，時代社会の動向である。大学教育のなかでより先進的に女性学関連講座を開講していく意味は限りなく大きいといえる。

しかし一方で，バックラッシュの動きがあることも事実である。男女共同参画社会をめざさないこれまでの性別役割分業に則った社会を肯定する動きである。こうした考え方の根底には，意識化するかしないかにかかわらず女性差別思想が顕著であり，男性中心社会をそのまま認め，女性を家庭における役割に当てはめ，男性を男性役割に固定化する。こうした男女共同参画社会に逆行するバックラッシュを女性学は望んでいない。ジェンダーの視点で見直す場である「女性学」講座の今後の動向が注目される所以である。関西大学がどのような理想とそのための方向をめざす大学となるかが問われるほどの問題を，このアンケートは示しているといえよう。

４－５　大学教育の今後
―― 記述式回答の分析 ――

４－５－１　はじめに

今回の調査では，質問項目の最後に「男女が望ましい関係を持てる社会にするために，今後大学は教育内容にどのような改革が必要だと思いますか」という記述式の回答を求める質問を設けた。これに何らかの記入があったものは，「今のままでよい」「とくになし」「わからない」という回答を含め，女性では１年次生94票，３年次生115票，男性では１年次生67票，３年次生68票で，有効回収数に占める割合は，女性・１年次生57.0%，３年次生65.7%，男性・１年次生54.5%，３年次生57.6%であった。１年次生と３年次生を合わせると，女性61.5%，男性56.0%と，記入のあったのは女性のほうに多く，また，男女共通して，１年次生よりも３年次生の記入率がやや高かった。

学生からの回答は，記述内容，記述量ともさまざまであり，大学教育の改革に対する学生からの要望は多岐にわたっている。それゆえ，学生の回答を類型化して分類することは困難であり，いくつかの類型に無理に当てはめようとするなら，学生の「生の声」がもつ意味を変えてしまうことにもなりかねない。また，学生の回答を類型化して分類することは，結局，問22の回答と同様のものとなってしまう。したがって，ここでは具体的な記述内容を紹介していくことにする。

ただ，回答の傾向を把握するために，数多くあがった回答のなかで，その内容が共通しているものがあれば，ひとつのグループにまとめてみることにした。学生からの回答には，大学教育に対する不満や要望などが多数あがったが，ひとりの学生が数点にわたって不満，要望等を記入しているケースも少なくない。その場合，それぞれを別個にグループ分けしたので，グループごとの回答数は，重複してカウントしている。

今回の記述式回答は，その内容からつぎのように大別できる。①授業へ

の要望，②大学への要望，③教員への要望，④要望なし，これらの４点である。

以下，この４点について，記述式回答の内容をみていくことにする。

４－５－２　授業への要望

授業への要望のなかで，グループ分けできた（共通する点が２つ以上の回答で見いだせた）ものを示すと，表４－５－１のようである。

表４－５－１　授業への要望

	女　性	男　性
討論・議論のできる小人数クラスの授業を	23	12
学生の意識を変える授業を	15	10
現状や身近な問題を詳しく扱ってほしい	7	7
学生が関心をもつような授業を	4	0
男女が交流したり，協力して行う授業を	4	2
差別を受けた女性や運動家を招いた授業を	3	1
男女にこだわらず，人間の問題を	3	1
男性学も扱ってほしい	3	0
一般の授業のなかでも女性問題を扱う	3	4
女性に実力をつけさせる授業を	2	2
押しつけがましい講義や偏った講義をやめる	2	1
料理や保育の実習をとくに男子学生に	1	1
女子学生の意識を変える授業を	0	3
女性差別を強調しすぎるのは逆効果	0	4
男女は本質的に違うことを踏まえた授業を	0	4
その他	5	1

これによると，男女ともにもっとも多くあがったのは，女性問題について受講生間で討論・議論ができる小人数クラスの授業をしてほしいという要望である。「講義のなかで社会のなかの性差別を明らかにし，それについて少人数（10人ぐらい）で学生が話し合う機会を作るべきだと思う」（男性），「男女ともに相手の気持ちをよりよく理解し合えるように，ゼミのよ

うな少人数でディベートなどを行う」（女性），「ある科目で学生同士でセクシュアル・ハラスメントについて話したことがあります。このときはすごく真面目に話し合いをしました。このような機会は重要だと思います」（女性）など，こうした要望は女性で23票，男性で12票あがった。

女性問題に関する講義に限らず，教員が多人数の学生に向かって講義を行うという，いわゆる「一方通行」の授業形態に対する不満は，学生に根強くある。学生自らが自己のジェンダー観やジェンダー意識を認識するとともに，他の学生との見方・意識の違いに気づき，自己を変革していくためにも，女性問題（それは同時に男性問題でもある）に関して討論できる授業形態を提供することは重要である。小人数クラスの実現が早期にむずかしいとしても，授業のなかで受講生に質問や感想を書かせるコミュニケーションカードの活用など，教員が工夫することは多くあると考えられる。一方，ゼミなどの小人数クラスでは，発言する学生が一部に限られ，多くの学生は黙ったままという現状もある。学生が自分の意見を的確にまとめ，議論しあえるスキルを身につけるトレーニングをカリキュラムに入れていくことも，同時に重要である。

ついで多くあがったのが，学生の意識を変える授業をしてほしいという要望である。「男女のあいだに差別があるのは，それぞれの意識が大きく関わっていると思うので，そのような意識を変える試みを大学教育を通じてできればよいのではないかと思います」（女性），「男女が望ましい関係を持てる社会にしていくためには，やはりそれぞれの性の“尊さ”を感じられるような授業を行ってほしい。“互いに相手を尊重”という意識があれば，暴力，セクハラもなくなるのではないかと感じる」（女性），「関連する授業を増やして，学生の意識を改善する」（男性）などで，学生の意識を変えることが男女が望ましい関係を持てる社会にするために必要であると考える学生が多いのである。ただ，「学生の意識を変える授業を」という要望は，これだけに限らず，前述の「討論・議論のできる小人数クラスの授業を」という要望も，学生の意識を変える授業形態に関するものであり，表４－

５－１にあげた多様な要望の多くは，学生の意識を変える重要性を踏まえたものといってよいだろう。

女性問題の現状や身近な問題を詳しく扱ってほしいという声は，「女性の就職差別や賃金格差などに関する情報をもっと伝えてほしい」（女性），「女性の社会での活躍について，講義とかしてもらうのがよい」（男性）などがあがった。抽象的な議論ではなく，現実の社会で何が起こり，どのような問題を女性・男性が抱えているのか，具体的に教えてほしいという声である。これは男女同数あがった。

「学生が関心をもつような授業を」という声は，「いくら大学側が教育内容を改善したところで，学生が自分から興味をもって学ぼうという意欲がなければ，どんなにすばらしい授業であっても，何も意味がない。学生が学びたいと思う内容にすべきだ」（女性），「『人権問題』と聞くと，距離を置いてしまう学生が多いと思う。大事な問題だと分かっているけれど，どこか考えるのが邪魔くさかったりするのではないだろうか。まずは，そのような無関心である人や，ひとごとのように考える人が興味を持つような講義をしていただきたい」（女性）などで，学生が自ら学ぼうとする意欲をもてる授業を望む声は，「討論・議論のできる小人数クラスの授業を」「学生の意識を変える授業を」「現状や身近な問題を詳しく扱ってほしい」といった要望と深く関連するものであり，今後の大学教育の課題を示しているといえよう。

「男女が交流したり，協力して行う授業を」としてグループ分けできた記述は，「レポート提出の際，個人的にレポートを提出するのではなく，男女混合のグループで１つのレポートを提出させる。こうすれば，男女の関係はほぼ平等になり，１つの目標に向かい，協力的になれるのではないか」（女性）といったもので，男女が共同で課題に取り組んだり，少人数のグループで男女が議論する重要性が書かれていた。

このように，大学における教育内容の改革については，さまざまな要望があった一方で，女性問題に関する講義に対して，批判的な声もあがった。

それは，たとえば「おしつけがましい講義や偏った講義をやめる」というもので，「以前，女性の社会差別を扱った授業を取りましたが，同じ女性の立場から見ても，それはあまりにも偏っているのではないか？と思うことが多々ありました。そこまで何でもかんでも差別，女性蔑視と思わなくてもいいのでは？」（女性）というものや，「女性差別を強調しすぎるのは逆効果」として，「女性学のような授業を増やしても，逆に男性が違和感を感じるだけだと思う」（男性）という記述，また，「男女は本質的に違うことを踏まえた授業を」として，「社会上の平等の理念を説くなら，それと同時に逆らいようもない自然上の差異，それに起因し，生物誕生以来，連綿と受け継がれてきた地球上のシステムについても講座を設けるべき。そのような前提を踏まえないジェンダー論など，結局は机上の空論に終わってしまうと思います」（男性）といった内容である。

ここでは実際に女性問題に関する講義を受講した学生からの批判があるものの，これらのグループの意見の多くは，女性学関連科目を受講しての感想というより，一部のフェミニストの，男性を一方的に責めたり，女性はこうあるべきだという，女性に特定の生き方を押しつけるような抑圧的な主張などから，女性学関連科目を一面的にステレオタイプ化した見方にもとづいたものと思われる。また，「男女は本質的に違う」という主張のように，性差を宿命的なものとみなす考えもみられる。そして，こうしたグループに分類された記述11票のうち，９つが男性からのものとなっているのも興味深い。

「女性に実力をつけさせる授業を」という要望には，「私たちよりも世代が上の人たちは，さらに差別意識が強いです。そのなかに入って仕事をしていく上で，差別意識に勝てる強さを育てる」（女性），「女子も体を鍛える。強くなる。口だけでは駄目だ。プロレスラーになれとは言わないが，男を殴れるぐらいになれ」（男性）などがあがったが，この女性と男性の記述は，きわめて対照的である。女性の記述は男性中心社会のなかで差別に負けない強さを求めているのに対し，男性のそれは，女性は体力的に男性

より劣っているのであり，口だけで主張しても，「力」の面で劣っている女性は，男性には勝てないという決め付けのように感じられる。

「その他」としては，「(女性学の授業は) 女性をメインに考えたものが多いので，男性の考え方も知ったほうがよい。男性の考え方を知れば，女性の被害妄想的考えも変わると思う」(女性)，「女性教員ではなく，男性教員によって，または共同で考える，これからのジェンダーについての授業は，男女どちらかからの意見も出せて，学生も偏った見方をせず，素直に聞けると思う」(女性) などの記述があがった。

４－５－３　大学への要望

表４－５－２は，大学への要望としてあがった記述をグループ分けしたものである。

これによると，「女性問題に関する講義を増やす」が男女とももっとも多くあがった。「ジェンダーフリーの教育に力を注ぐことが重要だと思います。やはり今までの固定観念により，男は考あるべき，女は考あるべきと考えてしまう傾向が強いですが，その間違った考え方を改める教育がなされればよいと思います」(女性)，「私は『差別と社会』という授業を受けて，女性であることについてすごく考えさせられた。普段気にもとめていないことが，よく考えてみれば，女性差別であったり...。私たち大学生は，まだ社会に出ていないので，さほど女性差別を受けているように感じないが，卒業して社会に出ると，目の当たりにするであろう。そのためには我々の意識を改善していくことが改革の一歩となるのではないだろうか。すべての学部で『差別と社会』のような講義を専門にして，学生に呼びかけるなどしてはどうだろうか」(女性)，「女性学についての講義を増やしてほしいです。講演会やシンポジウムを開催するのも結構と思いますが，１年次で必修の基礎研究でも１度は女性学を取り上げるなど，大学在学中に１度は女性学にふれる機会を設けてほしいと思います」(女性)，「総合コースの女性学を履修したことがあるのですが，その講義はとても私にとって興

表４－５－２　大学への要望

	女　性	男　性
女性問題に関する講義を増す	65	24
女性問題に関する講義を必修にする	18	11
講演会やシンポジウムを行う	8	15
女性教員を増やす	6	3
セクシュアル・ハラスメントの防止に力を入れる	5	4
担当教員の質を高める。女性学担当の専任教員を	4	2
女子学生の就職問題に取り組む	4	1
性教育の開講を	3	0
総合コースを２～４限に	2	0
大学が男女共生に取り組む姿勢を学外に公表する	2	0
事務職員の意識変革	1	2
女子学生を増やす	0	4
出版物・配布物の充実	0	3
その他	4	3

味深いものでした。その中で女性らしさとは何かというテーマがあったのですが，その女性らしさに対して，多くの女性が悩んでいるように思いました。私もその中の１人だったのですが，その講義によって少し気が楽になりました。今後，ジェンダー関連の講義などの学習の場を増設すべきだと思います」（女性），「もっと男女関係や性差別問題に関する授業を教養科目の中に増やす。こんなことはあまり言いたくないが，単位がかかってくると，学生も本気で考えると思う。だから『男女関係コース』みたいなものを作って，そこから単位を取らないと卒業できないという仕組にすれば，全員が１回は考えなければならなくなるので，意識も高まるはず」（男性）。

そして，「女性問題に関する講義を必修にする」という要望としては，「女性学の本多利子先生の授業，大スキです。ああいう授業は大切だと思います。必修にすべき！！」（女性），「私は総合コースの『ジェンダー論』を受講したのですが，大変その内容は良かったです。しかし，総合コース

ということで，その内容に反して受講生が少なかったように感じました。これから就職して社会に出ていくうえで，『ジェンダー論』などの授業は大変役立つと思いますし，生き方を考える良い機会にもなると思います。ぜひ，私は必修として扱ってほしいと考えます」（女性），「大学生活においては，女性差別はまったくないと思う。しかし，社会に目を向けると，年上の人に限らず，同世代の人間も性犯罪などを犯しているし，女性の社会的地位は安定したものとは言えないと思う。やはり選択科目よりも必修科目として，『女性』についての講義を行い，一人一人が考えていく場（時間）は必要だと思う」（男性）などの記述がみられた。

女性問題に関する講義を増やしたり，それを必修にするという要望は，男女合わせて118あがった。そして，これらのなかには，女性問題に関する講義を受講し，自分自身の意識が変わった，新しい気づきがあったことなどを具体的に記述しているものが目立った。これまで関西大学では，総合コースで女性問題をテーマとした講義を開講してきたが，今年度（2003年度）は開講されていない。各学部での専門科目のなかで女性問題を扱うケースもあるとはいえ，女性問題をテーマとした講義が常時開講されている体制となっていないことは，大きな問題といえる。こうした関西大学の現状に対して，女性問題に関する講義の新設・増設を望む声が学生から多くあがったのではないだろうか。

「講演会，シンポジウムを行う」という記述は，女性８票，男性15票あがったが，講演会・シンポジウムの開催の必要性について，具体的に書かれていたものは少なく，「このような問題の意識というのは，幼いころからの家庭環境や学校生活の中で育まれ，定着していくものだと思う。大学生になると，これらの様々な問題を子どもの視点と大人の視点との両方からみることができるようになる。なるべくなら，単位が与えられるような授業ではなく，もっと自発的に参加するような講演会等での教育がよいのではないかと思う」という男性の記述程度であった。

「女性教員を増やす」という要望については，「女性の教員を増やして行

くべきだと考えます。そうすれば，学生の意識のなかに教員の平等化意識が強く芽生え，平等という関係を保っていけるのではないでしょうか」（女性），「大学の専任教員は男性が多いように感じます。実際，私の学科は女性の専任教員は２人ほどです。女子学生としては，やはり相談事があれば，女性の先生にしたいものです。なので，教師の人数も男女の比率を考えてほしいです」（女性），「私が今とっている授業のほとんどが男性教授です。なぜ，女性教授が少ないのかに疑問を持ったことがあります。“研究”についてもあるのでしょうが，少なすぎると思いました。大学内にも女性が働きにくい雰囲気があるのでしょうか？　同性として女性教授がおられると，話してみたいと思います」（女性），「女子学生が多い少ないに関係なく，女性教員を増やし，学生が暮らしやすく，またいつでも相談にのってあげられる環境をつくる」（男性）などがあがった。

この数年，関西大学では女性専任教員が採用されるケースが多くなってきている。しかし，専任教員総数に占める女性の割合は，他大学に比べていまだ低く，こうした現状に対して不満や疑問をもつ学生が少なくないのである。

「セクシュアル・ハラスメント防止に力を入れる」という要望としては，「もしセクシャル・ハラスメントを行った教員がいるならば，即刻クビにすること」（女性），「大学のHPにセクハラ対策のコーナーを作って，誰でも知ることが出来るようにしてほしい」（女性），「セクハラに対する処罰を厳しくする」（男性），「セクシュアル・ハラスメント防止の取り組みに力を入れた教育が必要だと思います。例えば，女の人の不安を男性がしっかり理解することなどを強調した授業をしていくとよいのではないかと思われます」（男性）など，男女合わせて９票あがった。

「担当教員の質を高める。専任教員を」という声としては，「女性問題に詳しい教員が大学に入ってくることで，教員・事務職員の意識も改善されると思う」（女性），「専門の知識をもった教員を増やし，このような講義を増やす。教員も講義自体も不足していると思う」（男性），「女性学全般につ

いて専門的に講義できる場と，多彩な議論をカバーできる人材もまた必要だと考える」（男性）などで，これらの声は女性問題に関する講義が開設されていない現状を反映したものとみることができる。

性教育の必要性についての記述は，女性から３票あがったが，「保健体育の授業の中で，互いの性の体のつくりや仕組みを詳しく学べるような機会・環境を作り，学生１人１人の性に関する知識の向上，意識改革を図るべきだと思う」（女性），「男女差別に対して，またいろいろな性に関する問題について詳しく，わかりやすく教える教育内容であるべきだと思う。うわべだけでなく，真剣に取り組む必要があると思う。性に関する知識が少なく，また，歪んだ知識が氾濫している現状は，とても恐ろしいことだと考えます」（女性）というもので，性に関する科学的な知識・情報を求める声であった。

「その他」としては，「関大は学生の数は非常に多いが，学科・サークル以外はあまり知り合う機会がないように思う。大学は人間関係を学ぶ場として，もっと学部間で交流会などを開いてみてはどうか」（女性），「教員を含めた全構成員意識調査の試み。そこから授業内容の検討」（女性）などがあがった。

４－５－４　教員への要望

表４－５－３は教員への要望についての記述をグループ分けしたものである。

表４－５－３　教員への要望

	女　性	男　性
教員自身が意識を変える	20	11
女子学生に甘い教員が多い	1	3
その他	0	2

これによると，教員の意識改革を望む声が多くあがった。たとえば，「ま

ず，教員の意識を調査し，その上で男女平等な社会の大切さ，いまの社会の男女不平等さ，どのように改善していくべきかを教員同士で話し合ったり，あるいは知識のある人が講演したり，教えたりして，教員の意識を男女が望ましい関係を持てる社会にすべきだというふうにもっていくことが大切だと思う。そうしたら，その教員を通じて授業などから学生が男女平等について学ぶ機会が自然と持てると思う（関係のない授業でも教員は自分の意見や考えを授業の中で言うから）」（女性），「第一に教員の意識改革が必要だと思います。教育する側にジェンダーに関する偏った考えがあるなら，何をしようとしても効果はありません」（女性），「ジェンダーに関する授業を持っていない教員の方々は，ほとんどがこういった問題に対して我関せずの姿勢でおられるのではないかと思います。教員は大学機関の顔ともいえる存在なので，自己意識を高めるよう，大学側からの働きかけが必要なのではないかと思います」（女性），「学生ばかり指導するのではなく，教員に対する教育も必要だと思う。最近と昔では男女の差も変わってきているだろうから，もう一度，学ぶ必要があるのではないでしょうか」（女性），「学校としての場では，手本となるべき人たち，教員の意識改革で自ずと変わっていくと思う」（男性）などといった記述である。

こうした声は男女合わせて31票あり，講義を受けている学生が講義のなかでの教員の発言に疑問をもつことが少なくないのであろう。関西大学では，毎年開催されている人権啓発行事や，学生に配付する人権啓発冊子の発行など，学生を対象とした啓発に取り組んでいるが，教員に対する啓発はほとんどないといってよい。また，男性が圧倒的に多い専任教員のあいだでの女性問題に対する関心も，けっして高いとは思われない。関西大学セクシュアル・ハラスメント防止委員会が主催し，学外から専門家を招いて開催した，教職員対象の研修会（本年１月に開催）にしても，全学の専任教員に参加を呼びかけたにもかかわらず，研修会に参加した専任教員はひと桁にすぎなかったことは，教員の啓発のむずかしさを物語るものといえる。

また，「女子学生に甘い教員が多い」という不満も，「たまに教授が女だけに甘いということを聞く。私たち女にとっては都合のいいことだが，あからさますぎるのはよくないと思う」（女性），「私は大学内で男性教授の授業をいくつも受けているが，その中に男子学生には厳しく，女子学生には甘くしている教授がいる。やはり大学内で教員がまずそのような意識を変えていくことが必要」（男性），「男女平等に成績を評価するように教員の意識を改善する（男性教員は女性に甘く評価をつけるのが現状）」（男性）など，男女合わせて４票あがった。

「その他」は，「教授と学生がもっと信頼できる関係を築いて行くべきだと思う。そのなかで，こういう授業があれば，しっかり心に響くと思う」（男性），「教員が手本を示すこと」（男性）の２票であった。

４－５－５　要望なし

回答欄に「改革の必要はない」「よくわからない」などの記述があったのは，女性12票，男性20票で，その内訳は，「改革の必要はない」女性10票，男性17票，「よくわからない」男性３票，「なんともいえない」「とくにない」ともに女性１票ずつであった。

「改革の必要はない」という記述に，その理由が示されているものは，女性５票，男性16票で，女性では「女性の人権が尊重されていないと思ったことがないので」「今の男女関係が望ましくないものであるとは思わないので」「現在の大学内では，男女の違いはあまり感じていません」「何が問題となっているのか，わからない」「大学が学生の意識を改善しようとか，そのようなことにまで手を出さなくてよい」が各１票ずつ，男性では，「差別はない」６票，「大学で改革しても，社会は変わらないから」４票，「男女平等教育は高校までですること」２票，「女性は優遇されており，社会的弱者ではない」「男女平等を意識しすぎ」「望ましい関係をつくるのは不可能」「大学よりも社会全体で取り組む問題」が各１票ずつであった。

このように，差別はないと考える学生が男性に多くみられる。その一方

で，「改革の必要はない」という意見には，個人の考え方は大学入学以前においてすでにできあがっているので，大学で改革を行っても効果はないというように，大学における教育の効果には大きな期待をもっていない学生からのものがいくつかあったが，これらは必ずしも現状を肯定しているわけではない。

ともあれ，女性問題についてさまざまな意見があることは事実であり，女性であっても，現状肯定から現状否定まで，幅広く多様な意見が存在する。前述したように，学生からの授業への要望のなかには，討論・議論できる小人数クラスでの授業を望む声が多くみられた。多様な意見が存在する女性問題について，学生が討論・議論し，自分の言葉で考えをめぐらせる意義は大きいといえる。

４－５－６　まとめ

記述式の回答には多岐にわたる要望，意見などが寄せられ，ここでふれることのできなかったものも数多くある。男女合わせて344票にのぼる回答を概観して感じるのは，全体に女性のほうが記述量が多く，要望や改革案が数点にわたってあげられており，その内容も具体的であったことである。それは女性のほうが現在すごしている大学生活のなかにおいて，さまざまな不都合に直面し，就職をはじめ，将来に対する不安を多くもっていることのあらわれといえよう。そして，そのことは，女性から授業や教員に対する不満が多くあがったことからもうかがわれる。

学生がもつジェンダー意識については，それが大学入学以前に形成されており，大学で教育するのは遅すぎるという声もいくつかあがった。しかし，そのなかには，そうであるからこそ，大学ではジェンダー・フリー教育によりいっそう力を入れるべきであるという記述もみられた。たとえば，「男性・女性という意識や関わり方などについての意識は，少なくとも高校教育までに出来上がってしまうものではないだろうか。改めて大学にお

いてその完成されつつある意識を動かそうとするならば，より教育の中身の濃さ，そして何と言っても徹底さが求められるのではないだろうか。このような男女関係における人権問題についての必修科目はなく，真剣に考える機会を得られないでいるのが現実である。是非ともこの問題について学習する機会を得られればと希望する」（女性），「大学に入るころには，だいぶ自分の考えや価値観が出来ている年齢だと思うし，男と女についての考えも，それまでの教育や環境で，ある程度，決まっていると思う。だから女らしくしなさいと育てられた子は，そういう意識で育つし（反発を覚えなかった子は），性教育をちゃんと受けていない子は，大学ではそんな機会はないから，ずっとちゃんと知らんままと思う。だから大学までの環境がけっこう大切な感じがするけど，大学は関連する授業とかもできると思う」（女性）といったものである。

今回の記述式回答では，さまざまな声があがったが，その多くは大学教育の改革についての真摯な意見であり，具体的な要望であった。これらは，関西大学が教育内容の改革に取り組むにあたって，その方向を示唆する貴重な意見である。

5．調査の総括と関西大学の課題

すでに述べたように，今回の調査では調査票の回収率が女性34.0%，男性24.1%と低く，前回調査と比較して，女性では10ポイント，男性では3ポイントほど，回収率が低下した。こうした低回収率を考えると，今回の調査結果がそのまま関西大学の学生の意識を反映しているとはいいがたい面があると認めざるをえない。なぜなら，10ページからなる調査票に記入し，それを返送した学生は，それをしなかった学生に比べて，女性問題への関心が相対的に高いという傾向があるとみられるからである。したがって，今回の調査結果は，女性問題への関心が高い学生の意識が反映されたものとみるべきかもしれない。

しかし，調査結果からも明らかなように，学生の意識，とりわけ男性の意識が大きく変化したことは，今回の調査結果の特徴といってよい。これは一面では男女平等教育の成果のあらわれとみることができる。それに加えて，マスメディアを通して，女性が抱えるさまざまな問題の解決に取り組む運動や，企業における賃金差別，セクシュアル・ハラスメント，ドメスティック・バイオレンスなどの実態が紹介されることが多くなり，女性問題に関する情報量が格段に増えたことも，学生の意識の変化につながっているだろう。

しかし，こうした学生の意識の変化（とくに，男性の意識の変化）については，つぎのような側面も同時に指摘できる。

現在の社会においては，「女性は差別されて当然」と声高に叫ぶ人など，ほとんど存在しない。建て前としては，大多数の人たちが男女は平等であるべきだと考えており，その意味では，男女平等が「常識」となっている社会であるといえる。今回の調査では，こうした「常識」からの回答が多かったのではないだろうか。すなわち，男女平等教育を通して，頭では男女平等という建て前を理解している学生たちが，その建て前で回答しているケースが含まれていると考えられる。たとえば，建て前としては女性の

社会進出は大いに結構なことであるが，自分に関わる問題となると，話は別であるという学生が少なくないのである。また，設問の内容から，その設問作成者の意図を読みとり，本音での回答を避けた学生もいたであろう（たとえば，問18について)。こうした「建て前回答」が含まれた調査結果をどのように評価していくのかという問題が，これからの課題である。

以上のように考えると，大学教育の課題がみえてくる。

学生の意識において，男女平等が「常識」となっているとすれば，何も知らず，何もわかっていない学生に，男女平等の意味を説明するといった，いわゆる啓蒙的な教育の段階は，すでに終わっており，これから取り組んでいくべきは，建て前と本音の乖離を解消していくことのできる教育であろう。

自由記述には，「女性問題に関連する講義を増やす」についで，「討論・議論できる小人数クラスの授業を」という声が多くあがった。女性が抱える問題は，同時に男性が抱える問題であり，自らが行動を起こし，意識を変えない限り，女性問題の解決はないことを講義で学生に伝える一方で，小人数クラスでの討論を通して，自分と他者との関係の歪みに気づき，その歪みをただすために他者との関係をどのように変えていくのかを考える機会を提供していくことが重要である。

1980年代半ば以降，全国の大学で女性学関連科目の開設が相次ぎ，現在では，短期大学を含め，大半の大学で女性学関連科目が開講されている。たとえば，立命館大学では，「ジェンダーの諸問題」「ジェンダー論」「ジェンダー論Ⅱ」「ジェンダー論特論」「女性政策」「比較ジェンダー論」，同志社大学では，「女性学入門」「ジェンダーの視点から見たアメリカ」，関西学院大学では，「男性社会と女性Ａ(社会のなかの女性)」「男性社会と女性Ｂ（女性と労働)」といった科目が開講されている（2002年度)。これに対して，関西大学では1986年度から総合コースで女性学関連科目が開講されてきたが，２年ごとにテーマを変え，そのたびに専任教員から新しい担任者を探さなければならず，その負担は非常に大きなものとならざるをえない

という問題がある。そのため，今年度は総合コースで女性学関連科目は開講されておらず，来年度以降も開講の予定はない。また，教養科目や専門科目でも，女性学関連科目は，法学部の「法女性学」以外，開講されていない。男女共同参画社会基本法が制定されるなど，近年，女性問題に対する社会的関心が高まってきているなか，関西大学では女性学関連科目がほとんど開講されていないのである。

啓蒙教育から，自己の変革，自己と他者の関係の変革を目指す実践的な教育への移行という段階にあって，関西大学の現状は，それから大きく取り残されているといえる。

大　学　教　育　と　女　性

－２００２年関西大学学生の意識調査－

関西大学人権問題研究室

人権問題研究室女性問題研究班は「性役割と大学教育」をテーマに調査・研究を続けています。今回の『大学教育と女性』調査もその一環です。

関西大学の１年次生と３年次生の全体から無作為抽出した結果、あなたにお願いすることになりました。無記名の調査であり、また結果は統計的に処理されますので、誰がどのように答えたかは知られることはありません。ただ回収率が低い場合は意味のある数値が得難くなりますので、是非積極的に回答して下さい。
なお、調査の分析・研究の結果は『人権問題研究室紀要』にて報告します。

２００２年９月

お　ね　が　い

答えは、あてはまる番号に○をつけてください。その他の回答を選んだ方は（　）に具体的に記入してください。

記入後は、同封の返信用封筒で　**１０月５日（土）**
までに返送してください。（切手はいりません）

問い合わせ　関西大学人権問題研究室
電話　06-6368-1182

あなたとあなたの家族について

1．あなた自身のことについて。（○をつけてください） ①～⑥

・性別〔　女　・　男　〕
・学年〔1年次生・3年次生〕
・部　〔第1部・第2部〕
・学部〔1．法　2．文　3．経　4．商　5．社　6．総情　7．工〕
・浪人の経験は〔1．あり　2．なし〕
・出身高校は〔1．共学　2．別学　3．その他〕

・あなたの兄弟姉妹の構成についてお聞きします。該当するものすべてに○をつけてください。〔1．兄弟姉妹はいない　2．兄　3．弟　4．姉　5．妹〕 ⑦～⑪

・あなたは今〔1．単身で住んでいる　2．家族と同居している　3．その他（　　）〕 ⑫

・あなたは今アルバイトをしていますか。 ⑬

1．大体いつもしている
2．ときどきしている
3．まったくしていない

・アルバイトをしている人へ収入額を聞きます。 ⑭

1．収入は毎月5万円まで
2．収入は毎月5～10万円ぐらい
3．収入は毎月10万円以上
4．その他（　　）

2．あなたのお母さんは。（死別・離別も含んで） ⑮

1．結婚前からずっとフルタイムの仕事をしている
2．再就職後、フルタイムの仕事をしている
3．再就職後、パートの仕事をしている
4．ずっと専業主婦である
5．独立して自営業を営んでいる
6．家族と一緒に自営業を手伝っている
7．農（林・漁）業をしている
8．その他（　　）

3．あなたは保育所や学童保育の経験がありますか。 ⑯

1．零歳の時からずっと
2．1～3歳頃からずっと
3．3歳頃まで
4．3歳以上からずっと
5．小学校から
6．ほんの少しの間
7．まったく経験がない

4．あなたの父親・母親の学歴は。（父親の番号、母親の番号を下の欄に記入してください）

1．中学または高校卒業程度（中退を含む）
2．短期大学卒業
3．四年制の大学卒業（大学院進学者を含む）
4．専門学校（高校卒業が入学の条件となるもの）卒業
5．その他（大学・短大に準ずるものの場合はなるべく具体的に書いてください）
（　　）

父　親	母　親

⑰⑱

あ　な　た　の　大　学　生　活

5．入学前に持っていた大学への期待は主にどういうものでしたか。（○は2つまで） ⑲⑳

1．大学卒業の資格
2．職業など自分の将来を決める
3．友人知人を得る
4．学問や勉学
5．サークル・クラブ
6．ゆっくりする期間
7．その他
（具体的に　　）

6．大学の入学の前と後でイメージや期待した内容と違ったことはありましたか。 ㉑

1．大いに違っていた
2．すこし違っていた
3．ほぼ同じ
4．まったく同じ

（どんなところが……　　）

7.（1）あるサークルの合宿で、食事の後片づけを女性だけがやって、男性はテレビを見たりしていました。そのとき、A子とB子が次のように言いました。あなたはどちらの意見に近いですか。下の1～4の中から選んでください。

> A子：「女性だけやるのは、おかしいわ。男性もやるべきじゃない？」
> B子：「べつに、男性にやってもらわなくてもいいんじゃない。私たち女の子でできるんだから。」

1．A子　　3．どちらかといえばB子　㉒
2．どちらかといえばA子　　4．B子

（2）ところで上の例のような場合、あなたのまわりでは実際には後片づけはどのように行われているでしょうか。 ㉓

1．女性が中心
2．男性が中心
3．男女同じように

8．困ったことがあったとき、相談する相手は誰ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。 ㉔～㉛

1．母親　　5．先生
2．父親　　6．アルバイト先や職場の上司・同僚
3．きょうだい　　7．その他（　　）
4．友だち　　8．誰にも相談しない

9．あなたは次のようなことをしていますか。また、やればできますか。あてはまるところに○をつけてください。 ㉜～㊱

	している	めったにしないがやればできる	したことがない
(1) ごはんを炊く	1	2	3
(2) おかずをつくる	1	2	3
(3) 洗濯をする	1	2	3
(4) 自分の部屋に掃除機をかける	1	2	3
(5) ボタンをつける	1	2	3

将来の職業や人生設計について

10．あなたは今、希望する仕事につけるよう何かしていますか。 ㊲

1．大学で、専門の勉強に重点をおいている
2．大学で、専門以外の勉強に重点をおいている
（例：　　）
3．大学以外の勉強に重点をおいている
（例：　　）
4．特に何もしていない

11. 女性と職業について、最も近い意見に○を１つつけてください。（男女とも答えてください） ㊳

1．ずっと職業は持ち続ける
2．結婚・出産で退職、以後職業は持たない
3．子育て後、再就職
4．職業を持たない

12. 男性と職業について望ましいのは。（あえて１つ選択。男女とも答えてください）

1．家庭を顧みなくても一流企業でバリバリ働き出世をする ㊴
2．安定した企業に就職する
3．収入が少なくても自分の好きな分野で能力を発揮する
4．仕事はそこそこだが、家庭と自分の生き方を大切にする
5．夫婦ともに第一線で仕事ができるよう家事育児も協力しあう
6．将来独立して事業を起こす

13. 女性の人権が尊重されていないと感じるのは、次のどんなことがらですか。（○はいくつでも） ㊵～㊾

1．女子学生の就職難
2．女性が働く性風俗産業
3．ミス・コンテスト
4．「未亡人」という言葉
5．職場でのセクシュアル・ハラスメント
6．職場での昇進、昇格、賃金格差
7．家庭内での夫から妻への暴力
8．夫婦別姓が認められていないこと
9．女性の体の一部を強調したり、媚びたポーズを使用した広告など
10．その他（　　）

14. あなたが会社に就職すると仮定して、重視する条件を３つだけ選んでください。 ㊿～52

1．安定している
2．給料が高い
3．やりがいのある仕事ができる
4．男女とも育児休暇がとれる
5．男女同一賃金である
6．男女とも実力で昇進がきまる
7．休日が多く、残業が少ない
8．福利・厚生施設がよい
9．社会貢献を重視している
10．知名度が高い
11．家族や友人が勧める
12．結婚・出産後も働くことができる
13．女性にお茶くみを強要しない
14．将来性のある職種である

最も重視する条件 □　　二番目に重視する条件 □　　三番目に重視する条件 □

15. あなたがもし生まれかわるとしたら、どちらの性別に生まれかわりたいですか。あてはまるものに○をつけてください。 ⑬

1．男性
2．女性
3．どちらともいえない

（その理由は……　　）

女性観・男性観・結婚観

16. あなたは家庭で「男は男らしく、女は女らしく」とよく言われましたか。 ⑭

1．よく言われた
2．ときどき言われた
3．あまり言われなかった
4．まったく言われなかった

（1．2を選んだ人のみお答えください）
そのように言われたとき、あなたは反発を感じましたか。 ⑮

1．強く感じた
2．あまり感じなかった
3．わからない

17. 世の中には次のような意見がありますが、あなたはそれぞれについてどう思いますか。あてはまるところに○をつけてください。 ⑯～⑳

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
(1) 女性には女性らしさという抑圧がある	1	2	3	4
(2) 男性には男性らしさという抑圧がある	1	2	3	4
(3) 男性は女性の前で弱音をはくべきではない	1	2	3	4
(4) やはり女性は男性に守ってもらいたいものだ	1	2	3	4
(5) デートの際、コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ	1	2	3	4

61～65

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
(6) 性的関係では男性がリードすべきだ	1	2	3	4
(7) 女同士、男同士の同性の結婚も認めるべきだ	1	2	3	4
(8) 本人の自発的意思であっても、売春することはよくない	1	2	3	4
(9) 性風俗店に行く男性は、非難されるべきである	1	2	3	4
(10) 夫婦別姓が認められるのはよいことだ	1	2	3	4

18. 次のような考え方について、あなたはどう思いますか。あてはまるところに○をつけてください。

66～72

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
(1) 有名国立大学に在学している異性は、恋人にしたくない	1	2	3	4
(2) 自分より酒量の多い（アルコールに強い）異性は、恋人にしたくない	1	2	3	4
(3) 恋人とドライブするときは、助手席に座りたくない	1	2	3	4
(4) 夫婦別姓を強く望む異性は、結婚相手にしたくない	1	2	3	4
(5) 結婚相手の収入は自分よりも多くないほうがよい	1	2	3	4
(6) 自分よりさまざまな知識や情報をもっている異性を恋人にしたい	1	2	3	4
(7) 決断力があり、しっかりと自己主張する異性を恋人にしたい	1	2	3	4

教　育　と　男　女　平　等

19. あなたの高校時代での教育についておたずねします。あてはまるところに○をつけてください。 ⑬～⑮

	はい	いいえ	おぼえていない
(1)避妊の方法について、詳しく教えてもらった	1	2	3
(2)妊娠の仕組みについて、詳しく教えてもらった	1	2	3
(3)裁縫、料理について、実習で教えてもらった	1	2	3

20. あなたは、関西大学で女性学の視点を入れたテーマとして、次のうちどんなものを学びたいですか。(○は5つまで) ⑯～⑳

1．夫婦別姓・戸籍制度
2．ジェンダーフリーの教育
3．パートタイム労働など
4．セクシュアル・ハラスメント
5．家父長制
6．「従軍慰安婦」問題
7．子どもの虐待
8．政治と女性
9．共働きと育児
10．海外の女性事情
11．男性学
12．ジェンダー、性差別、性役割分業
13．女性史
14．文学と女性
15．セクシュアル・マイノリティ（同性愛者、トランスジェンダーなど）
16．性教育のあり方
17．買売春、性の商品化
18．メディアとジェンダー
19．性暴力、恋人・夫からの暴力
20．男女雇用機会均等法、就職差別
21．その他（　　）

21. あなたは大学入学後、男女関係や性差別問題に関する学習の機会を得たことがありますか。あればそのすべてに○をつけてください。 ㉑～㉑

1．教養科目の総合コース
2．その他の教養科目
3．教職に関する専門科目
4．その他の専門科目
5．授業以外の学内の講演会、シンポジウム等
6．学生の自主的学習会（サークル等）
7．学内配布の出版物等
8．学外の講演会・シンポジウム等
9．友人との討論
10．教員との討論
11．その他（　　）

22. 男女が望ましい関係を持てる社会にしていくために、関西大学はどのような改善や努力をすべきだと思いますか。あてはまるものに○をいくつでもつけてください。またそのうちで一番重要だと思うことの番号を選んでください。 ⑨②～⑩②

1．関連する授業を増やす
2．関連する講演会、シンポジウムなどを多くする
3．学内で配布される出版物等に関連する記事や論文を多く掲載する
4．教員の意識を改善する
5．事務職員の意識を改善する
6．学生の意識を改善する
7．学生の自主活動を活発にする
8．女性教員を増やす
9．女子学生の比率を高める
10．セクシュアル・ハラスメント防止の取り組みに力を入れる
11．その他（　　）

一番重要だと思うことの番号 [　　] ⑩③

23. 男女が望ましい関係を持てる社会にしていくために、今後大学は教育内容にどのような改革が必要だと思いますか。なるべく具体的に書いてください。 ⑩④

[　　]

⑩⑤

大学をとりまく様々な問題を解決するために、ご意見がありましたら、
お書きください。アンケートに対するご意見もどうぞ。

ご協力ありがとうございました。記入もれがないか、もう一度確認の上、
同封の返信封筒で今すぐ、投函くださいますようお願いします。

基礎集計表

1．以下は各問の単純集計を実数で示したものである。
2．問１の多くは〈Ⅰ．調査の概要〉で示されているので省略した。
3．質問文や選択肢が長いものは短縮した表現になっている。
4．複数回答の場合だけ，〈総計〉という表現にし，他は〈計〉とした。

問１－５．浪人の経験は
1．あり　　2．なし

	計	1	2	無回答
女　性	340	37	302	1
男　性	241	79	162	0

問１－６．出身高校は
1．共学　　2．別学　　3．その他

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	275	62	2	1
男　性	241	168	64	8	1

問１－７．あなたの兄弟姉妹の構成についてお聞きします。
1．兄弟姉妹はいない　　2．兄　　3．弟　　4．姉　　5．妹

	総計	1	2	3	4	5	無回答
女　性	423	34	93	100	91	105	0
男　性	311	19	61	73	82	75	1

問１－８．あなたは今（現在の住まい方）
1．単身で住んでいる　　2．家族と同居している
3．その他

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	80	257	2	0
男　性	241	53	177	11	0

問１－９．１．あなたは今アルバイトをしていますか。
1．大体いつもしている　　2．ときどきしている
3．全くしていない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	161	101	73	5
男　性	241	90	79	68	4

問１－９．２．（アルバイトをしている人へ）収入額を聞きます。
１．収入は毎月５万円まで　　２．収入は毎月５～10万円
３．収入は毎月10万円以上　　４．その他

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	262	152	101	4	3	2
男　性	169	85	70	6	7	1

問２．あなたのお母さんは。（死別・離別も含んで）
１．結婚前からフルタイム　　２．再就職後，フルタイム　　３．再就職後，パートの仕事
４．ずっと専業主婦　　５．独立して自営業　　６．自営業を手伝っている
７．農（林・漁）業　　８．その他

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	無回答
女　性	340	49	18	120	82	7	34	3	26	1
男　性	241	37	5	77	74	12	17	2	15	2

問３．あなたは保育所や学童保育の経験がありますか。
１．零歳の時からずっと　　２．１～３歳頃からずっと　　３．３歳頃まで
４．３歳以上からずっと　　５．小学校から　　６．ほんの少しの間
７．全く経験がない

	計	1	2	3	4	5	6	7	無回答
女　性	340	16	24	6	56	2	18	217	1
男　性	241	7	11	5	50	3	18	145	2

問４－１．あなたの父親の学歴は。
１．中学または高校卒業程度　　２．短期大学卒業　　３．四年制の大学卒業
４．専門学校卒業　　５．その他

	計	1	2	3	4	5	無回答
女　性	340	142	7	169	8	7	7
男　性	241	86	5	130	10	4	6

問４－２．あなたの母親の学歴は。

１．中学または高校卒業程度　２．短期大学卒業　３．四年制の大学卒業
４．専門学校卒業　５．その他

	計	1	2	3	4	5	無回答
女　性	340	151	85	72	27	1	4
男　性	241	108	58	50	16	2	7

問５．入学前に持っていた大学への期待は主にどういうものでしたか。（○は２つまで）

１．大学卒業の資格　２．自分の将来を決める　３．友人知人を得る
４．学問や勉学　５．サークル・クラブ　６．ゆっくりする期間
７．その他

	総計	1	2	3	4	5	6	7	無回答
女　性	649	51	191	141	106	95	55	10	0
男　性	449	54	128	72	84	62	45	4	0

問６．大学の入学の前と後でイメージや期待した内容とは違ったことはありましたか。

１．大いに違っていた　２．すこし違っていた　３．ほぼ同じ
４．全く同じ

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	64	196	79	1	0
男　性	241	67	103	66	5	0

問７－１．食事の後片づけに関する A 子と B 子の意見について，あなたはどちらの意見に近いですか。

１．A 子　２．どちらかといえばA 子
３．どちらかといえばB 子　４．B 子

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	125	124	76	15	0
男　性	241	104	76	44	15	2

問７－２．あなたのまわりでは実際には後片づけはどのように行われているでしょうか。

１．女性が中心　　２．男性が中心　　３．男女同じように

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	169	5	162	3
男　性	241	92	4	144	1

問８．困ったことがあったとき，相談する相手は誰ですか。（○はいくつでも）

１．母親　　２．父親　　３．きょうだい　　４．友だち
５．先生　　６．アルバイト先や職場の上司・同僚　　７．その他
８．誰にも相談しない

	総計	1	2	3	4	5	6	7	8	無回答
女　性	757	204	42	91	291	17	44	44	23	1
男　性	459	97	56	34	178	10	25	16	42	1

問９－１．あなたは次のようなこと（(1)ごはんを炊く）をしていますか。また，やればできますか。

１．している　　２．めったにしないがやればできる
３．したことがない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	157	162	21	0
男　性	241	63	153	23	2

問９－２．あなたは次のようなこと（(2)おかずをつくる）をしていますか。また，やればできますか。

１．している　　２．めったにしないがやればできる
３．したことがない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	121	197	22	0
男　性	241	48	146	46	1

問９－３．あなたは次のようなこと（(3)洗濯をする）をしていますか。また，やればできますか。

１．している　　２．めったにしないがやればできる

３．したことがない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	143	172	24	1
男　性	241	80	120	39	2

問９－４．あなたは次のようなこと（(4)自分の部屋に掃除機をかける）をしていますか。また，やればできますか。

１．している　　２．めったにしないがやればできる

３．したことがない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	229	106	5	0
男　性	241	140	95	6	0

問９－５．あなたは次のようなこと（(5)ボタンをつける）をしていますか。また，やればできますか。

１．している　　２．めったにしないがやればできる

３．したことがない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	169	157	14	0
男　性	241	41	142	55	3

問10．あなたは今，希望する仕事につけるよう何かしていますか。

１．大学での専門の勉強に重点　　２．大学での専門以外の勉強

３．大学以外の勉強に重点　　４．特に何もしていない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	111	19	48	162	0
男　性	241	88	17	27	108	1

問11. 女性と職業について，最も近い意見に○を１つつけてください。

1．職業は持ち続ける　　2．結婚・出産で退職
3．子育て後，再就職　　4．職業を持たない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	183	41	110	5	1
男　性	241	86	49	97	6	3

問12. 男性と職業について望ましいのは。

1．バリバリ働き出世をする　　2．安定した企業に就職する
3．好きな分野で能力発揮　　4．家庭と自分の生き方を大切にする
5．夫婦とも仕事，家事育児　　6．独立して事業を起こす

	計	1	2	3	4	5	6	無回答
女　性	340	1	61	40	133	95	8	2
男　性	241	6	52	50	83	37	12	1

問13. 女性の人権が尊重されていないと感じるのは，次のどんなことがらですか。（○はいくつでも）

1．女子学生の就職難　　2．女性が働く性風俗産業
3．ミスコンテスト　　4．「未亡人」という言葉
5．職場でのセクシュアル・ハラスメント　　6．職場での昇進，昇格，賃金格差
7．家庭内での夫から妻への暴力　　8．夫婦別姓が認められていないこと
9．女性の体の一部を強調したり，媚びたポーズを使用した　　10．その他

	総計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	無回答
女　性	1099	239	46	14	39	210	272	176	41	54	8	0
男　性	600	114	22	12	23	111	156	85	40	17	15	5

問14－１．あなたが会社に就職すると仮定して，最も重視する条件を選んでください。

1．安定している　　2．給料が高い　　3．やりがいのある仕事ができる
4．男女とも育児休暇がとれる　　5．男女同一賃金である
6．男女とも実力で昇進がきまる　　7．休日が多く，残業が少ない
8．福利・厚生施設がよい　　9．社会貢献を重視　　10．知名度が高い
11．家族や友人が勧める　　12．結婚・出産後も働くことができる
13．女性にお茶くみを強要しない　　14．将来性のある職種である

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	無回答
女　性	340	84	18	176	5	6	11	6	4	2	2	0	11	0	15	0
男　性	241	79	15	117	1	1	4	8	2	4	1	0	0	0	9	0

問14－２．あなたが会社に就職すると仮定して，二番目に重視する条件を選んでください。

１．安定している　２．給料が高い　３．やりがいのある仕事ができる
４．男女とも育児休暇がとれる　５．男女同一賃金である
６．男女とも実力で昇進がきまる　７．休日が多く，残業が少ない
８．福利・厚生施設がよい　９．社会貢献を重視　10．知名度が高い
11．家族や友人が勧める　12．結婚・出産後も働くことができる
13．女性にお茶くみを強要しない　14．将来性のある職種である

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	無回答
女　性	340	57	32	52	10	15	29	24	17	10	4	0	36	4	49	1
男　性	241	35	57	39	11	2	17	19	5	19	5	0	3	1	27	1

問14－３．あなたが会社に就職すると仮定して，三番目に重視する条件を選んでください。

１．安定している　２．給料が高い　３．やりがいのある仕事ができる
４．男女とも育児休暇がとれる　５．男女同一賃金である
６．男女とも実力で昇進がきまる　７．休日が多く，残業が少ない
８．福利・厚生施設がよい　９．社会貢献を重視　10．知名度が高い
11．家族や友人が勧める　12．結婚・出産後も働くことができる
13．女性にお茶くみを強要しない　14．将来性のある職種である

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	無回答
女　性	340	33	31	27	19	24	42	26	19	14	11	3	43	12	34	2
男　性	241	26	31	22	11	0	18	34	19	15	18	2	2	4	38	1

問15．あなたがもし生まれ変わるとしたら，どちらの性別に生まれかわりたいですか。

１．男性　２．女性　３．どちらともいえない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	113	152	72	3
男　性	241	135	34	71	1

問16．あなたは家庭で「男は男らしく，女は女らしく」とよく言われましたか。

１．よく言われた　２．ときどき言われた
３．あまり言われなかった　４．まったく言われなかった

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	39	107	136	58	0
男　性	241	24	60	100	55	2

問16－１．そのように言われたときあなたは反発を感じましたか。
１．強く感じた　２．あまり感じなかった　３．わからない

	計	1	2	3	無回答
女　性	107	39	58	7	3
男　性	60	12	41	5	2

問17－１．女性には女性らしさという抑圧がある。
１．そう思う　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	77	158	80	25	0
男　性	241	54	114	50	21	2

問17－２．男性には男性らしさという抑圧がある。
１．そう思う　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	90	163	59	28	0
男　性	241	57	111	49	23	1

問17－３．男性は女性の前で弱音をはくべきではない。
１．そう思う　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	9	33	125	173	0
男　性	241	29	64	59	88	1

問17－４．やはり女性は男性に守ってもらいたいものだ。
１．そう思う　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	77	170	57	36	0
男　性	241	48	108	47	35	3

問17－５．デートの際，コーヒー代ぐらい男性が持つべきだ。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	35	66	101	137	1
男　性	241	52	61	54	72	2

問17－６．性的関係では男性がリードすべきだ。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	36	155	89	59	1
男　性	241	23	95	56	65	2

問17－７．女同士，男同士の同性の結婚も認めるべきだ。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	100	149	60	29	2
男　性	241	47	85	42	65	2

問17－８．本人の自発的意思であっても，売春することはよくない。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	139	89	78	34	0
男　性	241	95	67	42	35	2

問17－９．性風俗店に行く男性は，非難されるべきである。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	53	123	110	53	1
男　性	241	16	43	105	76	1

問17－10．夫婦別姓が認められるのはよいことだ。
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う
3．どちらかといえばそう思わない　4．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	99	156	61	22	2
男　性	241	62	82	51	43	3

問18－1．有名国立大学に在学している異性は，恋人にしたくない。
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う
3．どちらかといえばそう思わない　4．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	5	15	87	232	1
男　性	241	11	18	51	160	1

問18－2．自分より酒量の多い（アルコールに強い）異性は，恋人にしたくない。
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う
3．どちらかといえばそう思わない　4．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	15	16	93	215	1
男　性	241	21	40	42	137	1

問18－3．恋人とドライブするときは，助手席に座りたくない。
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う
3．どちらかといえばそう思わない　4．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	2	5	46	286	1
男　性	241	22	26	43	148	2

問18－4．夫婦別姓を強く望む異性は，結婚相手にしたくない。
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う
3．どちらかといえばそう思わない　4．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	26	77	83	153	1
男　性	241	22	41	69	108	1

問18－５．結婚相手の収入は自分よりも多くないほうがよい。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	4	7	62	265	2
男　性	241	19	47	59	114	2

問18－６．自分よりさまざまな知識や情報をもっている異性を恋人にしたい。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	191	133	12	4	0
男　性	241	77	91	50	20	3

問18－７．決断力があり，しっかりと自己主張する異性を恋人にしたい。
１．そう思う　　２．どちらかといえばそう思う
３．どちらかといえばそう思わない　　４．そう思わない

	計	1	2	3	4	無回答
女　性	340	195	128	15	1	1
男　性	241	79	111	34	15	2

問19－１．高校時代での教育 —— 避妊の方法について詳しく教えてもらった。
１．はい　　２．いいえ　　３．おぼえていない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	211	80	48	1
男　性	241	132	66	39	4

問19－２．高校時代での教育 —— 妊娠の仕組みについて詳しく教えもらった。
１．はい　　２．いいえ　　３．おぼえていない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	251	47	41	0
男　性	241	152	45	41	3

問19－３．高校時代での教育 —— 裁縫，料理について実習で教えてもらった。

１．はい　　２．いいえ　　３．おぼえていない

	計	1	2	3	無回答
女　性	340	308	25	7	0
男　性	241	176	39	23	3

問20．あなたは，関西大学で女性学の視点を入れたテーマとして，次のうちどんなものを学びたいですか。（○は５つまで）

１．夫婦別姓・戸籍制度　２．ジェンダーフリーの教育　３．パートタイム労働など
４．セクシュアル・ハラスメント　５．家父長制　６．「従軍慰安婦」問題
７．子どもの虐待　８．政治と女性　９．共働きと育児　10．海外の女性事情
11．男性学　12．ジェンダー，性差別，性役割分業　13．女性史　14．文学と女性
15．セクシュアル・マイノリティ（同性愛者，トランスジェンダーなど）
16．性教育のあり方　17．買売春，性の商品化　18．メディアとジェンダー
19．性暴力，恋人・夫からの暴力　20．男女雇用機会均等法，就職差別
21．その他

	総計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
女　性	1396	38	50	29	72	26	45	152	33	131	142	56
男　性	870	53	26	14	71	16	32	85	31	66	58	32

	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	無回答
女　性	72	24	22	104	72	56	53	112	103	2	2
男　性	51	16	15	41	46	57	23	53	72	7	5

問21．あなたは大学入学後，男女関係や性差別問題に関する学習の機会を得たことがありますか。（○はいくつでも）

１．教養科目の総合コース　２．その他の教養科目　３．教職に関する専門科目
４．その他の専門科目　５．授業以外の講演会，シンポ　６．学生の自主的学習会
７．学内配布の出版物等　８．学外の講演会，シンポ　９．友人との討論
10．教員との討論　11．その他

	総計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無回答
女　性	430	55	28	13	59	19	2	35	6	49	9	12	143
男　性	294	38	21	8	16	11	3	28	7	28	6	10	118

問22－１．男女が望ましい関係を持てる社会にしていくために，大学で必要な改善や努力の中で一番重要なものは。

１．関連する授業を増やす　２．講演会，映画会などを多く
３．学内出版物の記事等多く　４．教員の意識を改善　５．事務職員の意識を改善
６．学生の意識を改善　７．学生の自主活動を活発に　８．女性教員を増やす
９．女子学生の比率を高める　10．セクシュアル・ハラスメントの防止の取り組み
11．その他

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無回答
女　性	340	112	19	14	29	7	72	28	19	4	22	3	11
男　性	241	55	25	6	33	2	48	15	12	15	17	7	6

問22－２．男女が望ましい関係を持てる社会にしていくために，大学ではどのような改善や努力が必要だと思いますか。（○はいくつでも）

１．関連する授業を増やす　２．講演会，映画会などを多く
３．学内出版物の記事等多く　４．教員の意識を改善　５．事務職員の意識を改善
６．学生の意識を改善　７．学生の自主活動を活発に　８．女性教員を増やす
９．女子学生の比率を高める　10．セクシュアル・ハラスメントの防止の取り組み
11．その他

	総計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無回答
女　性	916	184	61	51	133	77	158	69	63	7	97	8	8
男　性	674	109	60	28	97	59	107	39	53	52	59	7	4